平成元年度

更埴市埋蔵文化財調査報告書

1990

長野県更埴市教育委員会

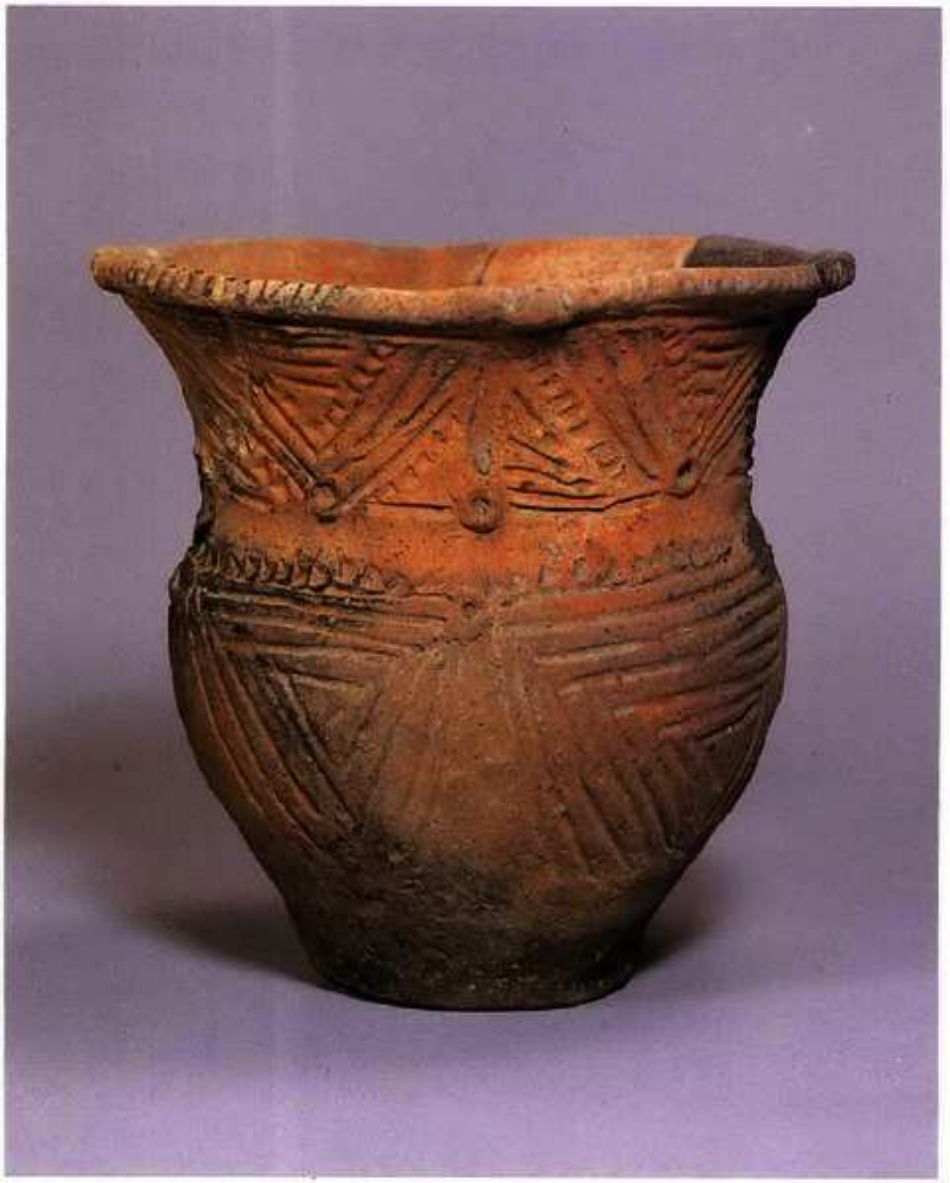
信州大学附属図書館教育学部分館

平成元年度

更埴市埋蔵文化財調査報告書

1990

長野県更埴市教育委員会



序

本年度は、松本市方面より北上してまいりました長野自動車道建設に伴う発掘調査が、本市内でも桑原地区の島林遺跡・小坂西遺跡において、㈱長野県埋蔵文化財センターにより実施されました。今後各種開発事業に伴う埋蔵文化財の保護事業も急増することが予想されております。

こうしたことから、当市では本年度より任意団体の『更埴市遺跡調査会』を解散し、直接市教育委員会で実施することにいたしました。

また、今後の埋蔵文化財の保護に役立てるために、発掘調査報告書を1冊にまとめ、さらに試掘調査・立会調査にいたるまで、調査結果を掲載することにいたしました。本報告書が、埋蔵文化財の保護並びに更埴市の歴史を知る上での一助になれば幸いです。

最後になりましたが、調査の実施にあたり各工事関係者のみなさまには、多大な御協力と御理解を頂きましたことに対し、深く感謝申し上げます。

平成2年3月

更埴市教育委員会

教育長　安藤　敏

例　言

1．本書は、更埴市教育委員会が、平成元年度に実施した埋蔵文化財調査の報告書である。

2．調査は、更埴市教育委員会が主体となり、事務局は社会教育課文化財係が担当した。

更埴市教育委員会事務局

教育長　安藤　敏

社会教育課長　武井豊茂

文化財係長　西沢秀文

文化財係員　矢島宏雄　佐藤信之　青木猛治　山根洋子　宮坂恵子　猿渡美保衣

3．調査担当者は、文化財係担当職員があたり、調査員・調査補助員・作業員を募り、調査を実施した。また、必要に応じて専門家及び研究者等の指導・助言を得て行った。

4．本書は、調査員・調査補助員・作業員等による整理調査を経て、各調査担当者が執筆して、作成した。

5．本書に掲載した位置図は、更埴市都市計画基本図を使用した。

6．本書中の方位は、ことわりがない限り、真北を示している。

7．調査の実施にあたっては、測量基準点の正確な位置を知るために測量業者に委託し、平面直角座標系第Ⅷ系座標値を求めた。

8．各調査の出土遺物・実測図・写真等の全ての資料は、更埴市教育委員会が保管している。なお、資料には各調査毎に調査記号を付し、整理保管されている。

口絵写真説明

荒井遺跡6号住居址出土土器（口径13cm）

目　次

序　例言

平成元年度埋蔵文化財調査概要 …… 1

1　島遺跡　発掘調査 …… 7

2　外西川原遺跡他　発掘調査 …… 31

3　石原A・白石遺跡　発掘調査 …… 69

4　峯・白石遺跡　第2次発掘調査 …… 83

5　松ヶ崎遺跡　発掘調査 …… 107

6　北村遺跡　発掘調査 …… 131

7　荒井遺跡　発掘調査 …… 147

8　古道遺跡他　発掘調査 …… 175

9　馬口遺跡　発掘調査 …… 187

10　城ノ内遺跡　発掘調査 …… 188

11　生仁遺跡　発掘調査 …… 189

12　町浦遺跡　発掘調査 …… 193

13　森将軍塚古墳　発掘調査 …… 195

14～19　試堀調査 …… 199

湯ノ崎遺跡　東沖遺跡　栗佐遺跡群

湯屋遺跡　舞台遺跡　諏訪南沖遺跡

20～32　立会調査 …… 205

小島遺跡　生萱石原遺跡　竜王遺跡

土口北山遺跡　城ノ内遺跡　小島遺跡

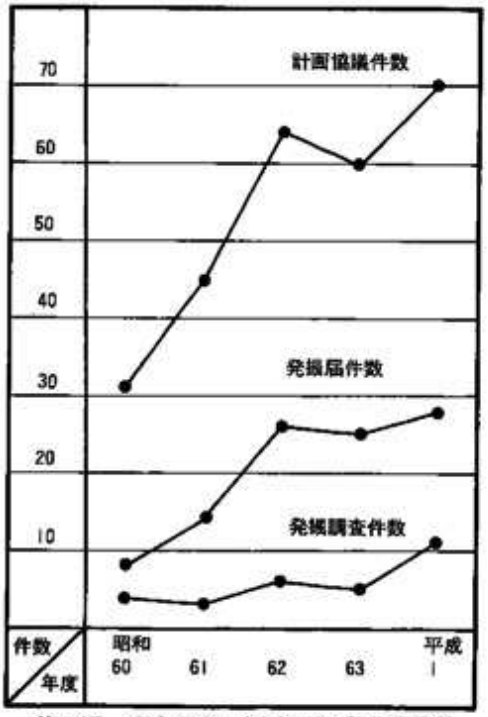
元町遺跡　後安遺跡　更埴条里水田址

小島遺跡　窪河原遺跡　小島遺跡　湯屋遺跡

平成元年度埋蔵文化財調査概要

1　調査体制の整備

本年度から、当市内でも長野自動車道建設に伴う発掘調査が始められた。高速道路の建設に合わせて、公共・民間の各種開発事業が増大してきた。５年前の昭和60年度に比べ、『市宅地開発指導要綱』に基づく“事業計画協議”件数および『文化財保護法』に基づく“土木工事等のための発掘に関する届出”件数共に２倍以上となってきた。



第１図　昭和60年～平成元年度事業件数

本年度における、法57条届出件数は公共事業10件、民間事業18件あった。その内発掘調査を実施したものは、公共事業７件（県事業６件・市事業１件）、民間事業４件である。また、試掘調査５件、立会調査13件を実施した。

このように調査事業量の増大に伴い、取り扱う金額が多額となってきたこと、調査作業中の事故等の責任所在を明確にするために、これまで市教育委員会に代わって発掘調査を実施してきた任意団体の『更埴市遺跡調査会』（昭和55年発足）を解散して、市教育委員会が直接調査を実施することに調査体制の整備がはかられた。

2　事業の概要

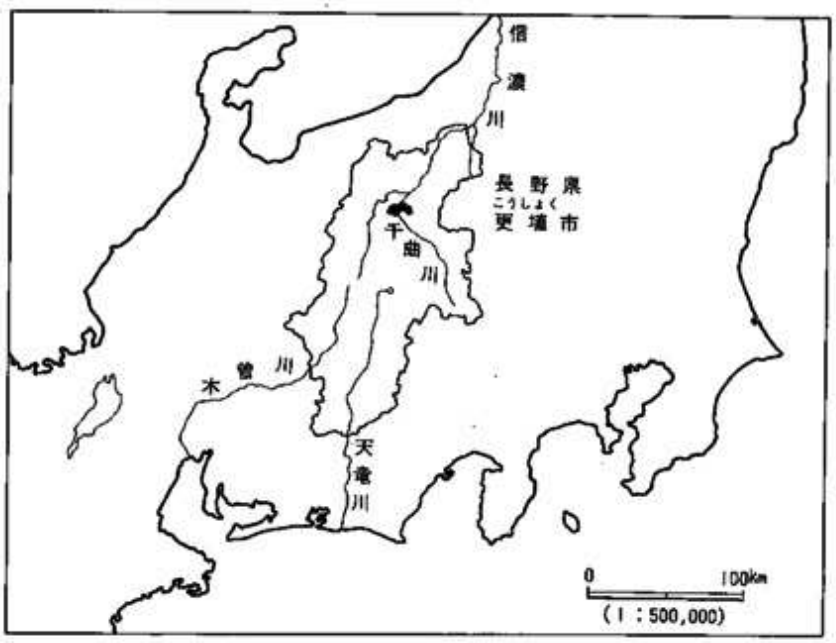
本年度㈱長野県埋蔵文化財センターによって、桑原地区の島林遺跡・小坂西遺跡の調査が行われた。共に更埴市では数少ない縄文時代の遺跡であり、住居址も検出されている。八幡地区の外西川原遺跡は、昨年度調査された宮川遺跡と一連の弥生時代後期の大集落と思われ、北陸地方に関係が求められる土器なども出土している。粟佐地区の北村遺跡は、古墳時代の遺跡で、明確に遺構を検出できなかったが、遺物の中には畿内の影響を受けた遺物も見られる。屋代地区では荒井遺跡・松ヶ崎遺跡の調査が行われ、荒井遺跡では弥生時代中期の住居址、中世居館址の堀などが検出された。松ヶ崎遺跡では平安時代の住居址が著しく重なって検出されている。

平成元年度調査一覧表

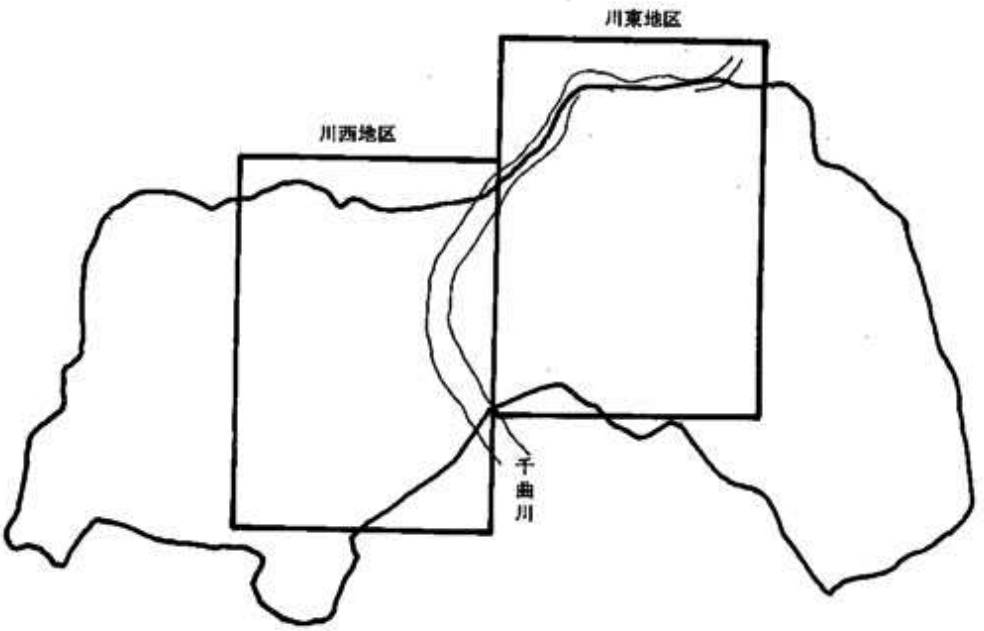
番号	遺跡名	所在地区	原因事業	原因者
	〔発掘調査〕			
1	島遺跡	生萱	公共—農業関連事業	長野地方事務所
2	外西川原遺跡他	八幡	公共—ほ場整備事業	長野地方事務所
3	石原A・白石遺跡	八幡	公共—工業団地建設事業	長野県土地開発公社
4	峯・白石遺跡	八幡	公共—工業団地建設事業	長野県土地開発公社
5	松ヶ崎遺跡	屋代	公共—市道建設事業	更埴市
6	北村遺跡	粟佐	公共—県道拡幅改良事業	更埴建設事務所
7	荒井遺跡	屋代	公共—高速道関連事業	長野県土地開発公社
8	古道遺跡他	屋代	民間—電気事業	中部電力㈱
9	馬口遺跡	屋代	公共—高校改築事業	屋代高校
10	城ノ内遺跡	屋代	民間—工場建設事業	長野電子工業㈱
11	生仁遺跡	雨宮	民間—宅地造成事業	㈲フジ総業
12	町浦遺跡	雨宮	民間—店舗建設事業	更埴中部農業協同組合
13	森将軍塚古墳	森	公共—遺跡整備事業	更埴市
	〔試掘調査〕			
14	湯ノ崎遺跡	桑原	民間—宅地造成事業	㈲高栄開発
15	東沖遺跡	杭瀬下	民間—店舗建設事業	中信建設㈱
16	粟佐遺跡群	小島	民間—集合住宅建設事業	永山建設㈱
17	湯屋遺跡	桑原	民間—駐車場他建設事業	㈱河本シャーリング
18	舞台遺跡	八幡	公共—ほ場整備事業	長野地方事務所
19	諏訪南沖遺跡	粟佐	公共—市道建設事業	更埴市
	〔立会調査〕			
20	小島遺跡	小島	民間—店舗建設事業	唐木田豊秋
21	生萱石原遺跡	生萱	民間—倉庫建設事業	㈲八峰商事
22	竜王遺跡	屋代	民間—倉庫建設事業	日本梱包運輸倉庫㈱
23	土口北山遺跡	土口	公共—宅地造成事業	長野高速道事務所
24	城ノ内遺跡	雨宮	民間—工場建設事業	堀川産業㈱
25	小島遺跡	小島	公共—県道拡幅改良事業	更埴建設事務所
26	元町遺跡	桑原	民間—宅地造成事業	㈲高栄開発
27	後安遺跡	桑原	民間—工場建設事業	㈲風間鉄工
28	更埴条里・屯址	屋代	民間—宅地造成事業	㈲フジ総業
29	小島遺跡	小島	公共—駐輪場建設事業	更埴市
30	窪河原遺跡	屋代	民間—駐車場建設事業	岩佐靖文
31	小島遺跡	小島	民間—店舗建設事業	市川泉
32	湯屋遺跡	桑原	民間—宅地造成事業	西松・安藤組J.V.
	〔㈶長野県埋蔵文化財センター発掘調査〕			
33	鳥林遺跡	桑原	公共—高速道路建設事業	日本道路公団
34	小坂西遺跡	桑原	公共—高速道路建設事業	日本道路公団

調査期間	調査面積	調査費用	備考
H1. 4. 7～5. 1	300㎡	2,700,000円	
5. 8～7. 26	2,000㎡	5,040,000円	一部国・県補助事業実施
S63. 9. 12～12. 22	1,000㎡	2,320,000円	発掘調査のみ
H1. 5. 8～6. 21	1,300㎡	2,500,000円	S63年度分整理報告含
6. 21～9. 30	1,400㎡	5,884,933円	
8. 17～9. 16	300㎡	1,250,000円	
9. 18～10. 24	1,000㎡	3,600,000円	
10. 30～H2. 1. 5	160㎡	970,000円	一部立会調査実施
11. 18～12. 8	1,000㎡	3,470,000円	発掘調査のみ
H2. 3. 5～3. 27	300㎡	1,012,000円	発掘調査のみ
H1. 5. 8～5. 13	100㎡	350,000円	
10. 3～10. 4	120㎡	185,000円	
7. 31～9. 2	300㎡	60,000,000円	第9年次調査及び保存整備
5. 15	トレンチ5ヶ所	重機・作業員	工事未着工
5. 17	トレンチ2ヶ所	重機	立会調査実施
5. 25	トレンチ7ヶ所	重機	工事未着工
9. 6	トレンチ3ヶ所	重機	
10. 30～10. 31	トレンチ25ヶ所	90,210円	平成2年度発掘調査予定
H2. 1. 16	トレンチ7ヶ所	31,518円	平成2年度発掘調査予定
H1. 4. 5		なし	工事実施
4. 13		なし	工事実施
4. 17		なし	工事実施
4. 20		なし	工事実施
5. 17		なし	工事実施
8. 1		なし	工事実施
8. 17		なし	工事実施
10. 3～10. 4		作業員	工事実施
11. 14		なし	工事実施
12. 9		なし	工事実施
12. 25		なし	工事実施
H2. 2. 3		なし	工事実施
3. 30		なし	工事実施
H1. 4. 10～6. 8	4,000㎡		縄文～平安時代　住居址4棟他
9. 18～11. 4	4,000㎡		縄文～中世　住居址14棟他

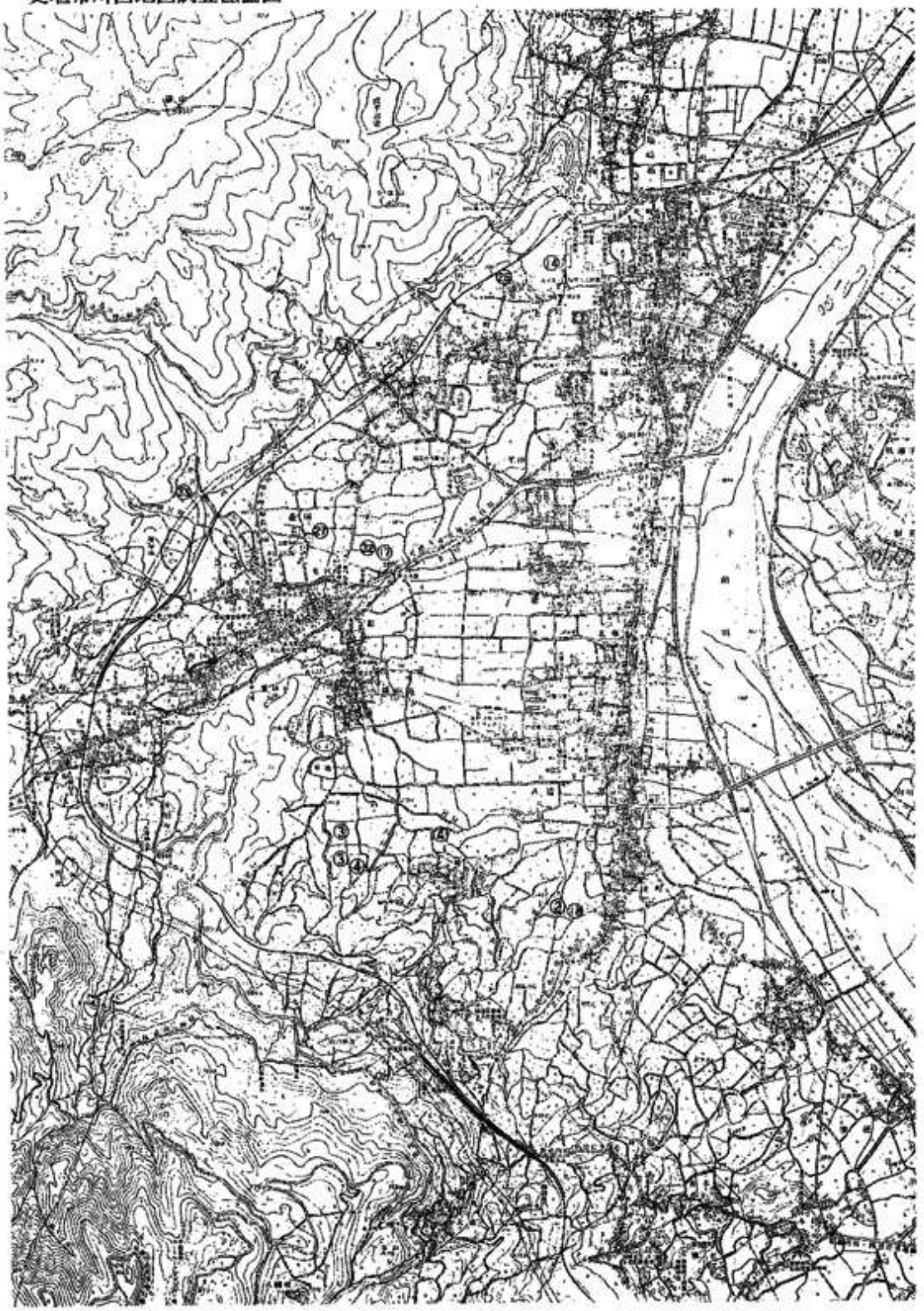
長野県更埴市位置図



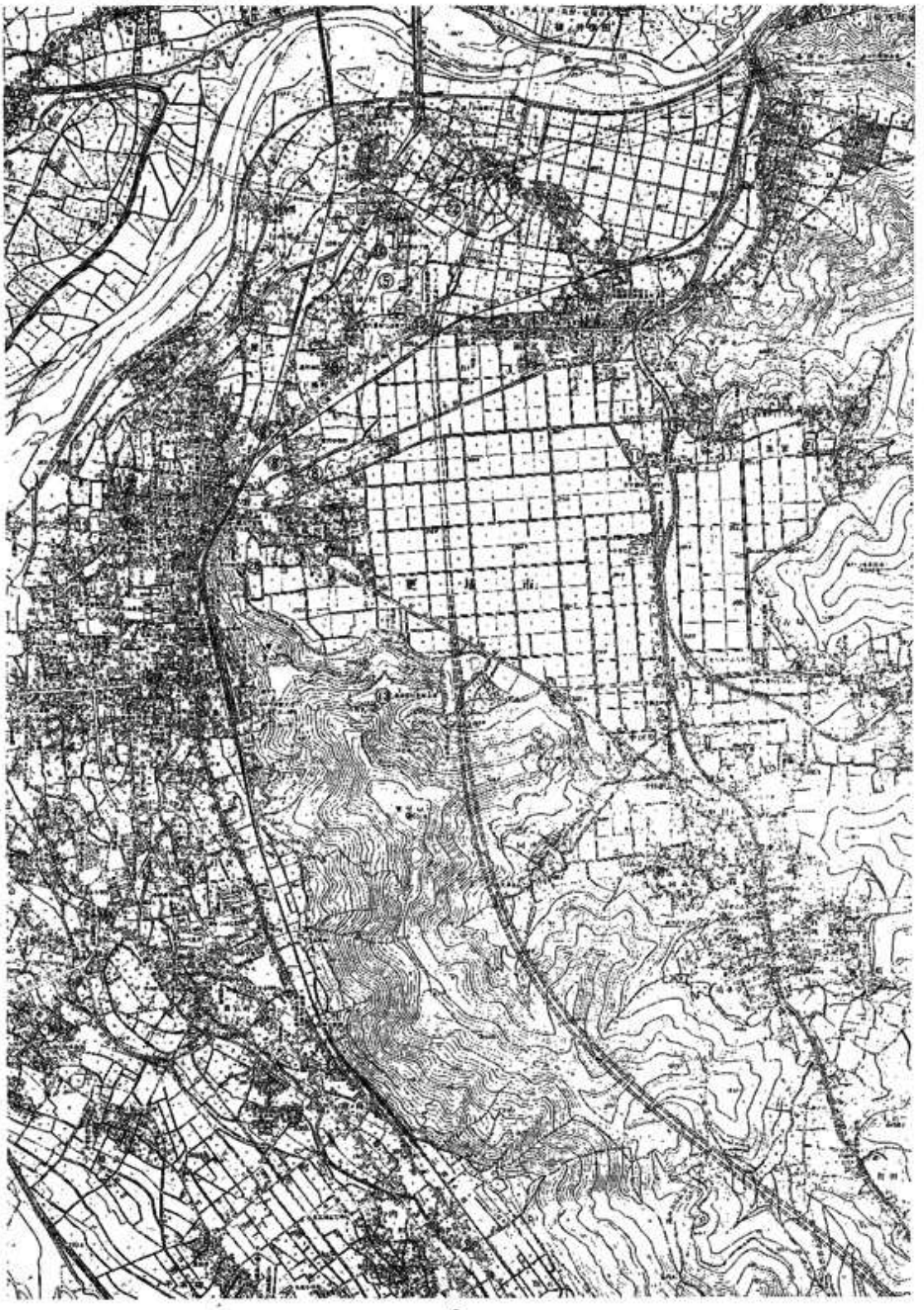
長野県更埴市位置図



更埴市川西地区調査位置図



更埴市川東地区調査位置図



1　島遺跡　発掘調査

I　調査の概要

1　調査遺跡名　屋代遺跡群島遺跡　（市No.32－1　調査記号ＳＭ2）

2　所在地及び　長野県更埴市大字生萱字島

　　土地所有者　長野県

3　原因及び　公共事業＝県営湛水防除事業雨宮第Ⅱ期地区工事

　　事業者　長野地方事務所

4　調査の内容　発掘調査（300㎡）

　　プラント・オパール分析による水田検出

5　調査期間　平成元年4月7日～同年5月1日（19日間）

6　調査費用　総額2,700,000円　全額事業者負担

7　調査主体者　更埴市教育委員会

　　担当者　佐藤信之

　　調査員　贄田　明　山根洋子

　　補助員　笹澤正史

　　参加者　市川睦雄　久保啓子　小林敦彦　小林昌子　小林芳白

　　小松由里子　酒井幸治郎　坂口城子　白石正生

　　高野貞子　富沢豊延　西沢直子　宮崎恵子　村山　豊

　　分析委託　古環境研究所

8　種別・時期　集落址　弥生中期～平安時代

9　遺構・遺物　弥生時代　中期住居址1棟

　　平安時代　住居址5棟・土坑1基・埋設土器1基

　　出土遺物総数　弥生式土器コンテナ1箱

　　平安時代土器コンテナ4箱

　　埴輪破片5点　打製石斧1点　石皿1点

II　調査の経過

昨年度に実施された県営雨宮地区湛水防除事業のII期事業として、生萱の島地籍に遊水池とポンプ場が建設されることとなった。市教育委員会では昭和63年12月に実施した試掘調査の結果から、平安時代の集落址があり、水田址も存在する可能性があると考え、発掘調査の計画書作成に入った。

昭和64年１月７日に県教育委員会より、事前に発掘調査を実施し記録保存をはかるよう回答があり、工事が夏場に行われるため、４月中に発掘調査を完了できるよう準備を開始した。２月13日に調査費用を2,700,000円と積算し、長野地方事務所へ通知。４月７日に長野地方事務所長と更埴市長の間に発掘調査の委託契約が締結され、その日から発掘調査を開始した。天候にも恵まれ、５月１日に無事発掘調査を完了することができた。

III　調査日誌

４月７日　作業開始、重機入り表土を除去する。焼土検出。

12日　焼土を検出した部分にトレンチを設定したが住居址は明確にならない。

14日　新たに煙道２本を検出したがプランが分からない。堆積土器を実測取り上げ。

17日　弥生中期の住居址検出。

19日　長野地方事務所視察。

20日　測量用杭設定。

22日　３号住居址より実測を開始する。

27日　信州大学医学部西沢寿晃氏、野尻湖博物館中村由克氏現地指導。

28日　古環境研究所によりプラント・オパール分析用の土壌を深掘部分より採取する。

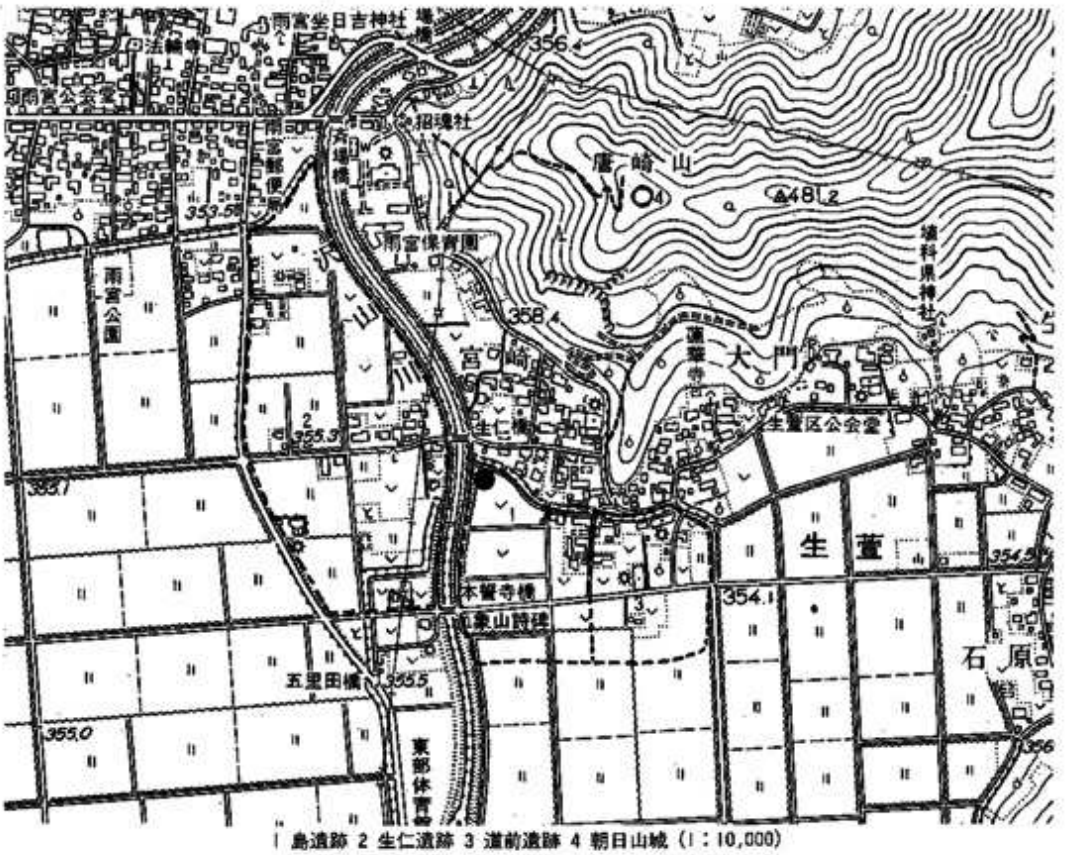
５月１日　遺構実測完了、現場における調査は完了とし、機材を県営ほ場整備の現場へ移す。

Ⅳ　遺跡の環境

島遺跡は更埴市大字生萱地区にあって、通称屋代田圃と呼ばれる千曲川自然堤防の後背湿地の東隅にあたる。西側には鏡台山より北流する沢山川があり、雨宮を経て1kmほど下流で千曲川と合流する。また北側には金山川が流れているが、以前は南側を流れたこともあり、島状になっていたと言われている。遺跡の背後には唐崎山が西へと突き出しており、遺跡はその南斜面と、水田として利用されている湿地帯との接点であり、畑地として利用されている。

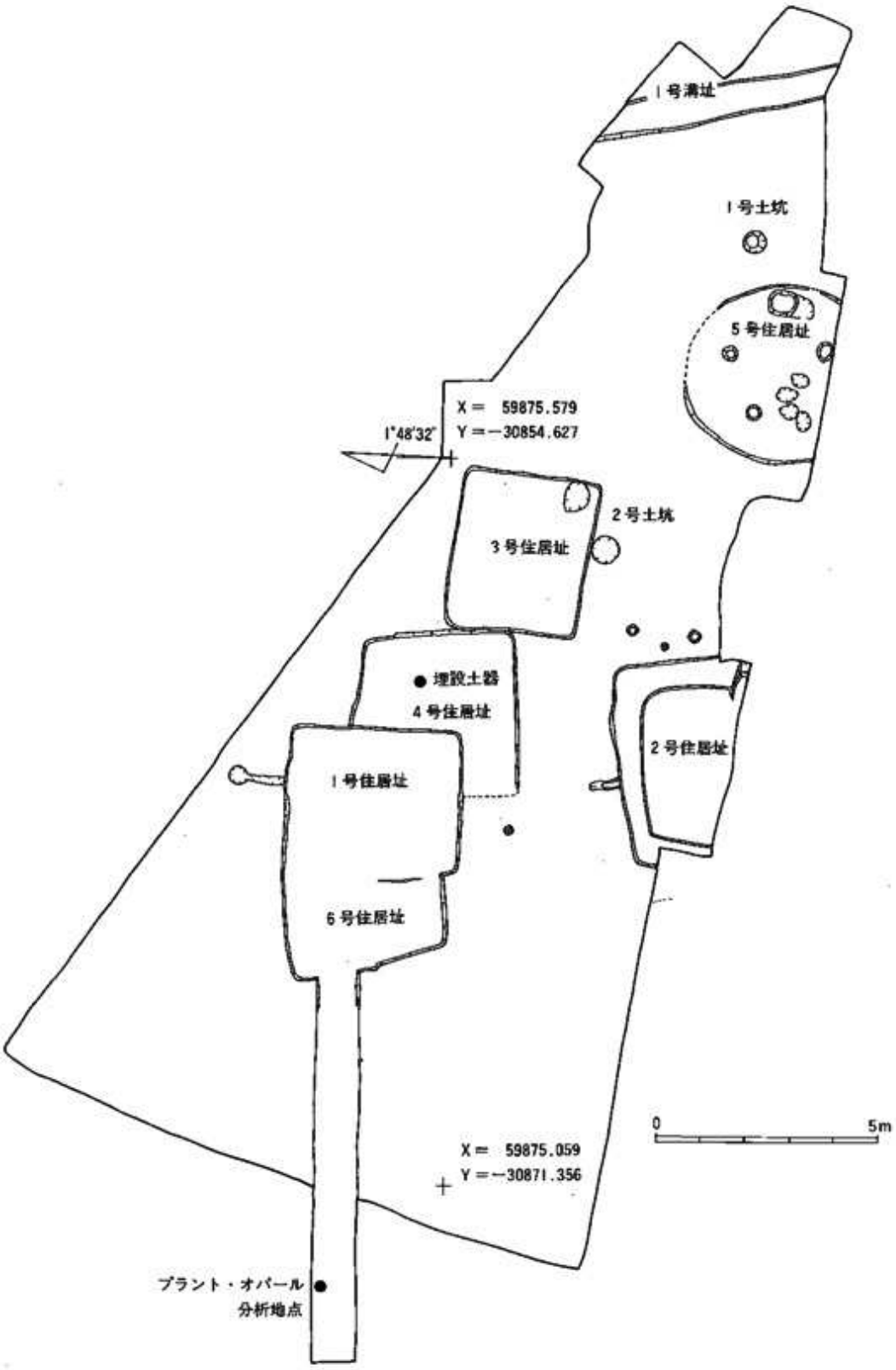
沢山川をはさんで西側には弥生時代中期から中世の遺跡として知られる生仁遺跡が展開しており、昭和43年から44年そして63年に発掘調査が実施され、卜骨、和銅開珎などが出土している。また南側には本遺跡と一連の遺跡とも考えられる道前遺跡が広がっており、昭和45年に発掘調査が行われ土壙墓などが検出されている。

さらに背後の唐崎山には、この地の土豪雨宮氏によって築かれたとされる朝日山城（唐崎山城）がある。その館が生仁にあったとされており、明治初期までその痕跡をとどめていたという。



1 島遺跡 2 生仁遺跡 3 道前遺跡 4 朝日山城（1：10,000）

第1図　遺跡位置図


1号溝址
1号土坑
5号住居址
X＝ 59875.579
Y＝−30854.627
1°48′32″
2号土坑
3号住居址
● 埋設土器
4号住居址
2号住居址
1号住居址
6号住居址
0
5m
X＝ 59875.059
Y＝−30871.356
プラント・オパール
分析地点

第2図　遺構全体図

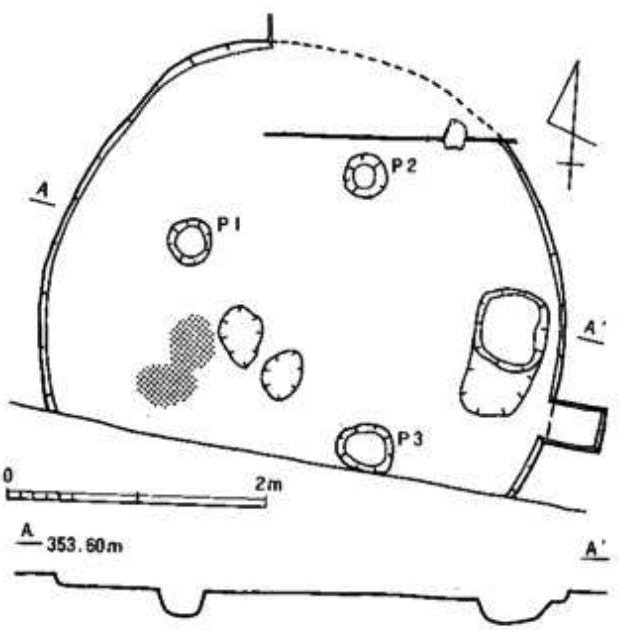
V　遺構と遺物

島遺跡より検出された遺構は、住居址７棟、土坑２基、溝址１本などである。これらのうち住居址１棟は弥生時代と考えられるが、他は平安時代の遺構と考えられる。また西側には水田址の存在が想定されたが、土層断面の観察では明らかにならなかったため、プラント・オパールの分析を実施した。

５号住居址
（図版１・２・５・８）

調査区東側より検出された住居址で、南側は調査区外へと続いている。北側を調査時に破壊してしまったが、直径４ｍほどの円形の住居址で、壁高は最大10cmほどを測ることができた。床面は炉と思われる焼土付近は良く締っており顕著であったが、壁際は不明確であった。柱穴は３本検出されているが、深さ20cmほどと浅いものであった。また東側にも方形に20cmほどの掘り込みが見られるが、住居址との関係は明らかでない。

出土遺物の多くは床面より10cmほど浮いた状態で出土している。１は推定器高57cmを測ることができる大形の甕で、胴部上半には櫛描による羽状文が施され、頸部には櫛描平行線を施しその上を列点で飾っている。胴部文様が施された部分は、調整のハケをそのまま残しているが、胴下半及び内面はミガキにより消されている。口縁端部にはＬＲの縄文が施文されて



第３図　５号住居址

いる。２も甕で胴部上半に櫛描の縦羽状を施し、頸部には櫛描平行線が巡らされている。口縁端部にはＲＬの縄文が施されている。３は壺であるが口縁部と底部を欠いている。ハケの後荒いミガキが施された胴部には太い沈線８本が横位に巡らされている。４は壺５は甕の底部と思われ、内面にはハケを残しているが外面はヘラミガキが施されている。６・７は櫛描波状文が施された甕の胴部破片であり、８は１同様櫛描による羽状文が施された大形甕の破片である。９～13は壺の破片で太い沈線による横帯文や重弧文が施され、13を除き画された中にはＬＲの縄文が施されている。14～18は土器片を利用した円板で、14～16の中央部分には一孔が穿たれており、15・16には櫛描波状文が見られる。いずれも周囲は敲打の後研磨されている。磨製石庖丁である19は、穿孔部分より折れているが残存部で10.5cmを測ることができる大形品で、刃部は両刃で直線的となり、穿孔は両側から行われている。

１号住居址
（図版３・５）

調査区中央付近より検出された住居址であり、東側で４号住居址西側で６号住居址を切って構築されている。規模は南北４ｍ東西3.5mほどであり、ほぼ真北に主軸を持つ。最大壁高はカマド付近で40cmほどを測るが、南壁から西壁は不明確で一部推定による部分がある。床面は比較的明確であったが、軟弱であった。北壁に作られたカマドは右袖部に石が使用されており、煙道は90cmほど伸び円形の煙出しとなる。

出土遺物は少ない。１～３は土師器坏で内面はミガキが施されており、黒色処理があったと思われるが、二次焼成のためか僅かに残る１を除き観察できない。体部は直線的に外開しており底径も大きい。４・５は須恵器坏で底部に糸切痕を残しており、５は高台が付く。６・７は須恵器坏蓋で内弯気味に開き端部に至る。８はロクロ調整された小形甕で、底部付近には手持ちのヘラケズリが施されている。９は外面に細かなカキ目が施されたロクロ甕で、胴部より僅かにくびれた頸部より、「く」の字状に外開して口縁部となる。口縁端部は平面をなしている。

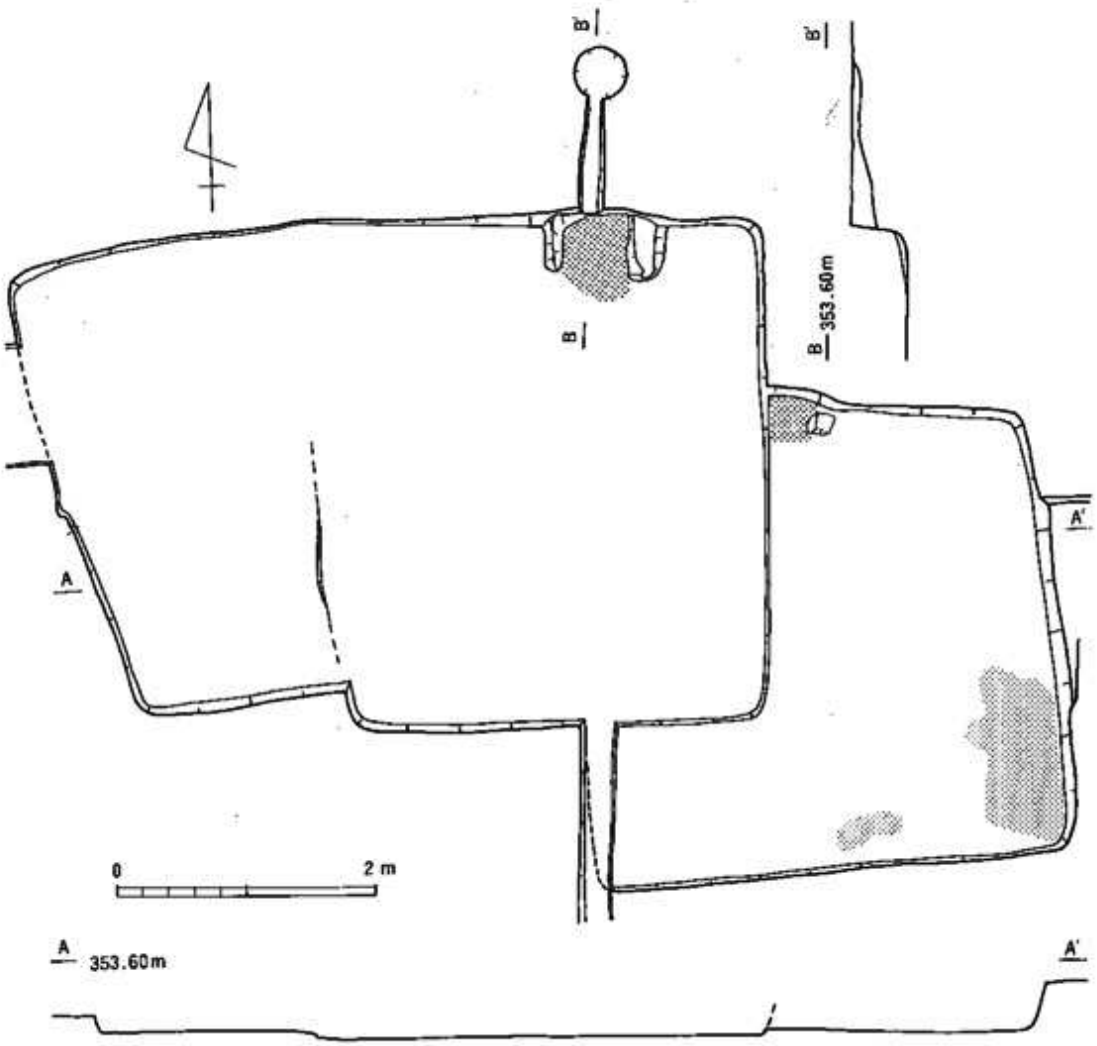
４号住居址
（図版３・５・９）

１号住居址の東側に作られた住居址で、カマドより西側は１号住居址に切られ、東側上部には３号住居址が構築されていた。規模は3.8mほどの不整方形で、主軸をＮ－５°－Ｗに持っている。壁高は最大35cmを測るが、１号住居址同様明確でない。カマドは北壁に作られているが、西側は１号住居址に切られている。右袖には角柱の石が立てられており、火床には厚く焼土が堆積している。南東隅では床面から５cmほど上面に炭化物が広がっていた。

出土遺物は少ない。1～3は土師器坏で3は内面黒色処理がなされている。底部はいずれもヘラによるケズリ、ナデが施され、また底径が大きく体部が直線的に外開する。4の須恵器坏も底部には同様の処理が施されている。5は頸部が「く」の字状となる甕で、口縁部は直線的に外開する。器厚は薄く仕上げられている。

2号住居址
(図版3・6・9)

調査区中央部分より検出された住居址で、南側は調査区外へと続いている。1棟の住居址と考え掘り下げを始めたが、床面に段があり火床が切られていることから、内側にもう1棟の住居址が存在することが分かった。

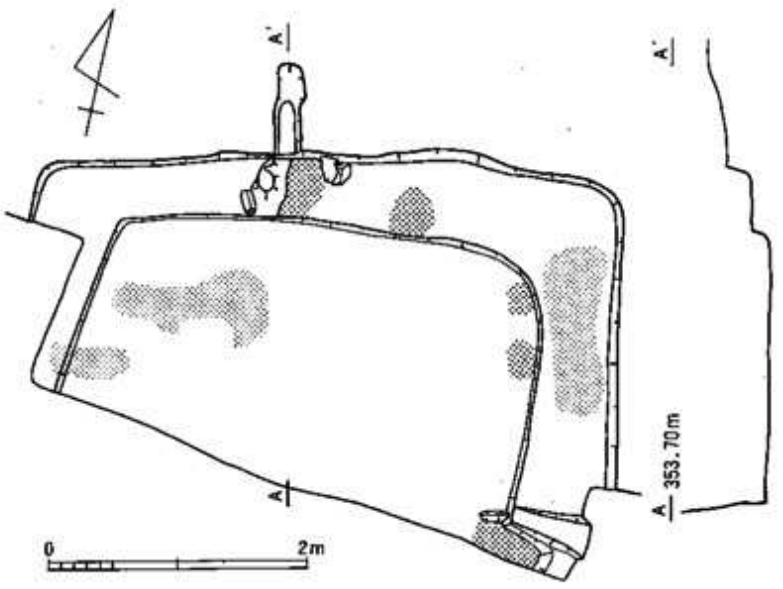


第4図　1・4・6号住居址

しかしすでに大半の掘り下げを終えていたため、新たな住居址としては扱わなかった。外周の住居址の規模は東西4.6mで、主軸をN－97°－Eに持つ。カマドは北壁やや西寄りに作られており、袖には石が使われ、煙道が70cmほど伸びている。カマドの東側にもう1ヶ所火床であったと思われる焼土化した床と壁面が見られることから、当初東側に作られたカマドが西側に移されたものと思われる。壁高は25cmほどであるが明確でない。内側の住居址は東西3.7mほどで、主軸はN－13°－Eに持つ。カマドは東壁に突出して作られている。床面に焼土・炭化物が広がっていることから、焼失住居址の可能性がある。外側の住居址のカマドを切っていることから内側の住居址のほうが新しい。

出土遺物は少なく、図化できたものは坏と坏蓋のみである。1・2は土師器で1は内面黒色処理が見られる。比較的厚手で底部から明確な稜をなさずに、内弯して口縁部となる。3～6は須恵器で底部調整は、3がヘラケズリ、4が糸切り後ヘラケズリ、5・6が糸切りとなっている。7・8は坏蓋であるが共に天井部つまみを欠いている。

3号住居址（図版6）　調査区中央より検出された住居址で西側の一部が4号住居址の上面に掛かっている。規模は東西3.6m南北の3mの方形で、主軸をN－8°－Wに持つ。カマドは東壁に作られており、両袖の部分には石が据えられてい



第5図　2号住居址

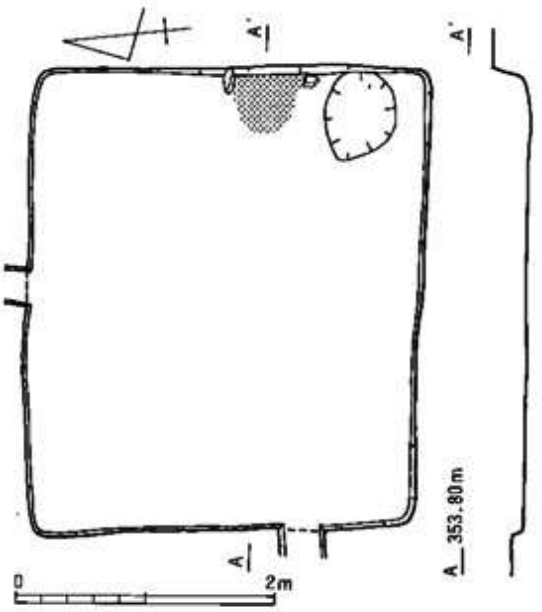
た。カマドの南側には径60cm深さ15cmほどの掘り込みがあり、遺物の多くはこの内部より出土している。壁高はカマド付近で25cmほどを測るが、壁床共明確でないため、他の部分は10cmほどであった。

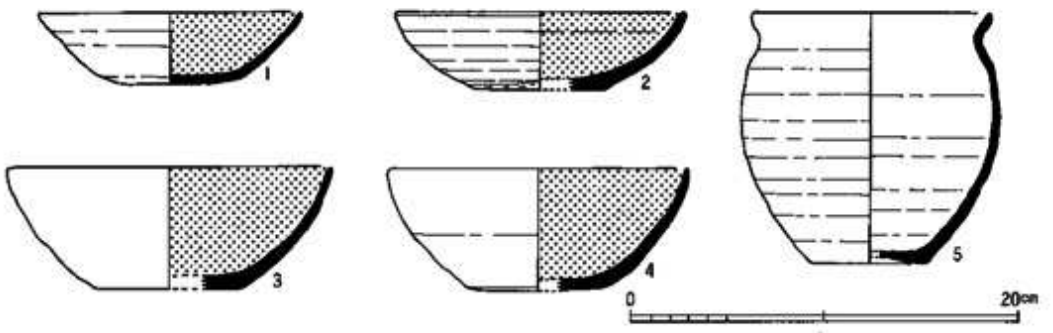
出土遺物は少ない。1～4は土師器坏でいずれも内面黒色処理が施されている。口径に対して器高が小さい1・2と口径・器高共に大きい3・4がある。底部はすべてヘラケズリが施されている。5はロクロ調整された小形甕で底部は糸切りである。

1号土坑（図版7・9）

1号住居址の東側より検出された遺構で、地山層を覆う黒褐色土層中より検出された遺構のため、上部を削ってしまった。残存部分で径50cm深さ17cmほどであるが、遺物の出土状態から深さ30cm径70cm前後であったと考えられる。底部に平担面を持っておらず、半球状を呈している。調査から遺物が埋設された可能性を判断することはできなかった。

土師器坏1～4のうち、高台が付く4は内面黒色処理が見られる。いずれも底部には糸切り痕を残しており、粗雑な作

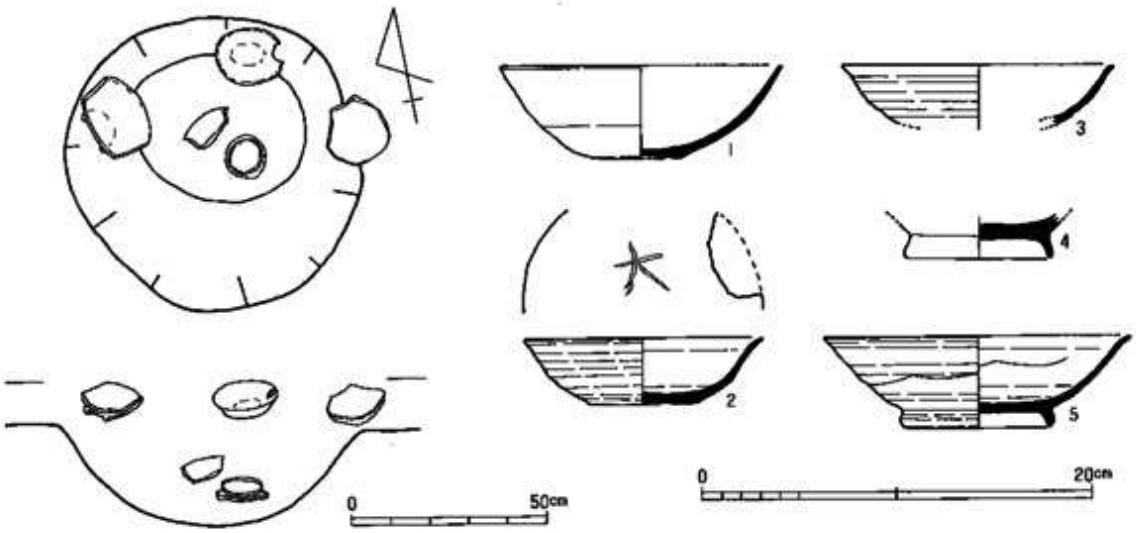




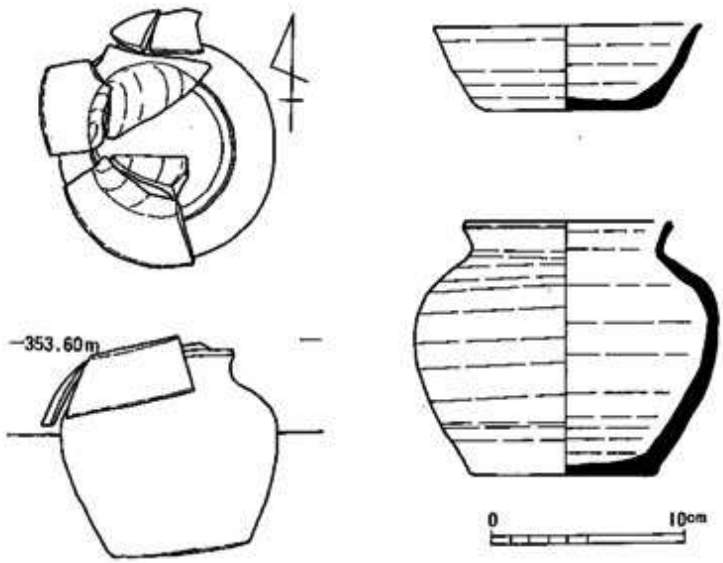
第6図　3号住居址及び出土遺物

りとなっている。また淡い黄褐色を呈しており、焼成も良いとは言えない。5の灰釉陶器碗は釉が漬け掛けされていて、内面には重ね焼きの痕跡を残している。体部下半にはケズリを施しておらず、高台も鋭さを失っている。

埋設土器（図版7・9）　1号住居址覆土中より検出された遺構である。掘り込みを検出することはできなかったが、甕を正位に立て坏を蓋としてかぶせ、埋設されたもの



第7図　1号土坑及び出土遺物



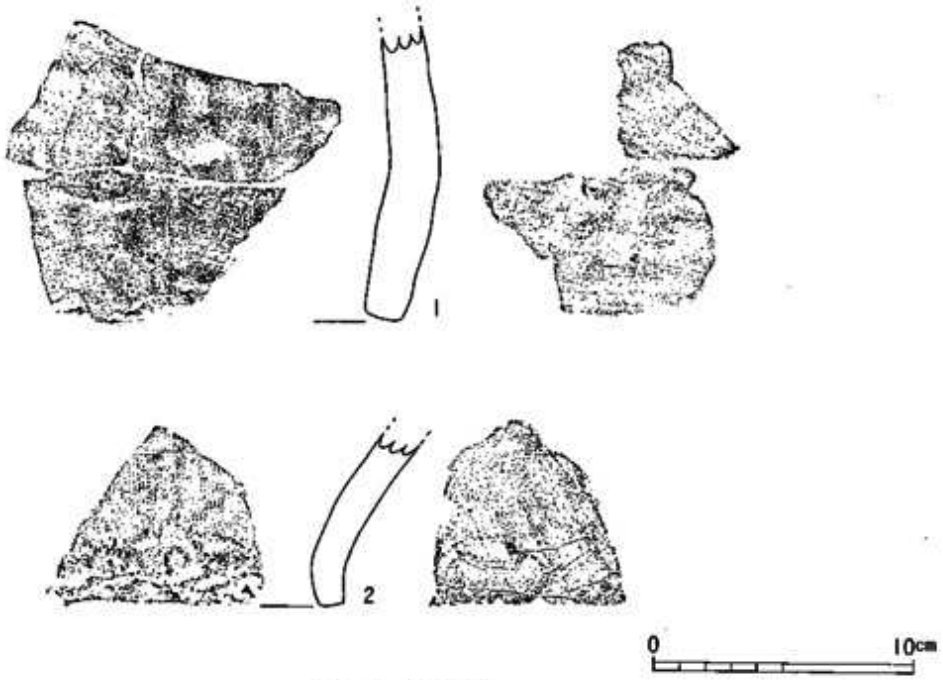
第8図　埋設土器

と思われる。甕内の土を洗浄したが、内部に遺物の存在を認めることはできなかった。

蓋として利用されていた須恵器の坏は、底部に糸切り痕を残しており、底径が大きく体部は直線的に開いている。また焼成は不良で灰白色となる。須恵器甕も底部に糸切り痕を残しており、最大径となる胴部上半より内弯して頸部となる。短く外反して口縁部となり、端部は鋭く面取りされている。焼成は良く外面の大半と内面底部には自然釉が付着している。

その他の遺物

1と2は住居址内から出土した埴輪の破片である。1は1号住居址と、4号住居址から出土した破片が接合したもので、円筒埴輪と思われるものの底部である。外面はナデを施しているが凹凸が残り、内面はヨコ・ナナメハケが施されている。底端部が丸味を帯びており、安定していないため底部径は復元できなかった。胎土は密で、ところどころに5㎜程の砂粒が混じる。橙赤褐色を呈し、内外面には黒斑がみられる。2は4号住居址から出土した円筒埴輪の底部と思われる。ゆるやかに内弯する1とは様相が異なり、底端部付近でややくびれた体部は、徐々に上方へ外開してゆく。外面はタテハケを施しており、底端部付近には底部調整が施されている。内面は荒れておりはっきりしないが、板状工具によるナデが施されている。胎土は1と同様、密である。



第9図　出土埴輪

VI まとめ

遺跡は島と呼ばれる字名が示すよう、沢山川と金山川の合流地点に形成された、三角洲状の部分に位置しており、おそらく平安時代の集落址か、あるいは水田址になるものと考え調査を開始したが、弥生時代からすでに居住地として利用されていたことが判明した。

5号住居址は、弥生時代中期の住居址で、直径4mほどの円形プランとなる。更埴市内で検出されている同形の住居址には、昭和43年に行われた生仁遺跡の調査の際検出された、Y4号住居址とY6号住居址があり、前者が栗林式、後者が箱清水式に比定されている。しかし遺構の重複が激しく、不明確な点が多い。今回検出された5号住居址はこれに次ぐものとなる。南側が調査区外にあるため、全容を知ることはできなかったが、他の遺構との重複はなく、やや小形ではあるが明確なプランとなっている。

また出土遺物も点数は少ないが完形に近いものがあり、甕に施された櫛描羽状文や壺の太筆沈線から、栗林II式土器に比定されるものと思われ、更埴市では数少ない遺物群である。

古墳時代の土器等集落址に関係する遺物の出土はなかったが、埴輪片が出土しており注目される。島遺跡の南東部、宮崎・北山・大門地区には鳥見山古墳・生萱北山古墳群（4基）があり、これら5基のうちいずれかの古墳から埴輪を採取して、再利用したこと等が考えられる。埴輪は1点は確実に有黒斑であり、外面をナデたその様相は、土口将軍塚古墳・森将軍塚2号墳出土の埴輪と共通するものをもつ。この地域に5世紀代の古墳が存在することを示唆する貴重な資料である。

平安時代の住居址は5棟検出されているが、この地域が沢山川と金山川の堆積、浸食によって形成されているためか、プランの検出は容易でなかった。したがって推定による部分も多い。カマドは3号住居址と2号住居址の内側より検出された住居址が東壁に作られており、他は北側に作られている。出土遺物は少ないが、須恵器坏の底部調整をみると3・4号住居址はヘラケズリ、1号住居址は糸切り痕を残すものが主体をなしている。

1号土坑は掘り込み内に土器が埋納されたものであり、更埴市上ノ田（うえのだ）遺跡の例などから、墓とも考えられる。

プラント・
オパール分析

実施者　古環境研究所

1はじめに　この調査は、プラント・オパール分析を用いて、島遺跡における水田跡の探査を試みたものである。以下に調査結果を報告する。なお、現地調査は1989年4月28日に行った。

2試　料　調査地点の土層は、1層～5層に分層された。各層の堆積時期などは不明である。試料は、容量50cm³の採土管などを用いて、各層ごとに約10cm間隔で採取した。試料数は計15点である。

3分析法　プラント・オパールの抽出と定量は、「プラント・オパール定量分析法（藤原，1976）」をもとに、次の手順で行った。

(1) 試料土の絶乾（105℃・24時間）、仮比重測定
(2) 試料土約1gを秤量、ガラスビーズ添加（直径約40μm、約0.02g）
※電子分析天秤により1万分の1gの精度で秤量
(3) 電気炉灰化法による脱有機物処理
(4) 超音波による分散（150W・26KHZ・15分間）
(5) 沈底法による微粒子（20μm以下）除去、乾燥
(6) 封入剤（オイキット）中に分散、プレパラート作成
(7) 検鏡・計数

同定は、機動細胞珪酸体に由来するプラント・オパール（以下、プラント・オパールと略す）をおもな対象とし、400倍の偏光顕微鏡下で行った。計数は、ガラスビーズ個数が300以上になるまで行った。これはほぼプレパラート1枚分の精査に相当する。試料1gあたりのガラスビーズ個数に、計数されたプラント・オパールとガラスビーズ個数の比率をかけて、試料1g中のプラント・オパール個数を求めた。また、この値に試料の仮比重と各植物の換算係数（機動細胞珪酸体1個あたりの植物体乾重、単位：10^{-5}g）をかけて、単位面積で層厚1cmあたりの植物体生産量を算出した。

換算係数は、イネは赤米、ヨシ属はヨシ、タケ亜科はゴキダケの値を用いた。その値は、それぞれ2.94（種実重は1.03）、6.31、0.48である（杉山・藤原，1987）。

4分析結果　プラント・オパール分析の結果を表1、表2および第10図に示す。なお、稲作跡の探査が主目的であるため、同定および定量は、イネ、ヨシ属、タケ亜科、ウシクサ族（ススキやチガヤなどが含まれる）、キビ族（ヒエなどが含まれる）の主要な5分類群に限定した。

5考　察　(1)　稲作の可能性について

1層上部（現表土）から5層下部（210cm深）まで連続的に分析を行った。その結果、全ての試料からイネのプラント・オパールが検出された。このうち、1層上部（現表土）については、最近の水田耕作に由来するものと考えられる。また、1層下部および2層ではプラント・オパール密度が4,300～6,300個／gと比較的高い値であり、明らかなピークが認められた。したがって、これらの層位で稲作が行われた可能性は高いと考えられる。なお、その他の層についても稲作が行われた可能性は考えられるが、プラント・オパール密度が比較的低いことから、上層や他所からの混入の危険性も否定できない。

プラント・オパール密度が低い原因としては、①稲作期間が短かったこと、②土壌の堆積速度が速かったこと、③稲わらが水田外に持ち出されたことなども考えられるが、ここでの原因は不明である。

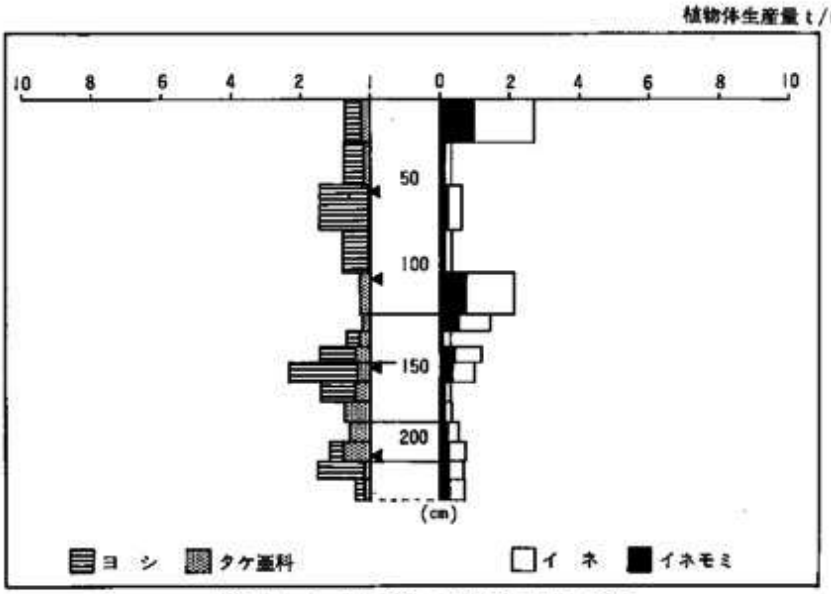
(2)　稲籾の生産量の推定

イネのプラント・オパールが検出された各層で稲作が行われていたと仮定して、そこで生産された稲籾の総量を推定した（表1参照）。また、当時の稲籾の年間生産量を面積10aあたり100kgとし、稲わらがすべて水田内に還元されたと仮定して、各層で稲作が営まれた期間（延べ）を推定した。これらの結果をまとめて次表に示す。

表1　稲籾生産総量および稲作期間の推定値

層　位	生産総量（t／10a）	稲作期間（年間）	備　考
1	49.9	499	
2	9.2	92	
3	5.9	59	
4	4.8	48	
5	4.8	48	

（注）　概算値であるため、あくまでも参考程度と考えられたい。



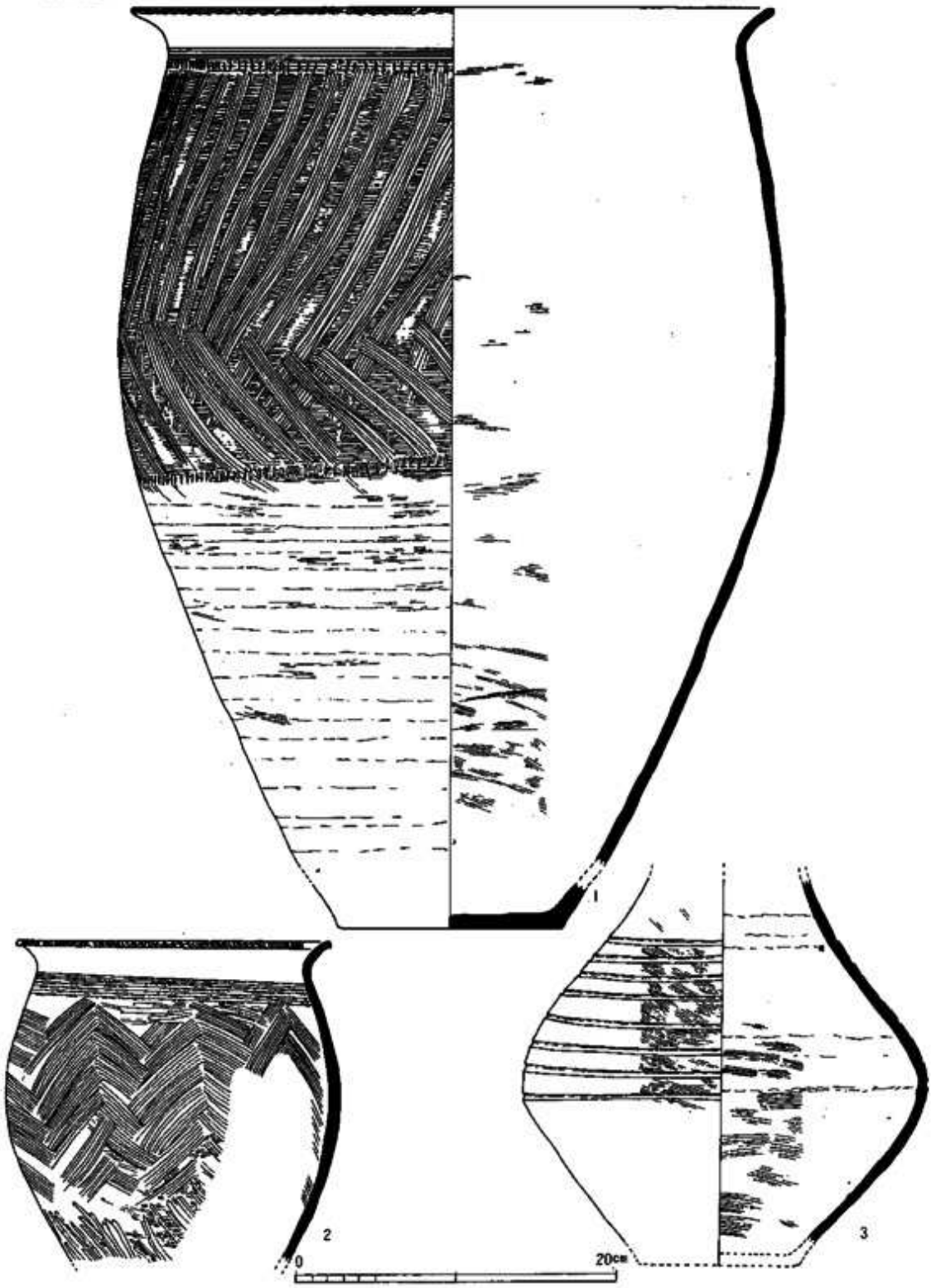
第10図　おもな植物の推定生産量と変遷

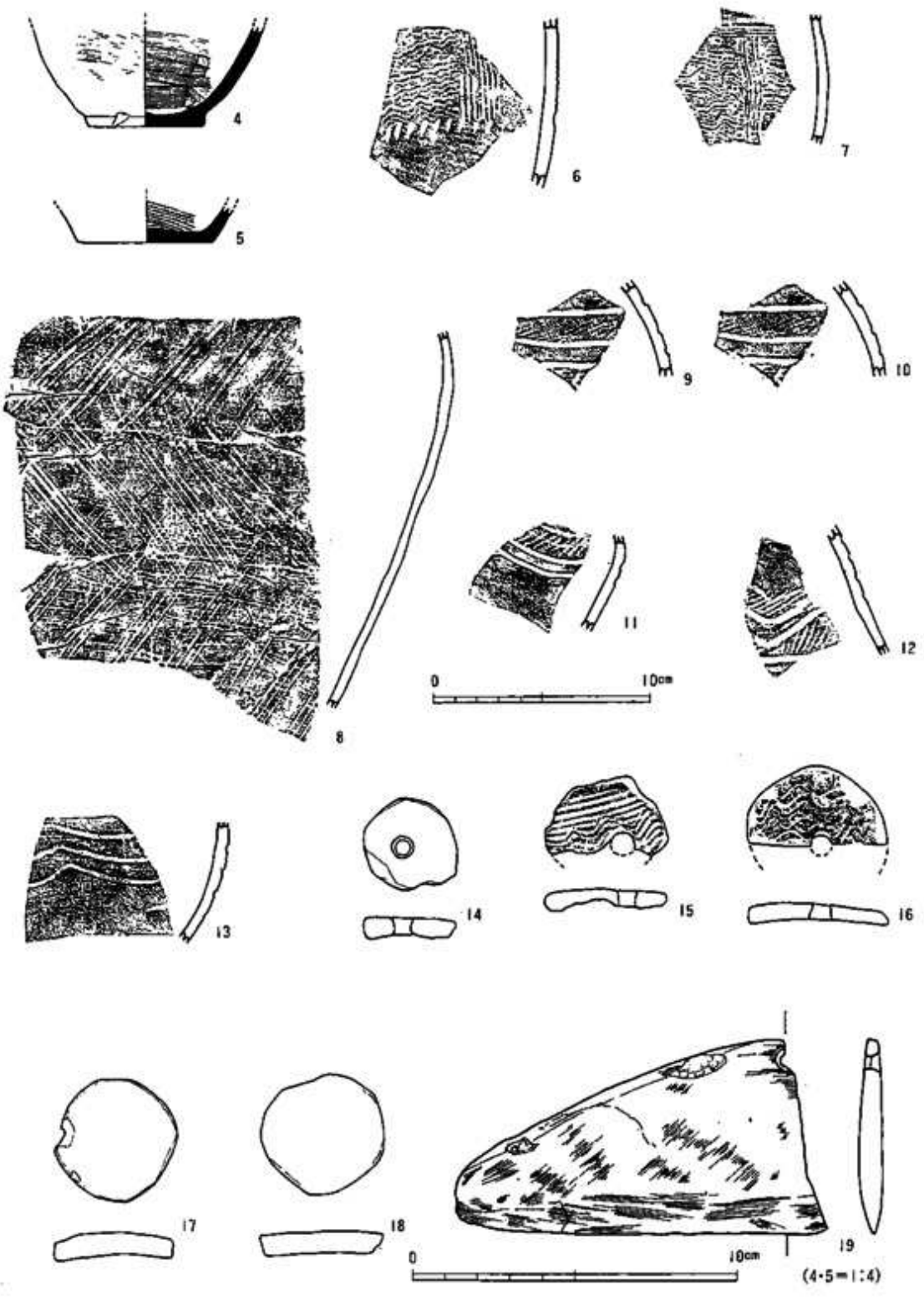
試料名	イネ	ヨシ属	タケ亜科	ウシクサ族	キビ族
1－1	8,000	800	4,400	0	0
1－2	900	900	2,800	900	900
1－3	1,800	1,800	900	0	0
1－4	900	900	900	0	0
1－5	6,300	0	5,400	0	0
2－1	4,300	0	3,400	0	0
2－2	800	800	5,000	0	0
2－3	3,600	1,800	7,200	0	0
3－1	2,800	2,800	6,600	0	0
3－2	800	1,700	6,900	0	0
3－3	900	900	12,000	0	0
4－1	1,800	0	12,100	0	0
4－2	2,600	1,700	15,700	0	0
5－1	2,800	2,800	4,600	0	0
5－2	3,100	700	4,600	700	0

表2　試料1gあたりのプラント・オパール

図版 1

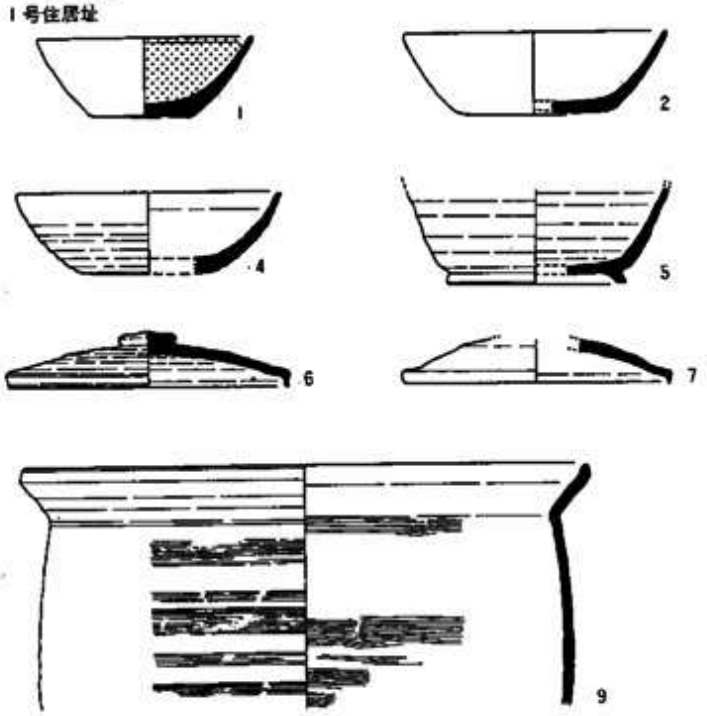
5号住居址



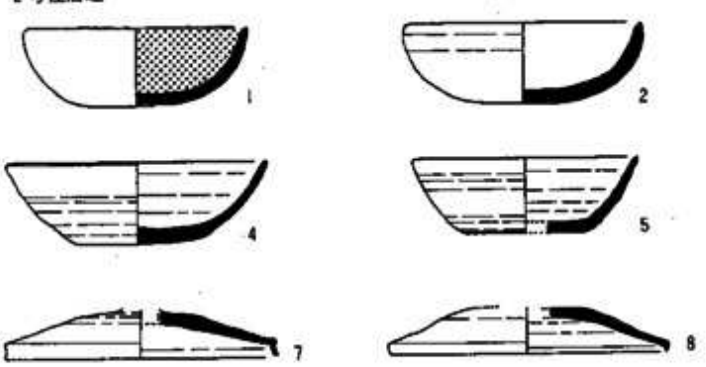

4
5
6
7
8
9
10
11
12
0
10cm
13
14
15
16
17
18
19
0
10cm
(4·5=1:4)

図版 3

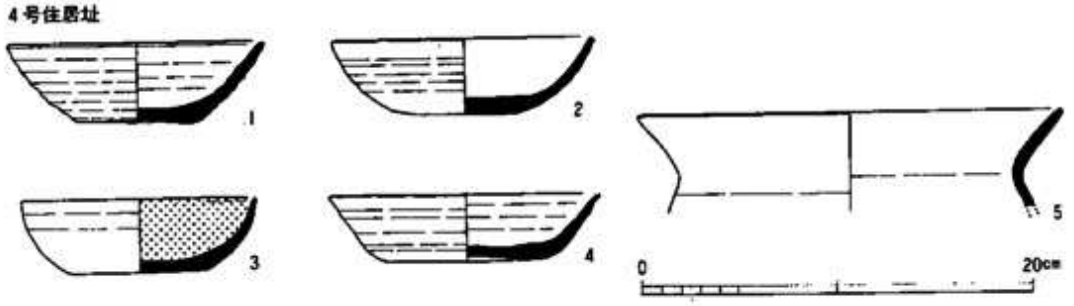
1 号住居址

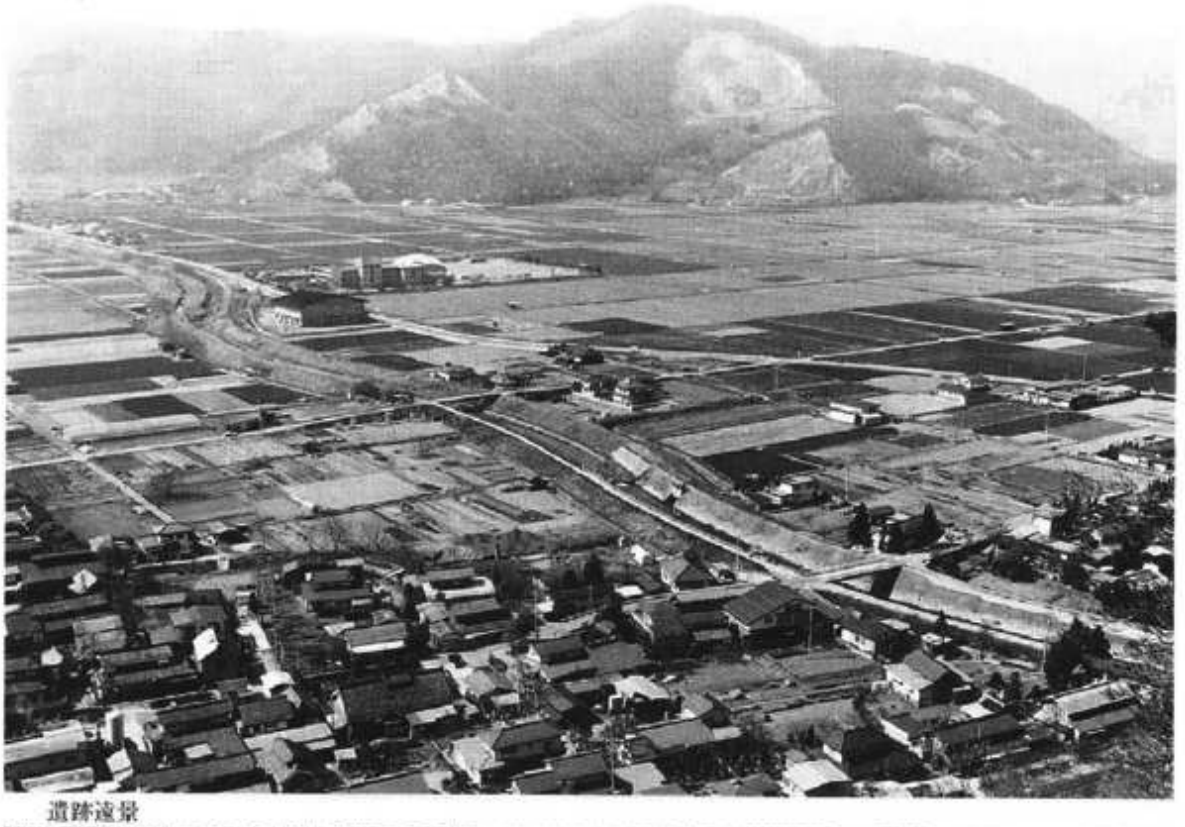


2 号住居址



4 号住居址

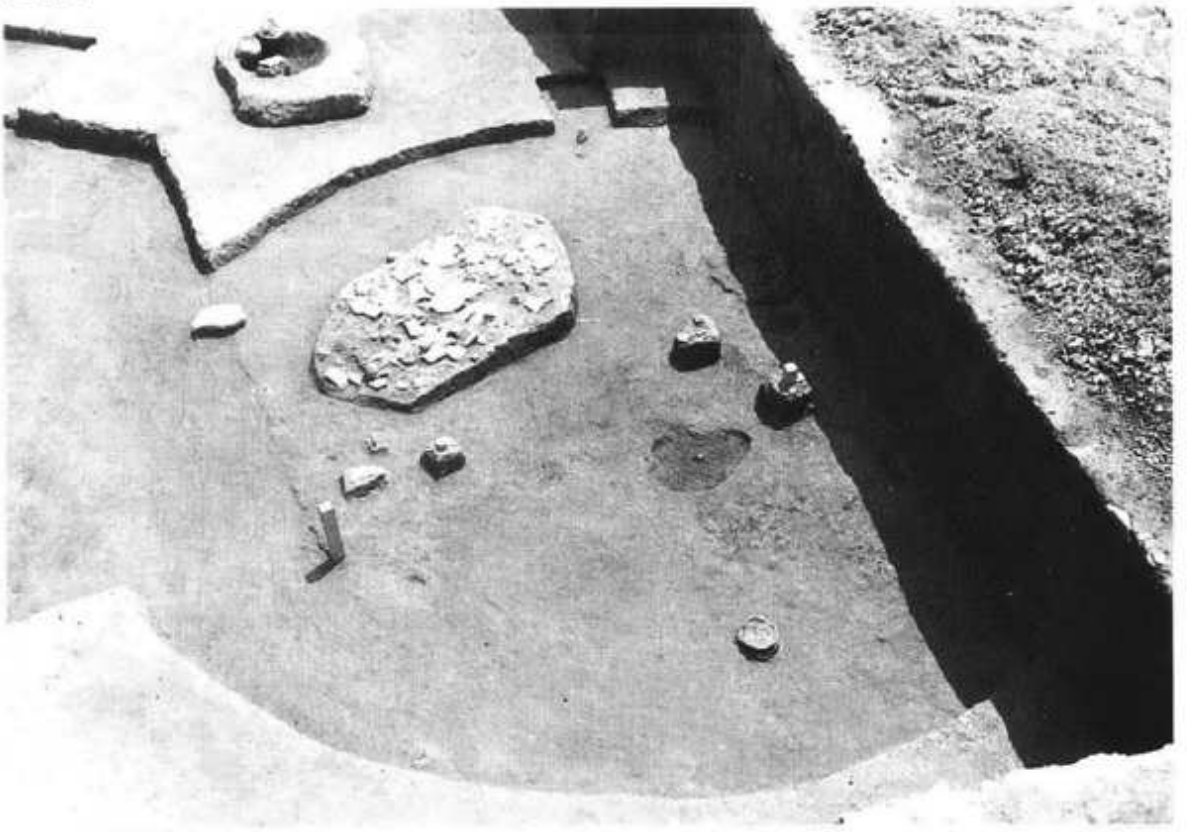




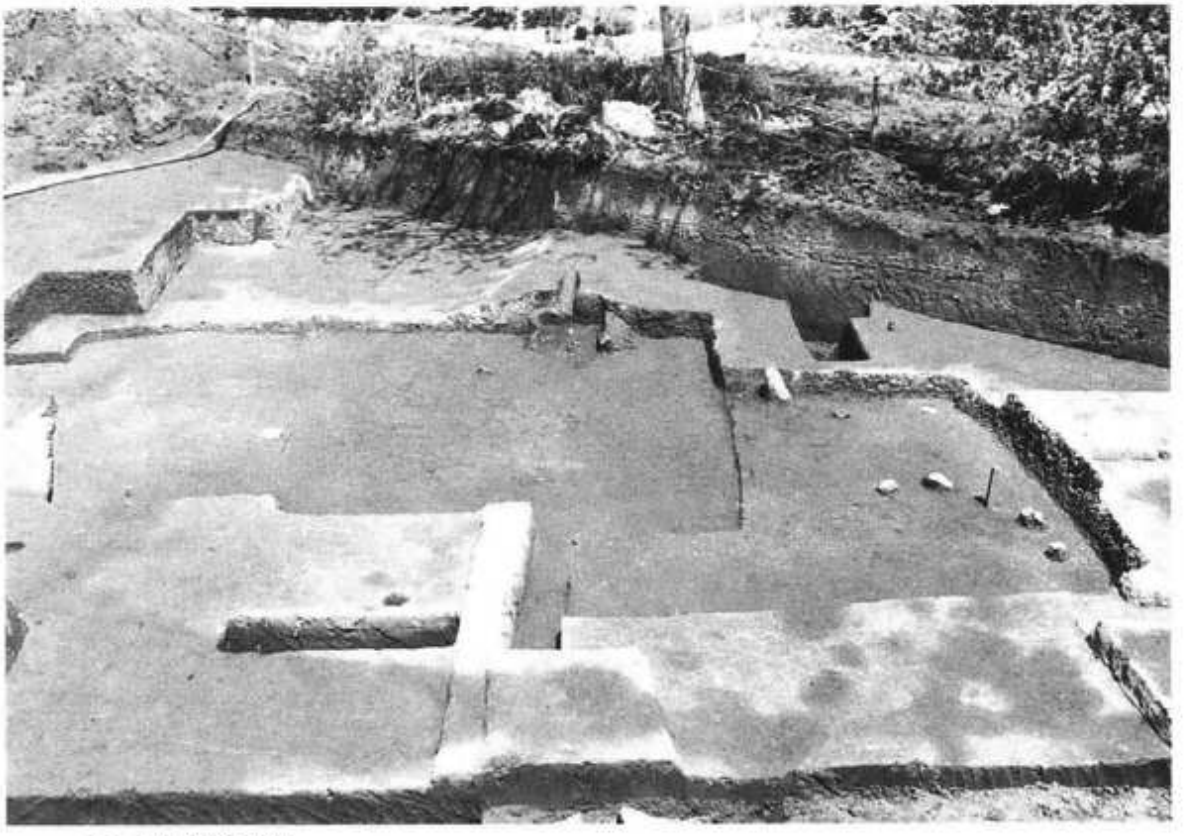
遺跡遠景

調査区全景

図版 5

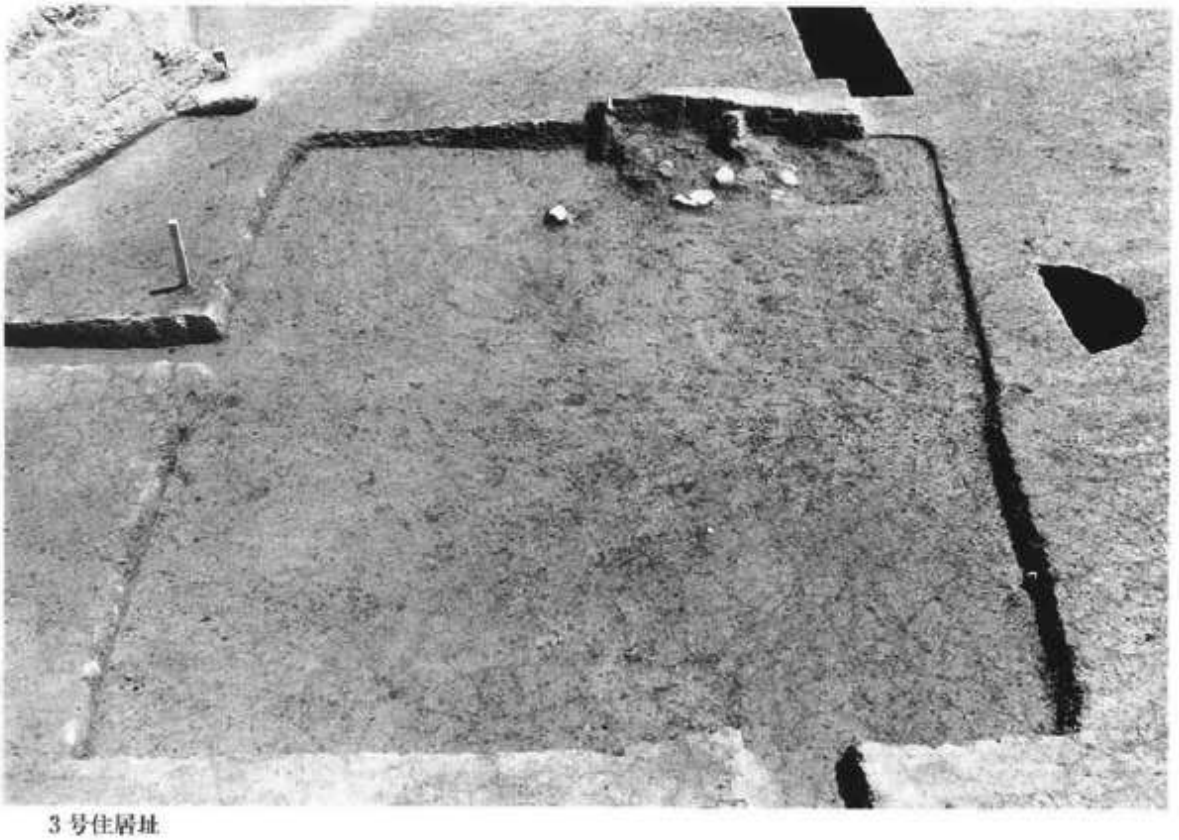


5 号住居址



1 ・ 4 ・ 6 号住居址

2 号住居址



3 号住居址

図版 7

1号土坑

埋設土器

調査風景

1－2

1－1

1－3

2－14～18

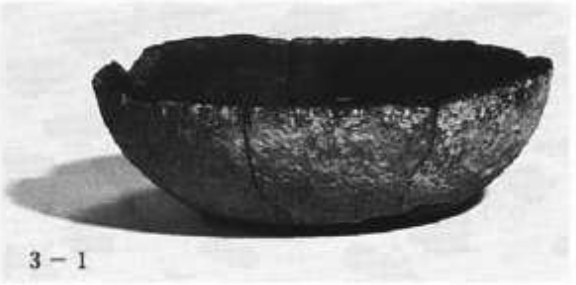
2－4

2－19

5号住居址

図版 9

4 号住居址



2 号住居址

3 号住居址

1 号土坑

埋設土器

2　外西川原遺跡他　発掘調査

I　調査の概要

1　調査遺跡名　外西川原遺跡（市No.119　調査記号SNG）
宮川遺跡（市No.104）
東中曽根遺跡（市No.89）

2　所在地及び　更埴市大字八幡字外西川原他
土地所有者　更埴市西部沖ほ場整備委員会

3　原因及び　公共事業＝県営ほ場整備西部沖地区工事
事業者　長野県

4　調査の内容　発掘調査（2,000㎡）

5　調査期間　平成元年5月8日～同年7月26日（60日間）

6　調査費用　総額5,040,000円
農政部局　3,654,000円
文化財保護部局1,386,000円

7　調査主体者　更埴市教育委員会
担当者　佐藤信之
調査員　小野紀男　贄田　明
補助員　笹澤正史　竹田直人
参加者　青木明子　市川聡雄　内山はつ　小野澄富　北川原竹子
越石久子　小林敦彦　小林千春　小林昌子　小林芳白
小松由里子　佐々木佳子　高橋八重子　田中千枝子
中村文恵　西沢秀雄　宮崎恵子　依田保子

8　種別・時期　集落址　弥生～古墳時代

9　遺構・遺物　弥生時代～古墳時代　住居址20棟
中世　掘立柱建物址1棟
出土遺物総数　土器片コンテナ　35箱

II　調査の経過

昭和63年６月、県教育委員会より昭和64年度の農業基盤整備事業等に係る埋蔵文化財について通知があり、市教育委員会では外西川原遺跡他３遺跡を含む部分で10haが予定されていると回答した。９月８日に保護協議が行われ、市教育委員会では当該地域は発掘調査例がなく内容が十分把握されていないため、試掘調査を行い遺跡の広がり等を確認することとした。11月１日に調査を実施し、外西川原遺跡は弥生時代の集落址であること、大伝寺遺跡は予定地域まで達しておらず、宮川遺跡・東中曽根遺跡では、僅かに遺物が確認され、遺構が存在する可能性があるとの結果となった。試掘調査結果により調査計画書を作成し、県の指導を仰いだ。12月19日に県より、発掘調査を委託された場合は受託するよう通知があった。平成元年に入り４月３日に国庫補助金交付申請を行い、５月８日に農政部局負担額3,730,000円について、長野地方事務所と更埴市長との間に委託契約が締結され、その日より発掘調査を開始した。しかし消費税の取扱いについて一部変更があり、９月１日に委託金を76,000円減額する変更契約がなされた。

III　調査日誌

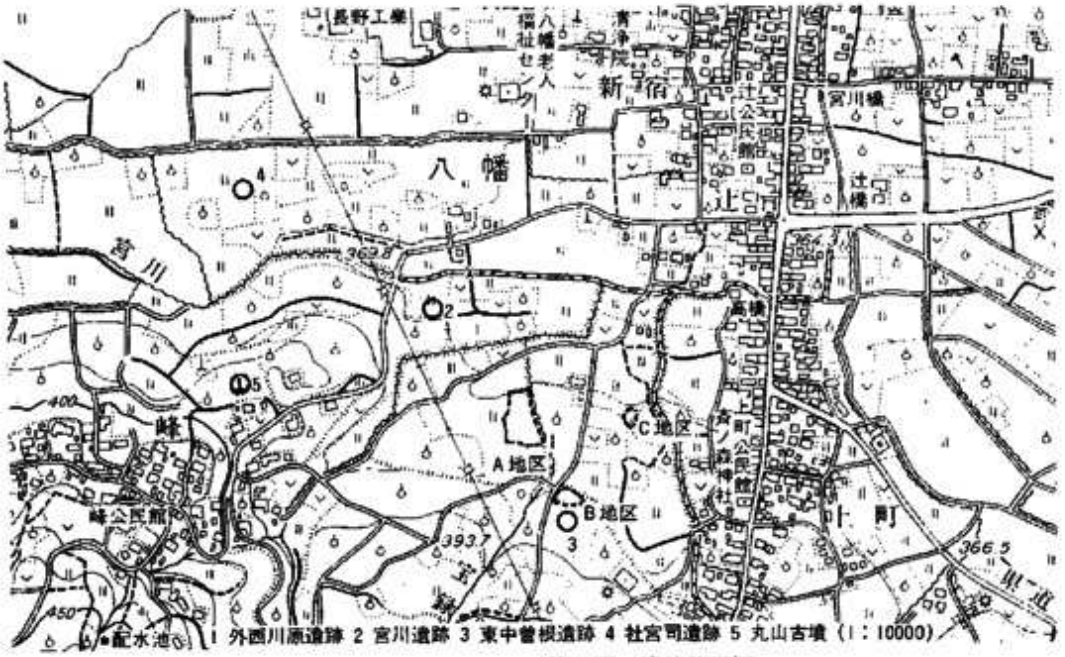
５月８日　発掘調査開始。手掘りにより、遺跡の範囲確認を行う。（A地区）
12日　テント設営、本格的に調査を始める。
24日　範囲確認調査の結果に基づき、重機を入れ表土除去。
31日　１号掘立柱建物址検出。
６月８日　B地区に重機を入れ表土除去を行う。
９日～26日　B地区より住居址３棟検出、翌日より掘り下げる。
22日　A地区に再び重機を入れ表土除去。
23日　B地区より遺構実測を開始する。
27日　A地区の住居址掘り下げ開始。
７月５日　住居址の掘り下げを進める。測量杭設定。
６日　前日夜の雨により調査区内に土砂流入、除去する。
14日　八幡小学校６年生見学。
15日　A地区全景撮影のため調査区内精査。
19日　C地区の調査に入る。遺物の出土は多いが遺構は不明。
22日　集中豪雨により周辺の小河川氾濫、A地区が土砂により埋没したがすでに調査を完了していたため、大事に至らず。
27日　現地におけるすべての調査を完了し機材を次の現場に移動。

Ⅳ　遺跡の環境

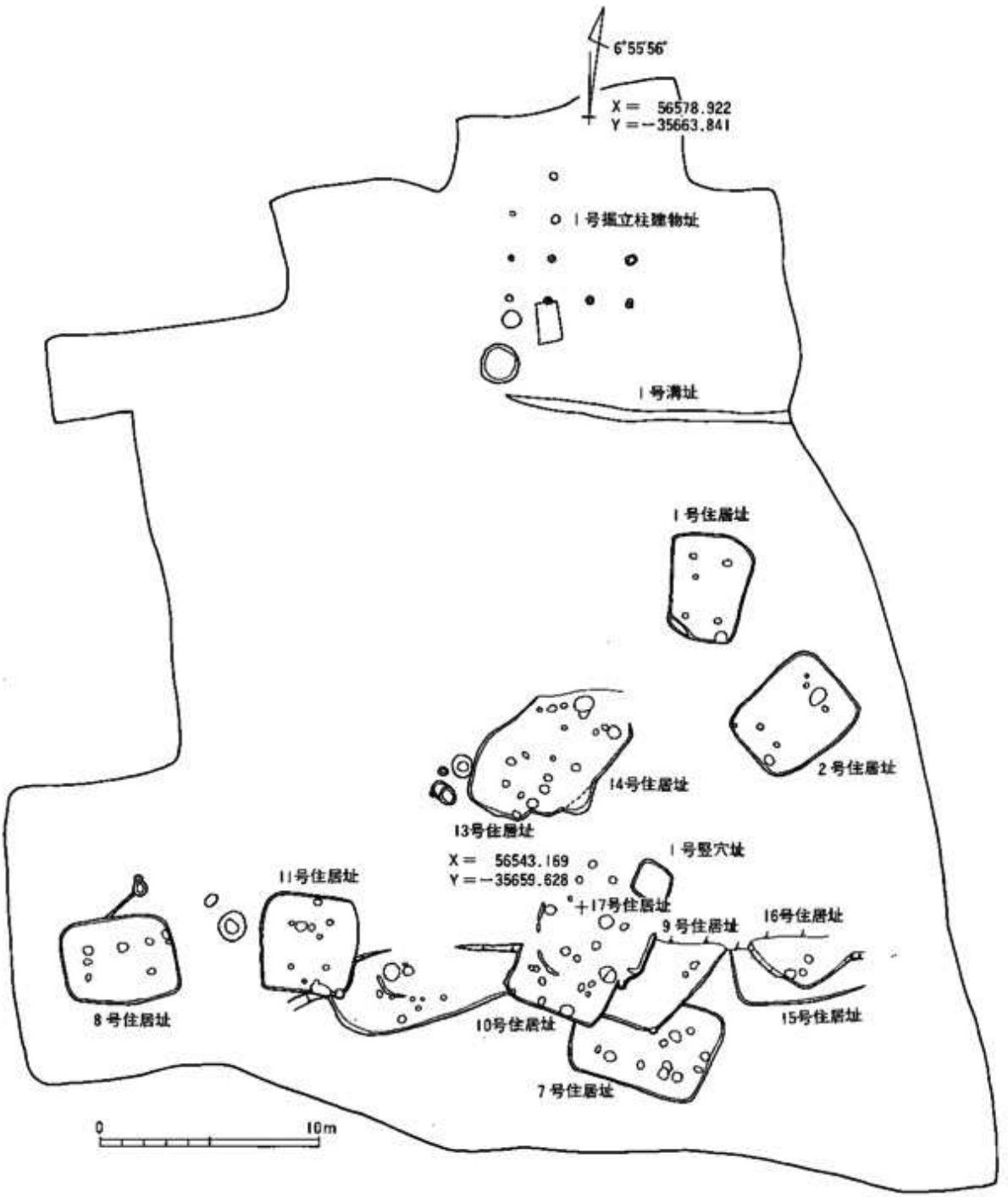
外西川原遺跡のある更埴市八幡地区は、千曲川左岸に位置しており、善光寺平南西の端にあたる。北は聖山系より東流する佐野川によって形成された扇状地が広がり、その扇状地と千曲川自然堤防が接した部分には湿地帯が形成されている。また南は北東に向かって幾筋も延びた姨捨土石流台地となっており、遺跡はこうした台地の一つに立地している。台地は棚田として利用されており、月の名所として有名な姨捨も同じ台地上に存在している。

扇状地上には、大きく条里的地割と見られる地割が行われており、要となる部分には『郡（コオリ）』と呼ばれる集落があり、郡衙との関係で古くから注目されていた地域である。また昭和60年に行った社宮司遺跡の調査では、掘立柱建物址９棟の他、三彩陶器なども出土している。台地上を見ると沖積地と接する付近には、弥生時代から平安時代の集落址が営まれており、西接する台地上には丸山古墳などもある。

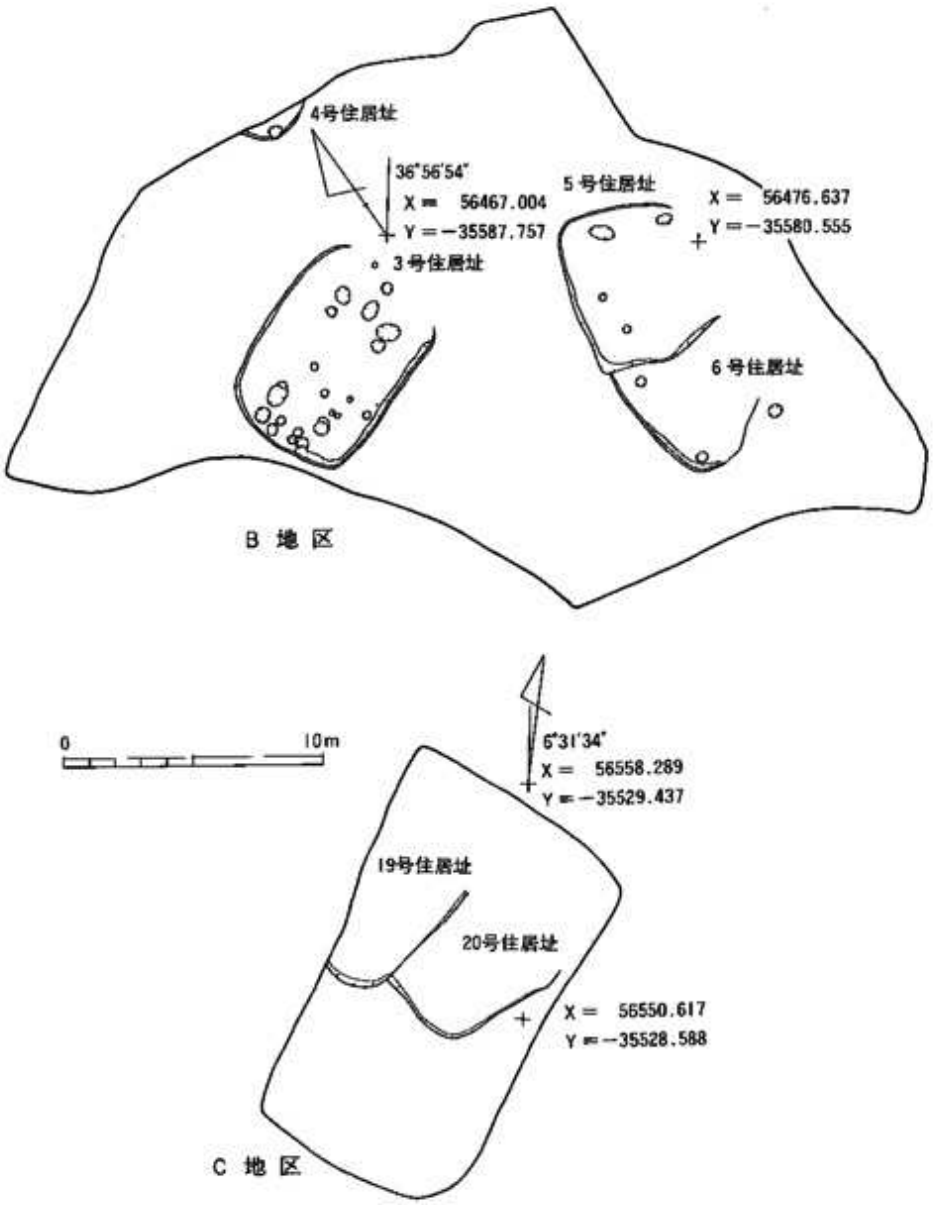
遺跡はなだらかに北東に傾斜する台地先端を占有し、標高370～380m前後となる。一帯は天井川となる宝録沢川、更級川を利用した水田となっているが、水田下は拳大から人頭大の石が多量に含まれており、調査の大きな支障となった。遺跡の中心は果樹園として利用されているため、今回は破壊を免れている。



第11図　遺跡位置図



第12図　A地区遺構全体図



第13図　B・C地区遺構全体図

V　遺構と遺物

調査は県営ほ場整備事業に伴うものであり、対象面積は８haに達した。

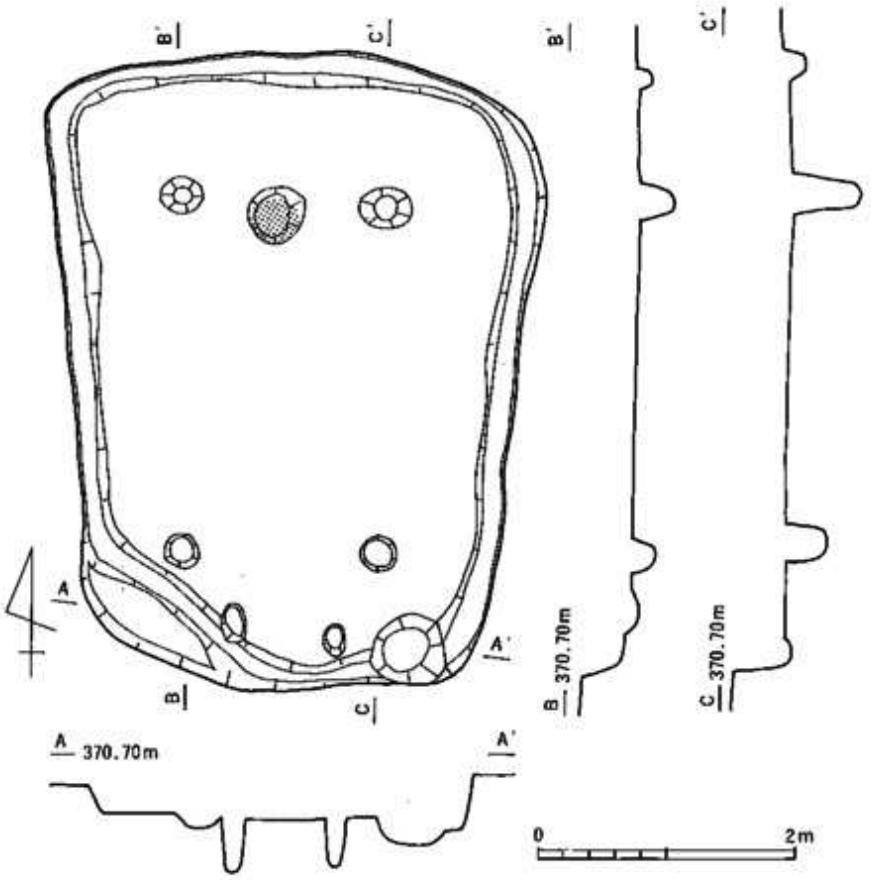
外西川原遺跡の中心部は果樹園として残るため、調査地点が３ヶ所に分かれたが、一連の遺跡と考えられる。検出された遺構は、住居址20棟、掘立柱建物址１棟の他、溝、土坑などがある。

宮川遺跡、東中曽根遺跡からは遺構の検出はない。

おもな遺構と遺物

１号住居址
(図版)10.19.25

A地区中央東側より検出された住居址で、規模は南北4.9m東西3.5mほどを測り南側に上底を持つ台形状を呈しており、主軸をN－２°－Eに持っている。壁直下には幅20cm深さ10cmほどの周溝が巡らされているが、南西隅は壁より内側を周溝が巡っており、幅20cmほどの平坦部を作り出している。壁は顕著であったが、床面は出水があり明確でなかった。柱穴は６本検出されており、南壁側に60cmほどの間隔を持って並ぶ２本は入口に



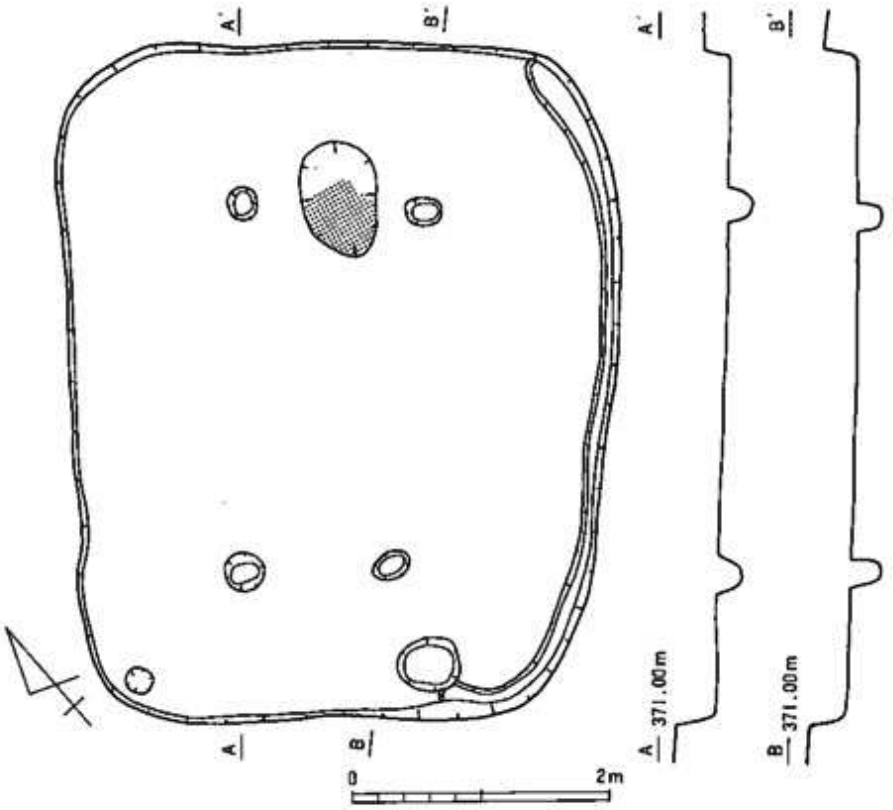
第14図　１号住居址

関係するもの、他の4本は上屋を支えた主柱穴と思われる。南東側隅には、直径50cmほどの掘込みが周溝部分に作られている。炉は北側主柱穴の間に、直径40cm深さ5cmほどの掘り込みを行った地床炉で、焼土はほとんど見られなかった。

出土遺物は多かったが、状態が悪く復元できたものは僅かであった。1・2は口縁部と胴部最大径がほぼ同じとなる甕で、頸部には二連止め簾状文を施し、器面を櫛描波状文で覆っている。3～6は壺で3の頸部には小刻みな簾状文が施され、その下部には文様としてのハケが施されている。口縁部はミガキが行われているが、赤色塗彩の痕跡はない。4・5は大形の壺の胴下半部で、ハケの後荒いミガキが施されている。胴屈曲部上半には赤色塗彩を残している。6は無頸壺で外面に赤色塗彩が施されている。7はミニチュア土器で無頸壺の形をなしており、粗雑な調整であり、ミガキ・塗彩は見られない。

2号住居址
(図版)10.19

A地区中央部分より検出された住居址で、北西に1号住居址が隣接している。南北5.2m東西4.2mの規模を持つ隅丸長方形で、主軸をN－42°－E



第15図　2号住居址

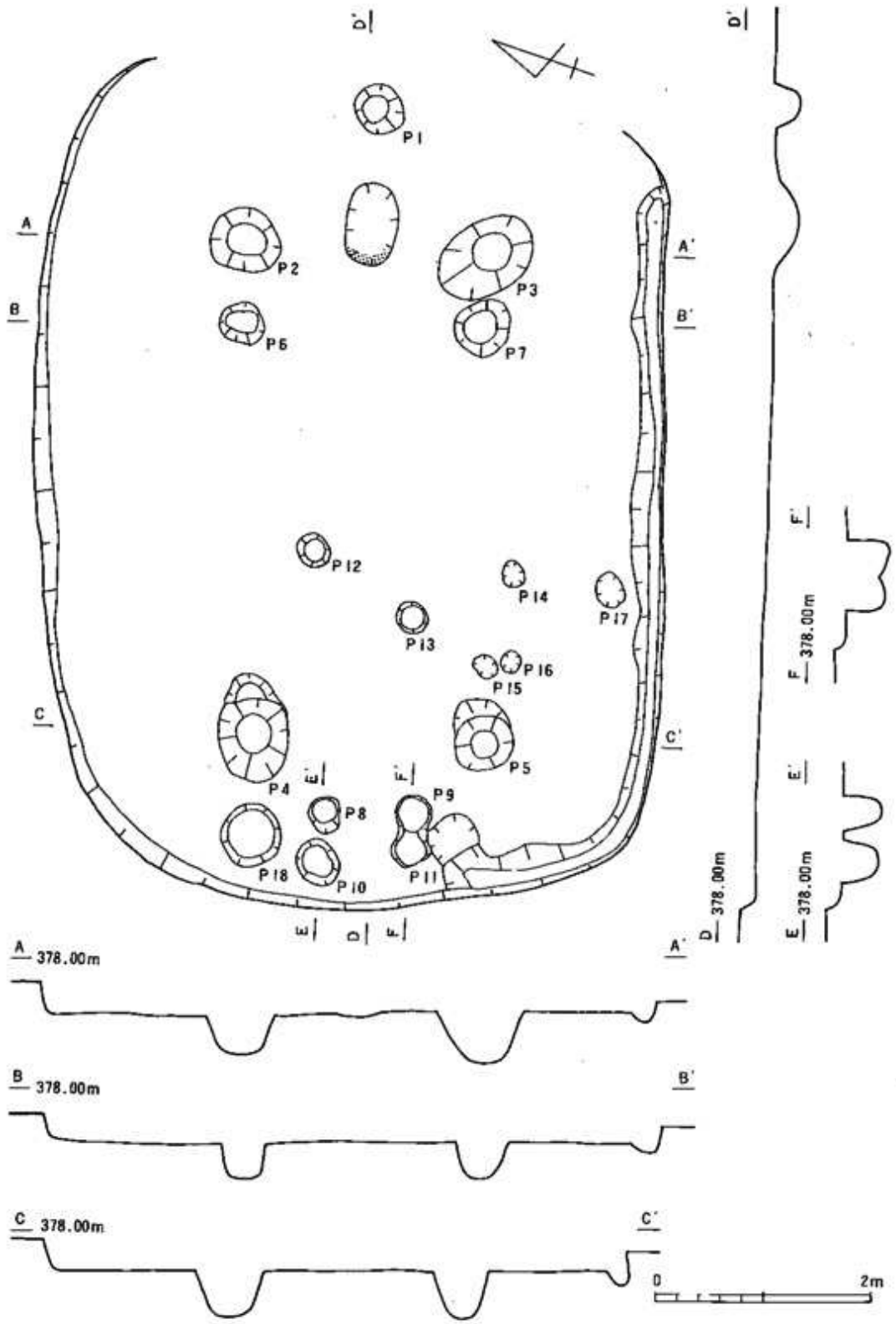
に持つ。東壁直下には、幅15cm深さ5cmほどの周溝が巡らされている。壁面は顕著であったが、砂礫を多量に含んだ土層を掘り込んで作られているため壊れやすく、また床面も出水があり軟弱であった。柱穴は主柱穴4本が方形に配されており、深さは20cmほどと浅い。南東隅の周溝の起点となる部分には深さ40cmほどの掘り込みが見られる。炉は北側主柱穴間に作られた地床炉で、10cmほどの深さを持っている。炭化物が僅かに検出されているが、焼土はほとんどない。

出土遺物は少ない。1・2は櫛描波状文が施された甕で、頸部には共に四連止めの簾状文が見られる。胴下半部を失っているが、頸部から外反した口縁部はそのまま端部に至る。3は「ハ」の字状に外開した高坏の脚部で外面には赤色塗彩が施されている。透しなどは見られない。

3号住居址
(図版)11.12.13

B地区より検出された住居址で、傾斜地にあるため北壁はすでに失われていた。規模は南北8m前後、東西5.8mの隅丸長方形の住居址で、主軸をN－70°－Eに持つ。床面は北側が10cmほど低くなっているが、良く締まっており顕著であった。壁は南西で30cmほどの高さを測ることができ、東壁直下には幅20cm深さ10cmほどの周溝が巡っている。住居址内より検出された柱穴のうち主柱穴はP_2～P_5と考えられ、長方形に配されている。北側主柱穴の南側に見られるP_6、P_7の存在あるいは、南側主柱穴の掘り込みが2段になっていることから、住居址の建て替えが行われているとも考えられる。P_8～P_{11}は入口に関係する柱穴であり、北壁中央付近からは棟持柱と考えられるP_1が検出されている。入口の西側に見られる、深さ20cmほどの掘り込みは、貯蔵穴と思われる。炉は北側主柱穴間に作られた地床炉で、南北70cm深さ20cmと大形であるが、焼土はほとんど検出されておらず、南側より僅かな炭化物が検出されたにすぎない。

出土遺物は多く、床面につぶれた状態で出土している。1～5は高坏で坏部が底部よりやや内弯気味に広がり、口縁部が強く外反する1・2と、体部下半で屈曲し口縁部で外反する3・4があり、いずれも赤色塗彩が施されている。2は9の甕と共に出土したもので、蓋として転用されたものと思われる。6は小形甕の蓋と思われるが、器面が荒れており定かでない。7～10は波状文を施した甕で、ハケの後、頸部に簾状文を行い口縁部・胴部を櫛描波状文で覆っている。大形の9は口縁端部が平坦に仕上げられている。11は大形の壺で、胴部下半の屈曲部より上部には赤色塗彩が施されている。口縁端部を欠いているが、大きくラッパ状に開くものと思われる。頸部には櫛描平行線が施されているが、T字文を形成していない。

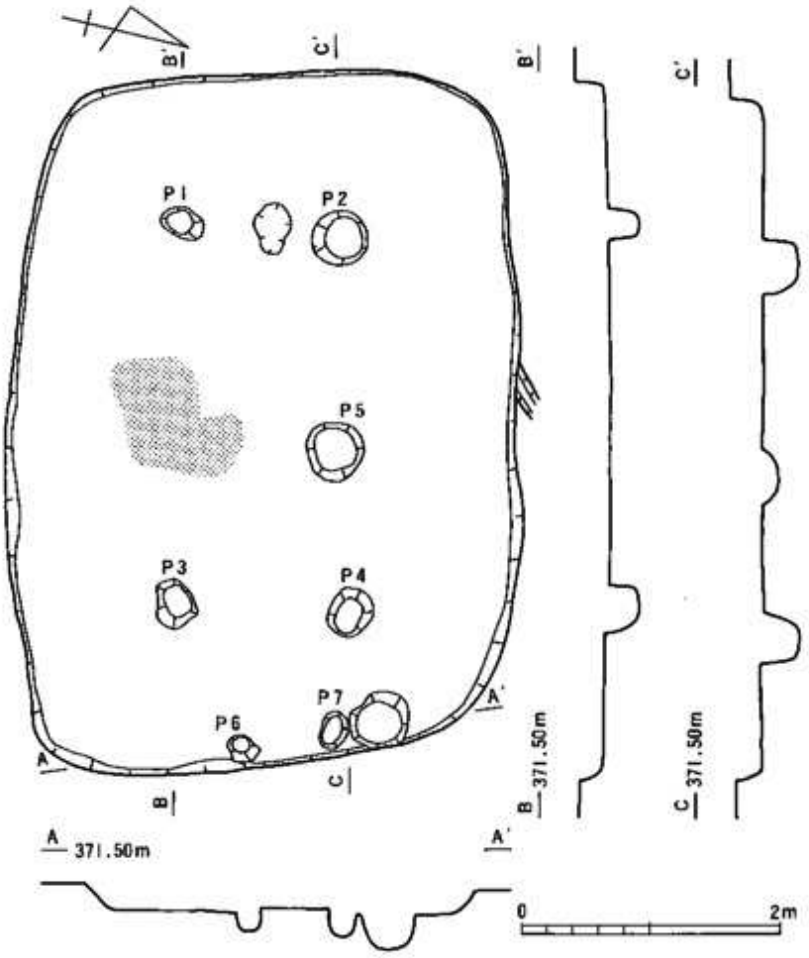

P1
P2
P3
P4
P5
P6
P7
P8
P9
P10
P11
P12
P13
P14
P15
P16
P17
P18
A
A'
B
B'
C
C'
D
D'
E
E'
F
F'
A 378.00m
B 378.00m
C 378.00m
D 378.00m
E 378.00m
F 378.00m
0
2m

第16図　3号住居址

8号住居址
(図版)14.21.26

A地区西側より検出された住居址である。規模は東西5.3m南北3.9m、隅丸長方形を呈し、主軸方向をN－103°－Wに持っている。床面は顕著であったが、出水があり軟弱であった。壁高は25cmほどを測ることができるが、崩れているためか落ち込みはなだらかであった。主柱穴と思われるP_1～P_4は、住居址の短辺を3等分するよう長方形に配されている。P_5は深さ15cmほどで柱穴とは考えにくい。入口の施設と思われるP_6・P_7は、主軸線よりやや北に寄って並べられており、南には貯蔵穴と思われる掘り込みがある。覆土内には人頭大の石が多く含まれており、焼土もやや浮いた状態で検出されているが、住居址との関係は明確でない。

出土遺物は多いが、遺存状態が悪いため復元できたものは少ない。1・2は底部より直線的に外開する坏で、内外面共赤色塗彩されている。3・

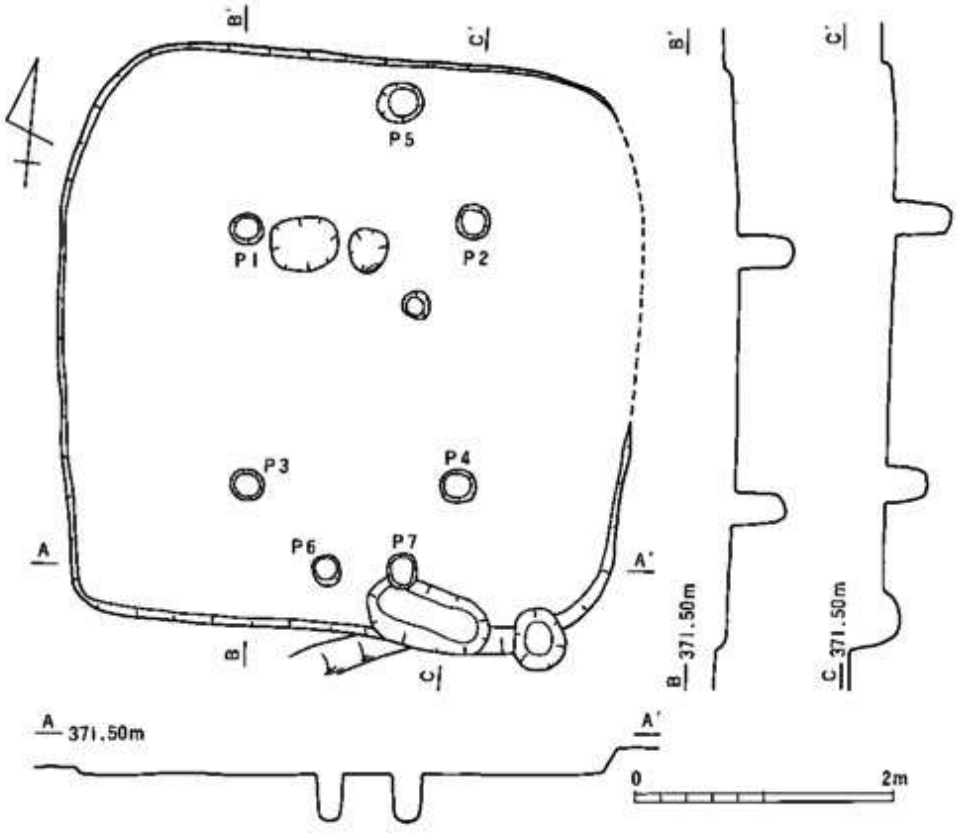


第17図　8号住居址

4は高坏と考えられるものであるが、3には赤色塗彩は見られない。5～8は櫛描波状文を持つ甕であるが、器面が荒れており、施文順序など不明な点が多い。口縁部が頸部より広がり、そのまま端部となる5、僅かに内弯して端部となる6・8、外面が面取りされたように稜をなす7の、3種が見られる。9は外面にハケを施し、内面を鋭く削り取った甕で、頸部より短く外反した口縁部は稜をなして立ち上がり端部となる。乳白色を呈し、他に同様の胎土は見られない。10～15は壺であり、12を除き赤色塗彩が施されている。ラッパ状に開く口縁部は、そのまま端部となるものと、やや内弯するものが見られる。12は頸部文様もまったく持っていない。13は簾状文と平行線文が、14は簾状文とハケが頸部に施されている。

11号住居址
(図版)21

A地区南西より検出された住居址である。一辺が4.4mほどの隅丸方形で、主軸をN－4°－Wに取る。水田の畦畔部分と重なっていたため、南壁はおよそ25cmを測るが、他は約5cmほどであった。床面は砂礫層中にあるため、凹凸が多く軟弱であったが、明確に検出できた。柱穴は7本検出



第18図　11号住居址

されており、住居址中央部分を長方形に囲むP_1～P_4が主柱穴、南壁に並ぶP_5・P_7は入口部の柱と考えられる。また北壁中央付近より検出されたP_8は、深さ45cmと主柱穴と同じ深さで、棟持柱が考えられる。炉は北側主柱穴の間に作られた地床炉で、5cmほど掘り込まれており、僅かに焼土が検出されている。

出土遺物は少ない。図化できたのは、脚部を欠いた台付甕と思われる1点で、最大径を口縁部に持ち、口径に対して器高が低く、やや詰まった形となる。頸部に二連止めの簾状文を巡らし、口縁部と胴部には櫛描波状文を配している。他に甕・壺・高坏の破片が含まれている。

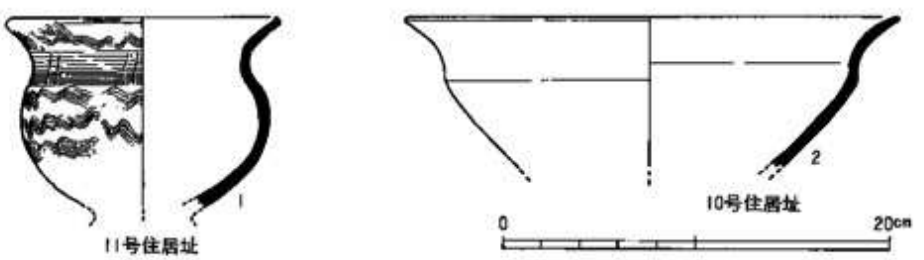
7号住居址
(図版)22

A地区南側より検出された住居址で、9・10号住居址と重なって構築されている。東西6.4m南北4.4mの不整方形の住居址で主軸をN－78°－Wに持つ。検出面が水田耕作土直下と浅く、上部が削られているため、壁高は最大15cmと浅い。床面は切り合い部分を除き、顕著であった。柱穴のうち方形に配されたP_1～P_4は主柱穴と考えられ、深さは30～50cmほどであった。また東壁沿いに並んだP_5・P_6は入口部と考えられる柱穴で、住居址の主軸方向に長径を持つように掘り込んでおり、深さは30cmほどである。他に多数の掘り込みが見られるが、住居址との関係は定かではない。炉と思われる施設及び焼土は検出されていない。

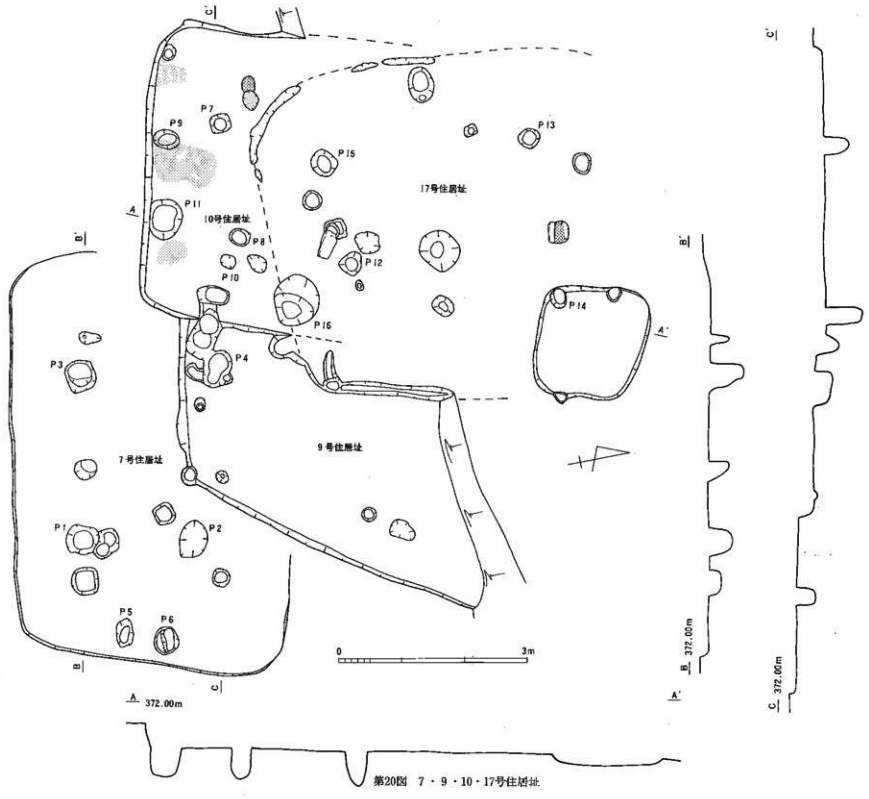
出土遺物は少なく、図化できたものはないが、櫛描波状文が施された大形の甕、台付甕の脚部、赤色塗彩された壺などが含まれている。

10号住居址
(図版)22

7・9・17号住居址と重なって検出された住居址で新旧関係は明確ではないが、9号住居址より新しく、7・17号住居址より古いと思われる。住居址の大半が17号住居址と重なるため規模は不明であるが、N－18°－E方向に主軸を持つ長方形の住居址が考えられる。床面は良く締まっており顕著であったが、17号住居址床面とほとんど高さに差がない。壁高も



第19図　10・11号住居址出土遺物



第20図　7・9・10・17号住居址

南側では35cmほどを測るが、北側は開田時に破壊され、失われている。柱穴は多数検出されているが、P_7とP_8が南側主柱穴と考えられる他は不明である。P_{11}は貯蔵穴と思われる。また南壁沿いには炭化物が広がっており、P_7の北西には床面が焼土化した部分が見られる。

当初17号住居址の存在が不明確であったため、遺物中に17号住居址の遺物が含まれているが出土遺物は多い。しかし小片が多く、しかも遺存状態が悪いため、図化できるものはほとんどない。2は高坏の坏部で内外面とも赤色塗彩されており、体部で屈曲し外反して口縁部となる。

17号住居址
(図版)22

10号住居址と重なるため不明な点が多いが、6×5.5mほどの規模で、主軸をN－5°－Eに持つと思われる。壁は9号住居址と切り合っている部分が僅かに残るだけであり、15cmほどを測ることができた。床面は10号住居址同様に顕著であり、良く締まっていた。南壁沿いには周溝が巡らされており、この周溝から規模を推測するとことができる。床面からは多数の柱穴が検出され、P_{12}～P_{15}が主柱穴と考えられるが、整った配置を示していない。P_{16}は貯蔵穴と思われる。炉は地床炉であるが、南側に長さ30cmほどの河原石が据えられている。

出土遺物は10号住居址として取り上げているため、明らかに本住居址の遺物といえるのもはほとんどない。2はピット内より出土した小形甕である。頸部には簾状文が施されているが、観察できる2ヶ所のうち1ヶ所は、平行線上に列点文を配し簾状文状の文様を作り出している。

4号住居址
(図版)15.23.27

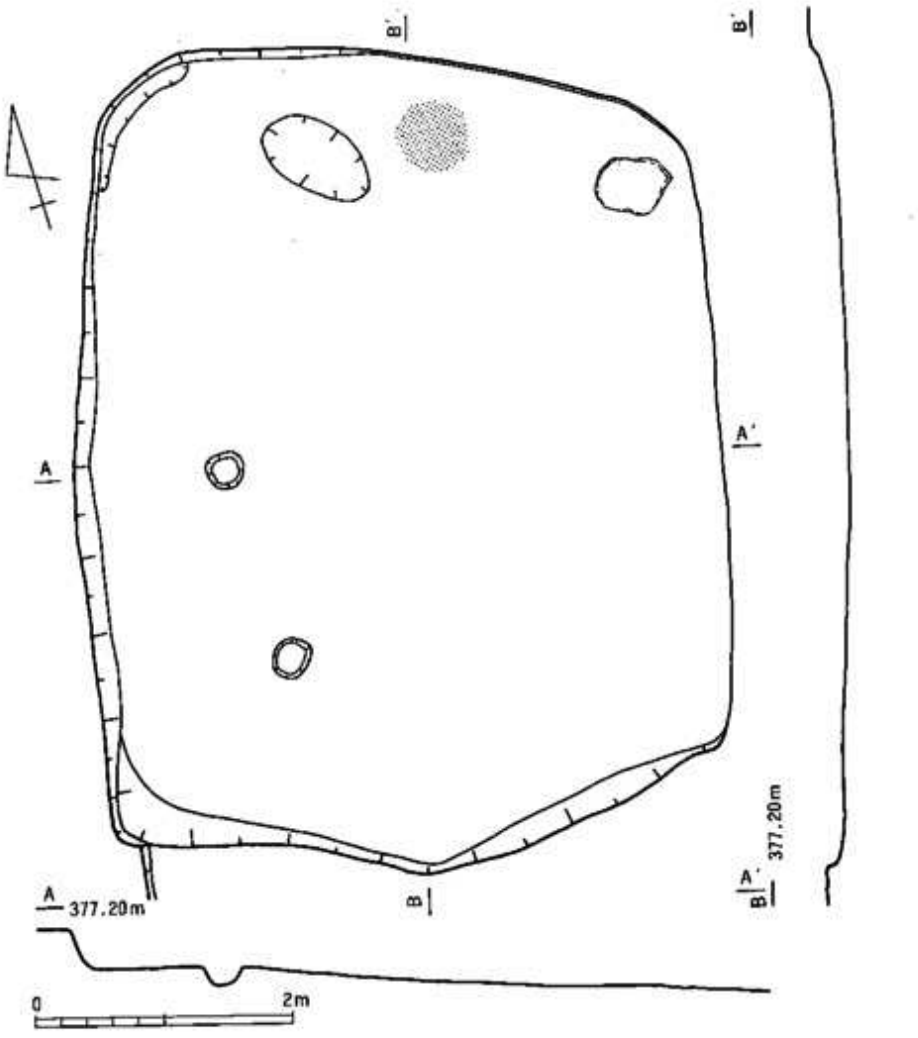
B地区より検出された住居址で、5号住居址を切って構築されている。傾斜地のため東壁を失ってはいるが、規模は南北6.2m東西5m、主軸をN－16°－Eに持つと思われる。3号住居址同様床面が大きく東へ傾斜しており、約30cmの比高を測ることができる。壁も西側では35cmほどを測るが、東側は失われている。北壁寄りには土器が集中する部分があり、焼土が検出されているため、カマドがあったとも考えられるが、他にカマドに関係するものが残存していないため定かでない。焼土の西側には長径90cm深さ15cmほどの掘り込みがあり、坏2点が出土している。また北東隅には約50cmの平石が置かれていた。柱穴は2本検出されているが、住居址との関係は明らかでない。

出土遺物は多く、大半は北壁寄りの土器集中区及び、平石の周辺より出土したものである。遺存状態が悪く器面の調整などが分からないものが多い。1～8は坏で2・4・5は内面黒色処理が施されている。体部上半で屈曲して外反気味に開くもの、端部が僅かに外反するものなどが見られる。

また7の口縁部には片口状につまみ出した部分が見られる。9は高坏で坏部は底部から外反して開いており、筒状の脚部は膨らみを持たず、裾部は強く稜をなして開いている。10・11は甕の口縁部で「く」の字状に開いており、11の胴部には太くて荒いハケが施されている。12・13は底部に単孔を持つ甑で、緩やかに内弯して立ち上がった長い胴部が、外反して口縁部となる。14は口縁部を欠いているが、胴部から坩形を呈するものと思われる。

20号住居址
(図版)16

C地区より検出された住居址で、西側は弥生時代の住居址である19号住居址に切られている。また北側もすでに失われており、残存していたのは南隅と、その両側の壁の一部にすぎない。残存部からN－66°－E方向に主軸を持つ住居址が考えられる。壁・床とも砂礫層中にあり　また床面付



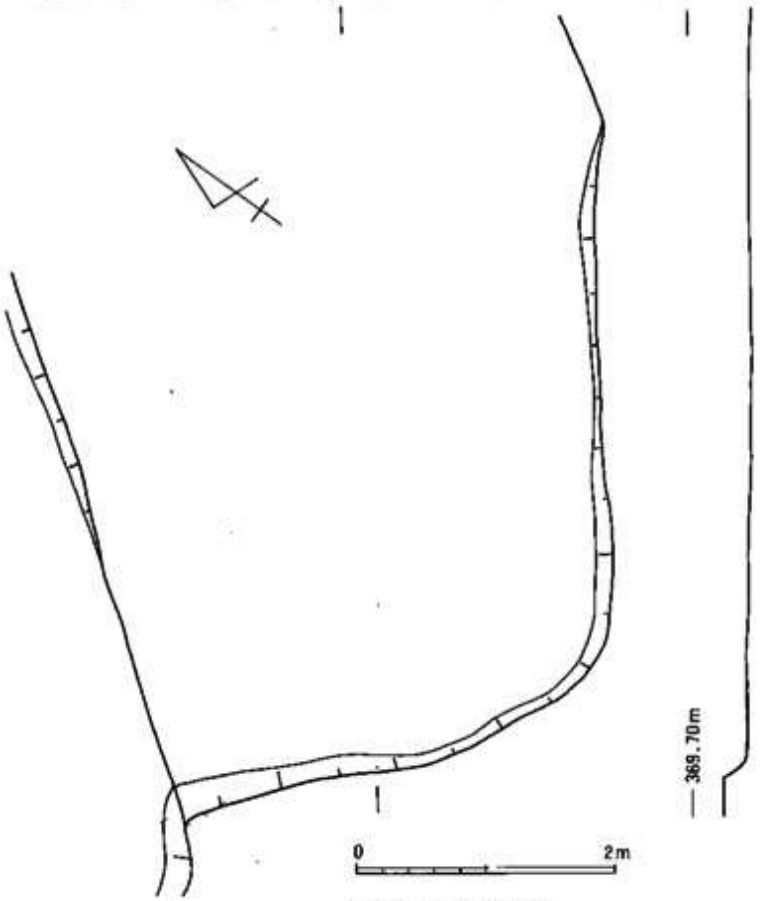
第21図　4号住居址

近からは出水があって検出は困難であった。したがって、一部に推定による部分がある。柱穴・炉は検出されていない。

出土遺物は多い。1・2は高坏の坏部で、体部下半で屈曲し、外反して大きく開いている。脚部である3～6には、「ハ」の字状に外開するものと、下部が開いた筒部に、大きく開いた裾部が付くものの2種が見られる。5には2ヶ所並んで穿孔がなされている。7～11は小型丸底土器で、体部が球形に近く、口縁部は内弯気味に開くものと、直線的に開くものとがある。遺存状態が悪いため明確ではないが、総体的に荒い作りとなっている。12～14は甕で口縁部は「く」の字状に開き、胴部は球形に近い。ハケの後ミガキを施していると思われるが、器面が荒れているため定かでない。

1号掘立柱建物址
(図版)24

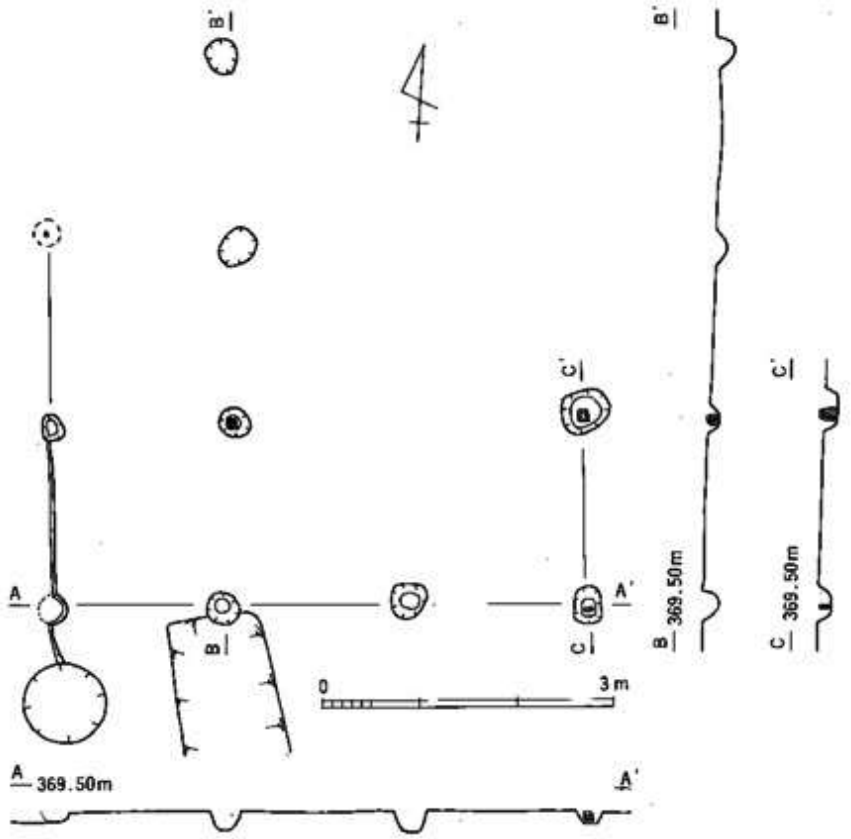
A地区北側より検出された遺構であり、調査区内で最も標高の低い部分に位置している。傾斜地にあるため北側が失われているが残存部より長軸をN－5°－Eに持つ建物であり、南北が3間で5.7m東西が3間で5.5mの建物と思われる。西側の柱穴列が小形で、掘り込みも浅いことから、西



第22図　20号住居址

側の1間は庇と考えれらる。4本の柱穴に柱根が残っており、うちP_1・P_6の2本は13cmの角材が使用されていた。

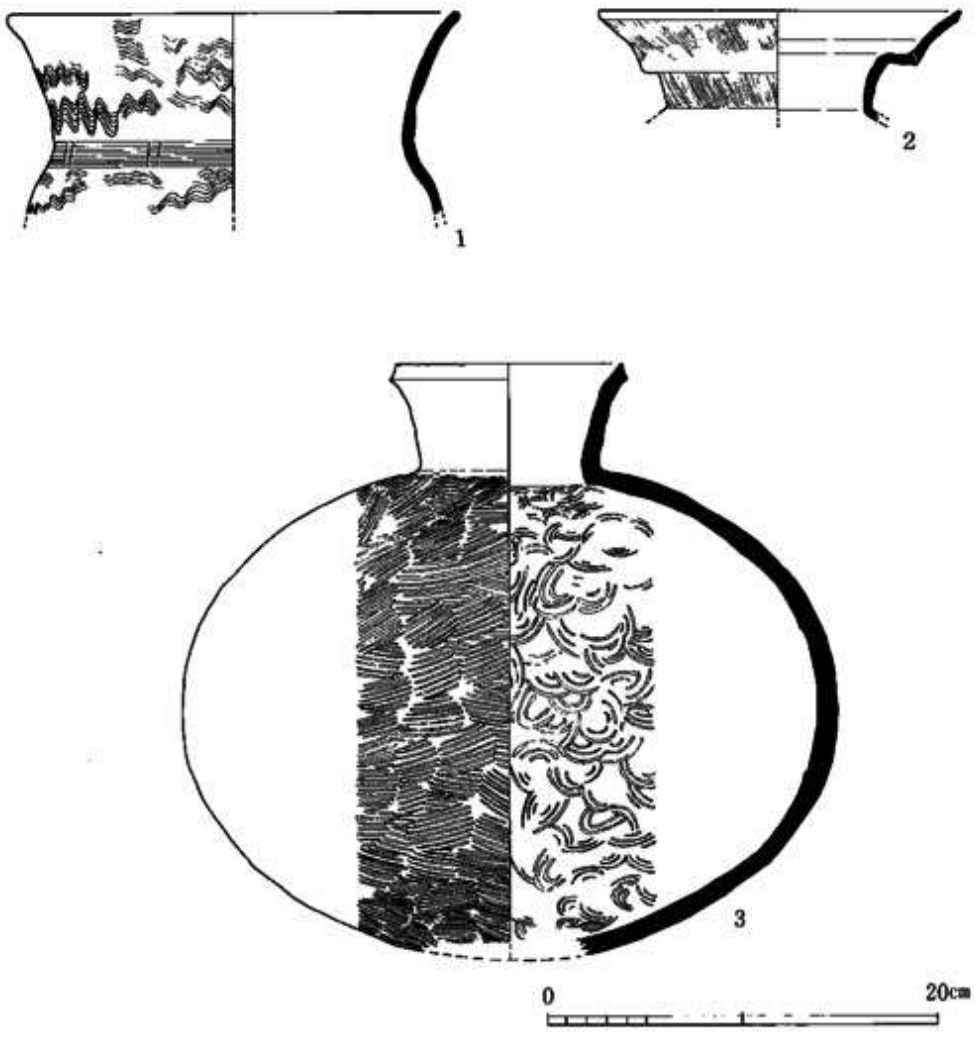
周辺より小片となった土器片が多量に出土しているが、いずれも弥生式土器であり、本址と関係すると思われる遺物の出土はなかった。



第23図　1号掘立柱建物址

その他の遺物　1号掘立柱建物址が検出された部分を中心に、多量の遺物が出土している。弥生式土器が大半を占めており、僅かに須恵器が混入しているが、いずれも小破片であり廃棄されたものと思われる。1・2は6号住居址より並んで出土した遺物である。1は頸部に櫛描簾状文が施された大形の甕で、口縁部・胴部には櫛描波状文が施されている。2は壺で外反気味に立ち上がる頸部から、二段に外反して口縁部を作り出しており、外面には顕著な稜をなしている。口縁端部は面取りがなされ、ていねいなヨコナデが見られる。また頸部には細かなハケが観察できる。図版16の1・2は5号住居址より出土したもので、1は小形の壺で外面はミガキが施されており、坩

形と呼ぶべきかもしれない。2は大形の鉢で体部が球形を呈し、頸部から「く」の字状に外反する口縁部は長く、底部はやや上底気味となる。器面の調整は荒れており不明確であるが、口縁部にはていねいなミガキを残している。第24図の3は20号住居址北側の試掘坑より出土した横瓶で、器高30cmほどを測ることができる。口縁部は荒いヨコナデが施されており、胴部には平行叩き、内面には青海波文が見られる。焼き歪みがあり焼成時にできたと思われる亀裂が外面にまで達している。また胎土内に小さな石を含んでおり、良質とはいえない。



第24図　その他の遺物

VI まとめ

今回の調査で外西川原遺跡より検出された遺構は、弥生時代の住居址が主体をなしており、弥生時代の集落址としては、市内の雨宮地区に存在する生仁遺跡に匹敵する大集落址であることが判明した。遺跡の中心部分は畑地として残るため、開発を免れたが、その規模は東西200m南北150mに達するものと思われる。

検出された弥生時代の住居址は、隅丸長方形の住居址を基本としており、主軸を南北方向に持つ住居址が6棟、東西方向に持つものが2棟ある。しかし僅かにずれがあり、規則性は見られない。また東西方向に主軸を持つ住居址が、若干新しい感じも受けるが定かではない。住居址内部施設の配置には共通性があり、主柱穴を4本長方形に配し、奥壁中央部に1本、入口と思われる部分に2本の柱穴を設置している。この入口部分の柱穴は、いずれも住居址主軸方向に長く掘り込まれている。また入口部の左右どちらか一方には、貯蔵穴ともいえる掘り込みを持っている。炉は奥の主柱穴間に作られた地床炉となる。このような構造は、市内の生仁遺跡にも見られ、佐久地方あるいは、長野市にも多く見出すことができる。千曲川流域に見られるこうした住居構造は、箱清水式土器の文化圏と一致しており、当時の社会構造を知る重要な手掛かりとなる。

出土遺物は、遺構が強い粘性を持つ土層中に掘り込まれているためか、風化が激しく文様が失われているものが多く、不明な点も多いが、大きく箱清水式土器として捉えることができるが、その内容は若干異なった様相を示す住居址が見られる。8号住居址では赤色塗彩を施さず、頸部文様帯も持たない壺などが含まれている。また北陸地方の月影式土器と思われる明らかに胎土の異なった甕なども出土している。遺物の検討が十分でないが、弥生時代から古墳時代への移行を知る良好な資料といえる。

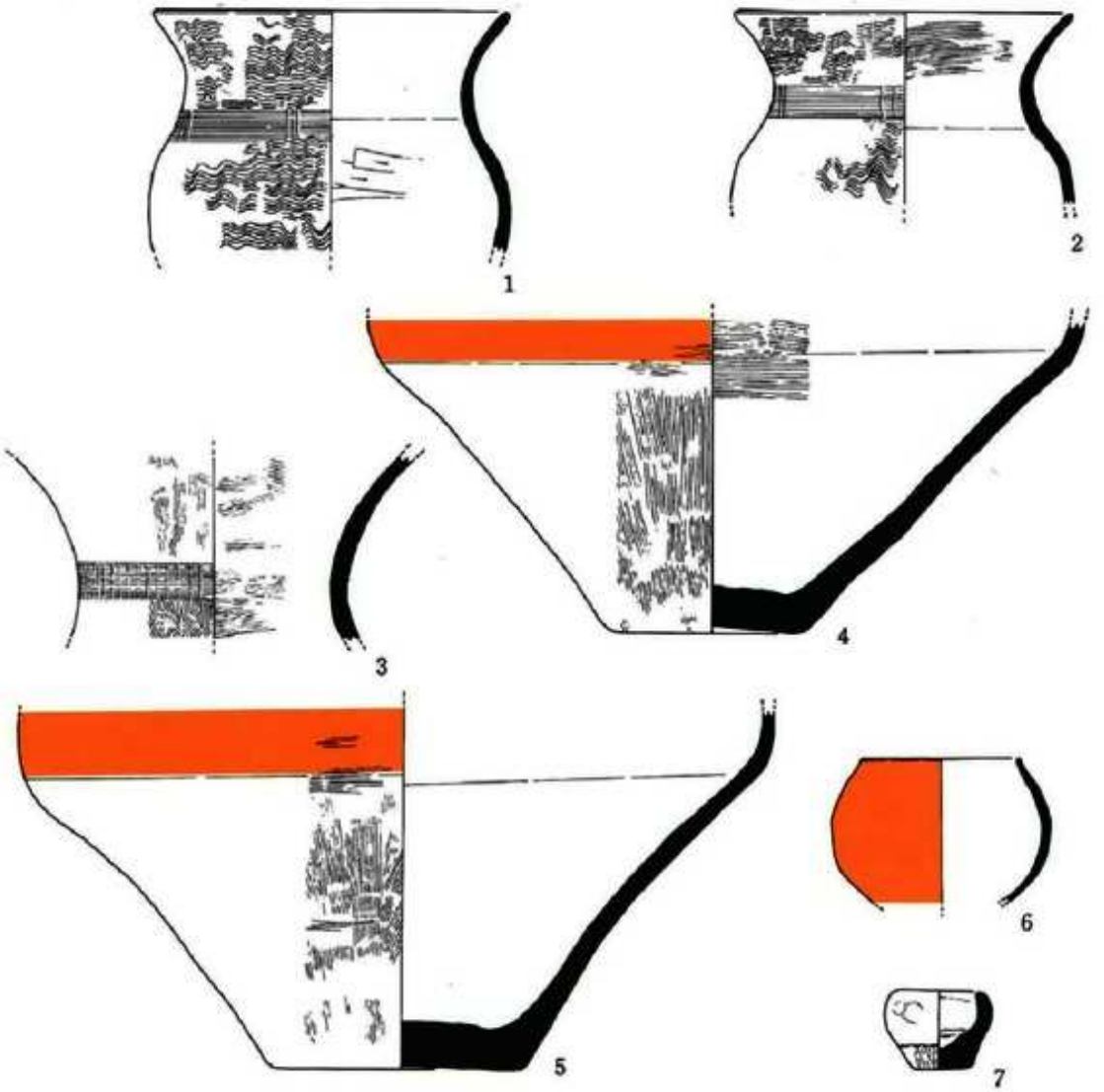
古墳時代と言える住居址の検出は4棟であったが、分布から見て中央畑地部分にも存在が考えられ、やや範囲は狭まるが、弥生時代同様かなりの集落址であったと思われる。この内6号住居址では櫛描波状文を持つ土器が共存している。また20号住居址では小型丸底土器が、4号住居址では長胴の甕が見られ、時間的なずれを示している。

遺構こそ検出できなかったが、横瓶の出土は社宮司遺跡との関係で注目される。

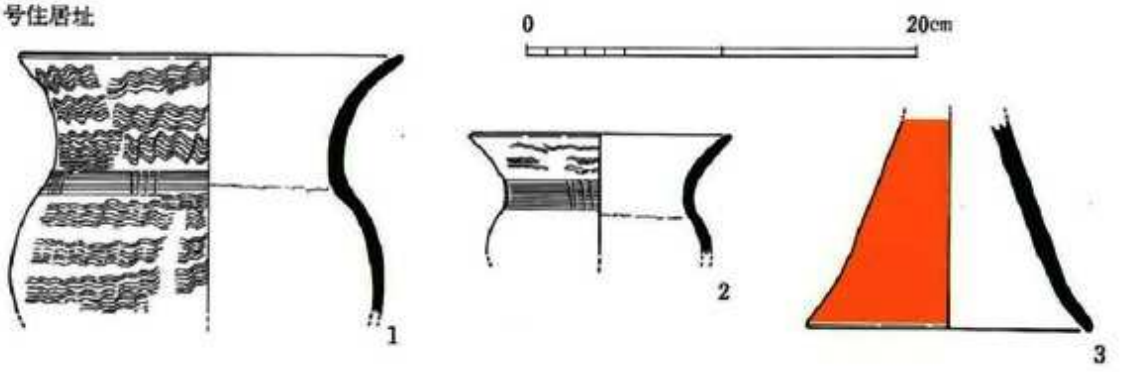
いずれにしても、こうした大集落を支えた生産基盤が何であったのかは重大な問題であり、今後の調査により究明していきたい。

図版10

1号住居址

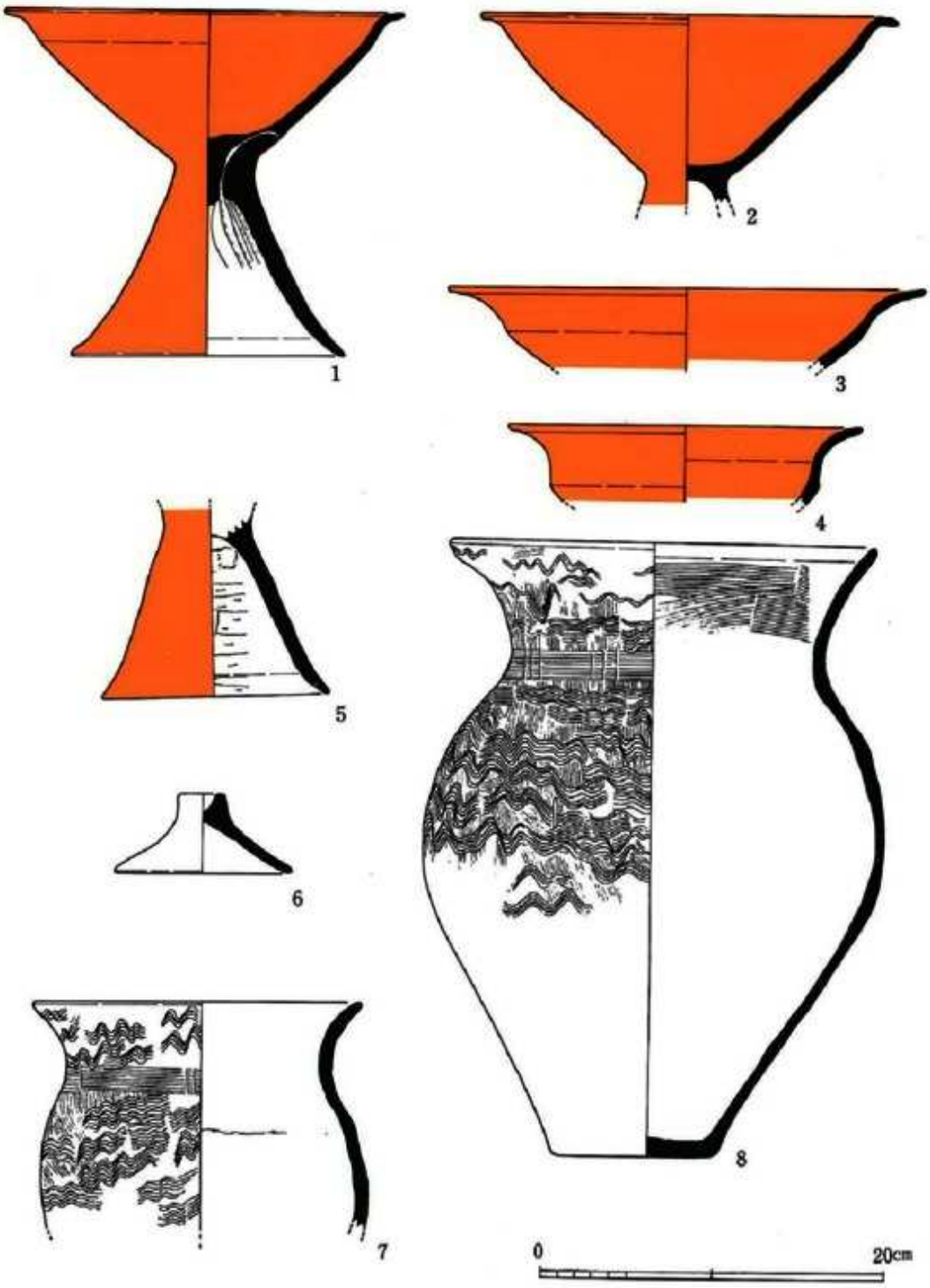


2号住居址



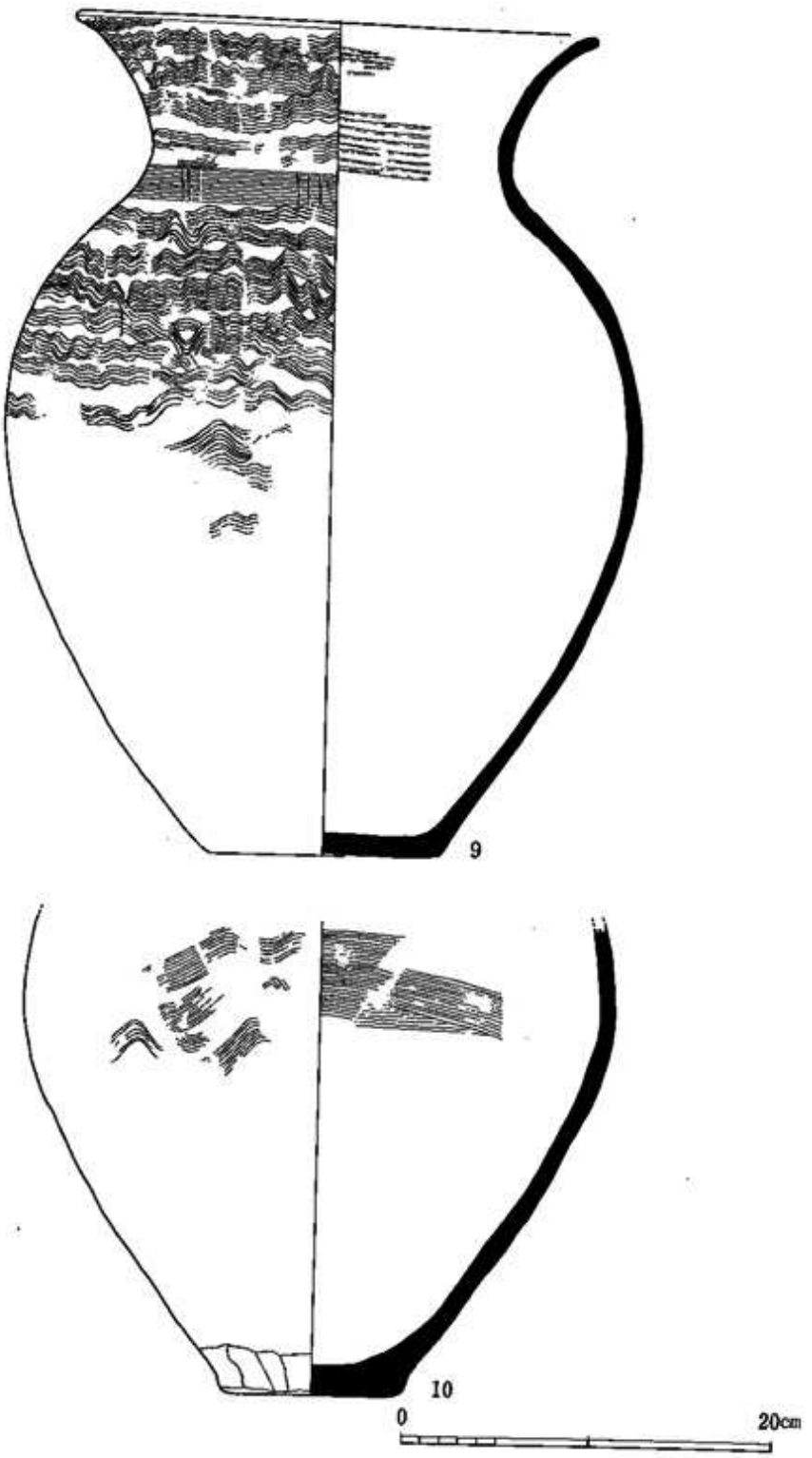
図版11

3号住居址



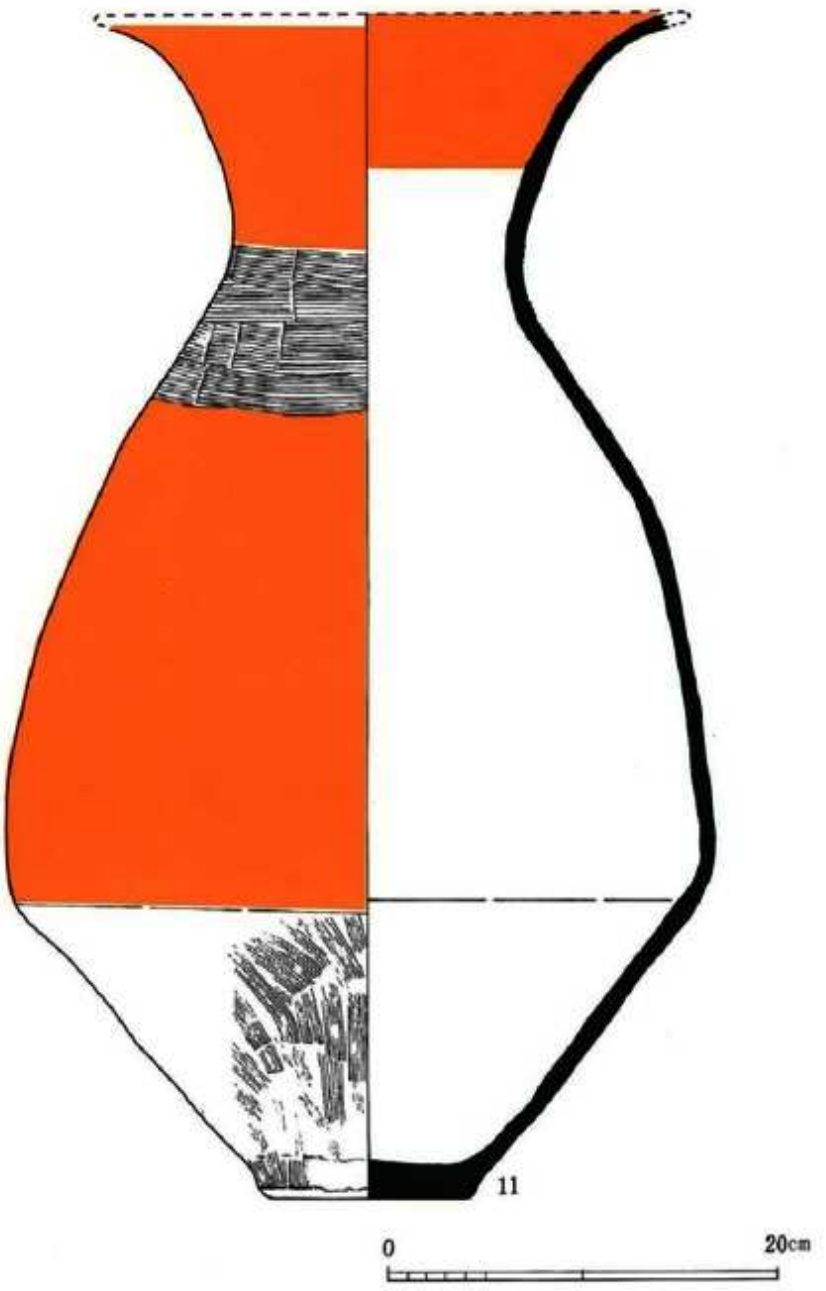
図版12

3号住居址



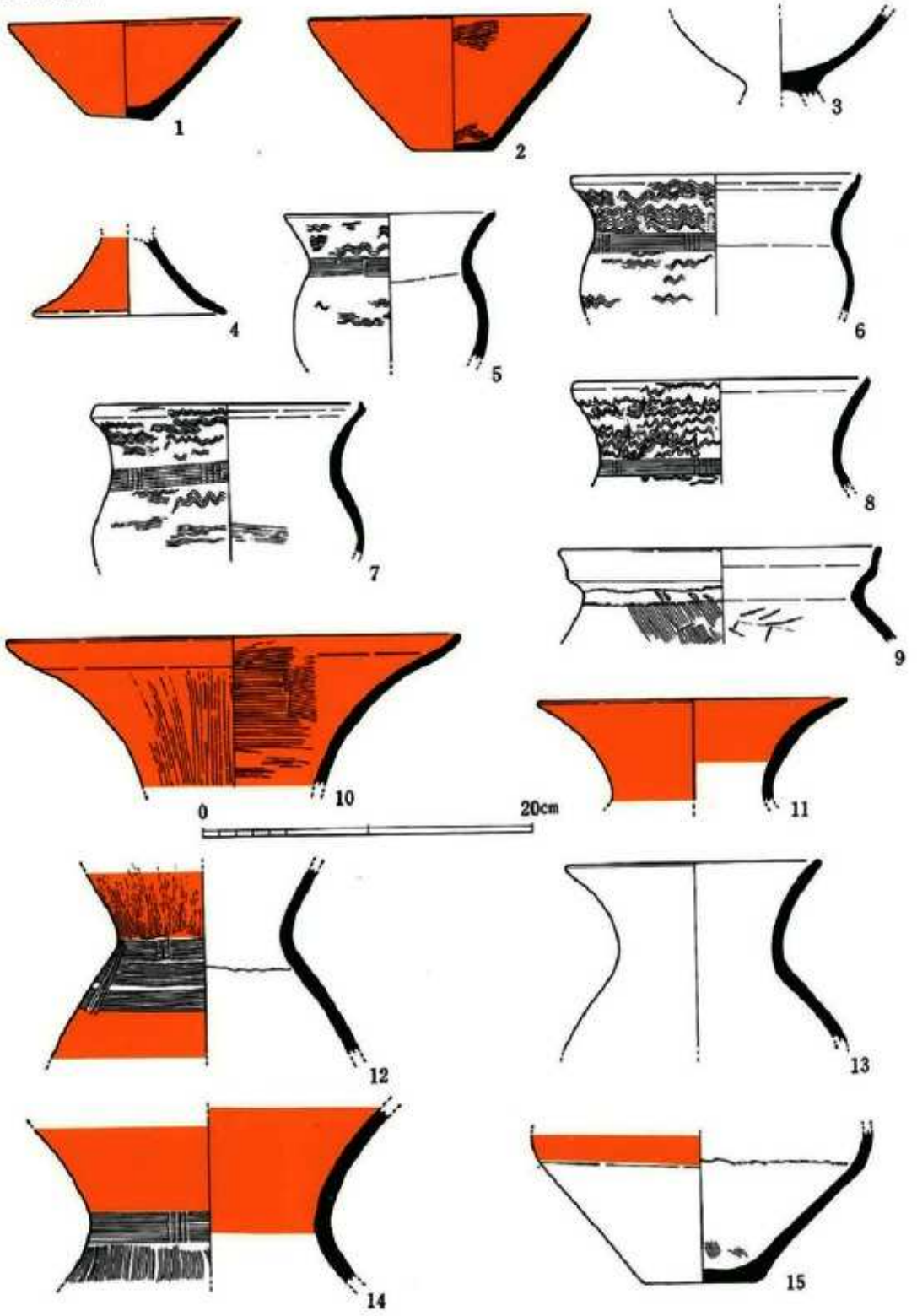
図版13

3号住居址



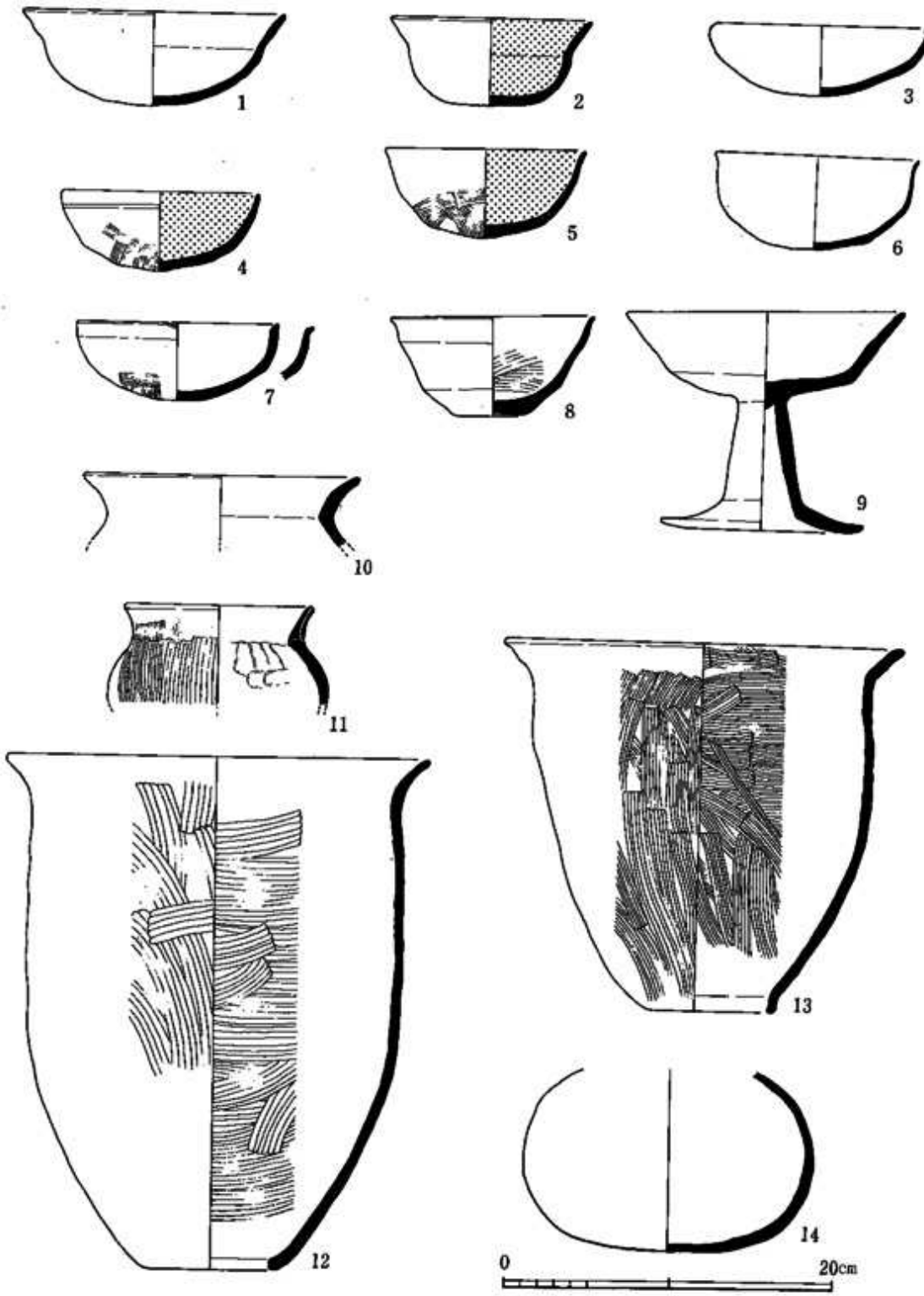
図版14

8号住居址



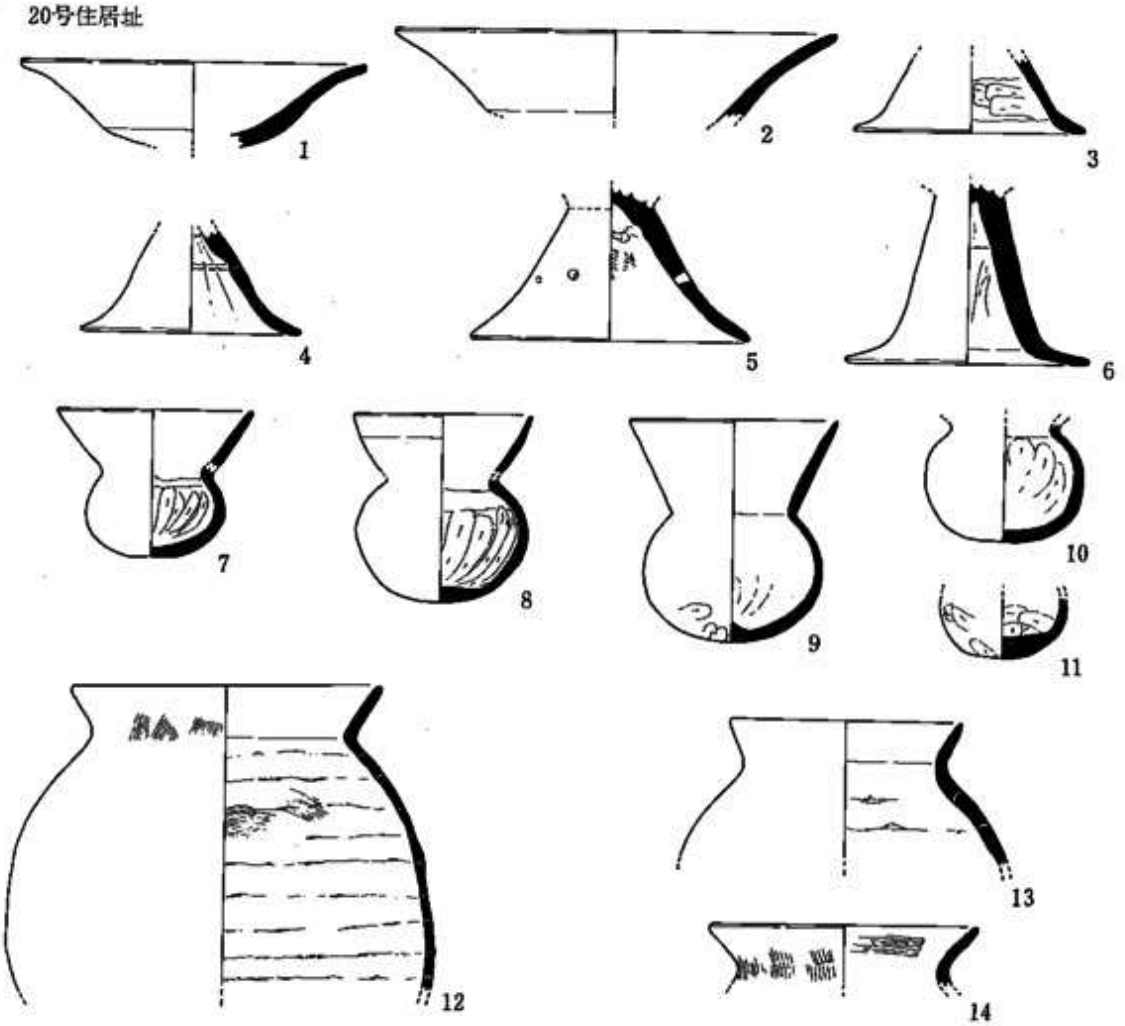
図版15

4号住居址

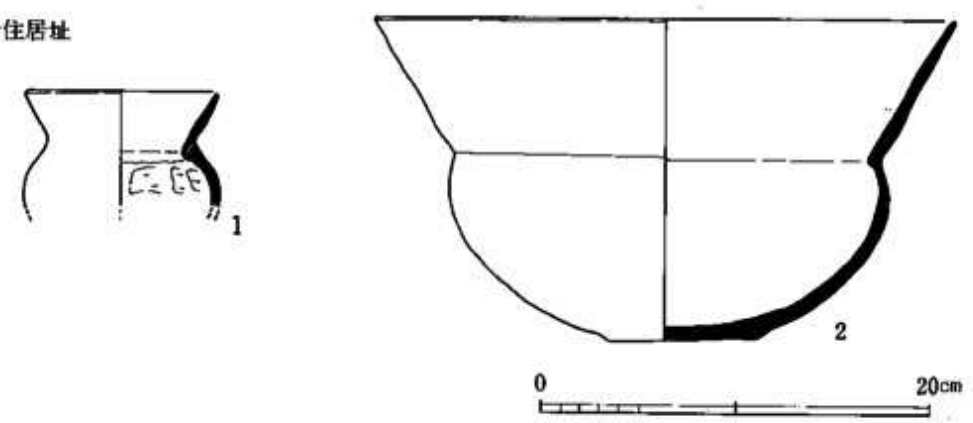


図版16

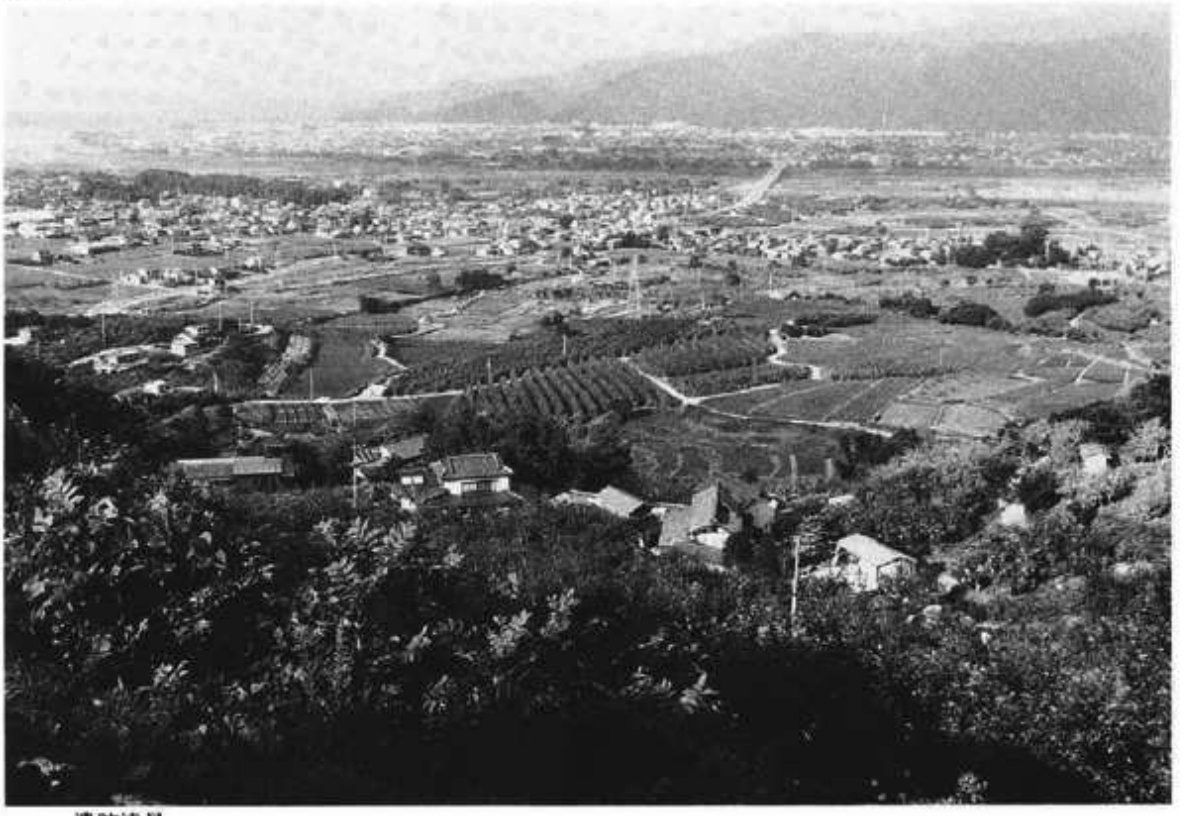
20号住居址



5号住居址



図版17



遺跡遠景

A地区南側

図版18

B区全景

調査風景

図版19

1号住居址

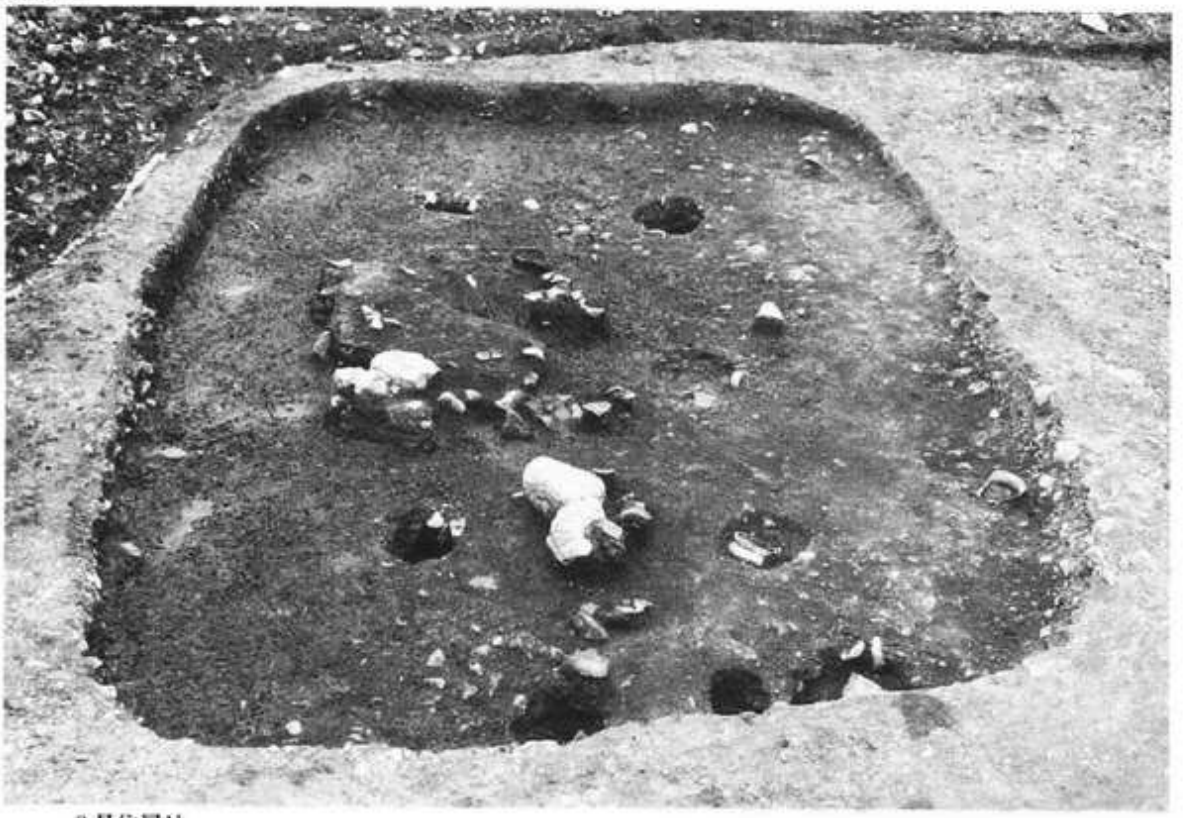
2号住居址

図版20

3号住居址

3号住居址遺物出土状態

図版21



8号住居址

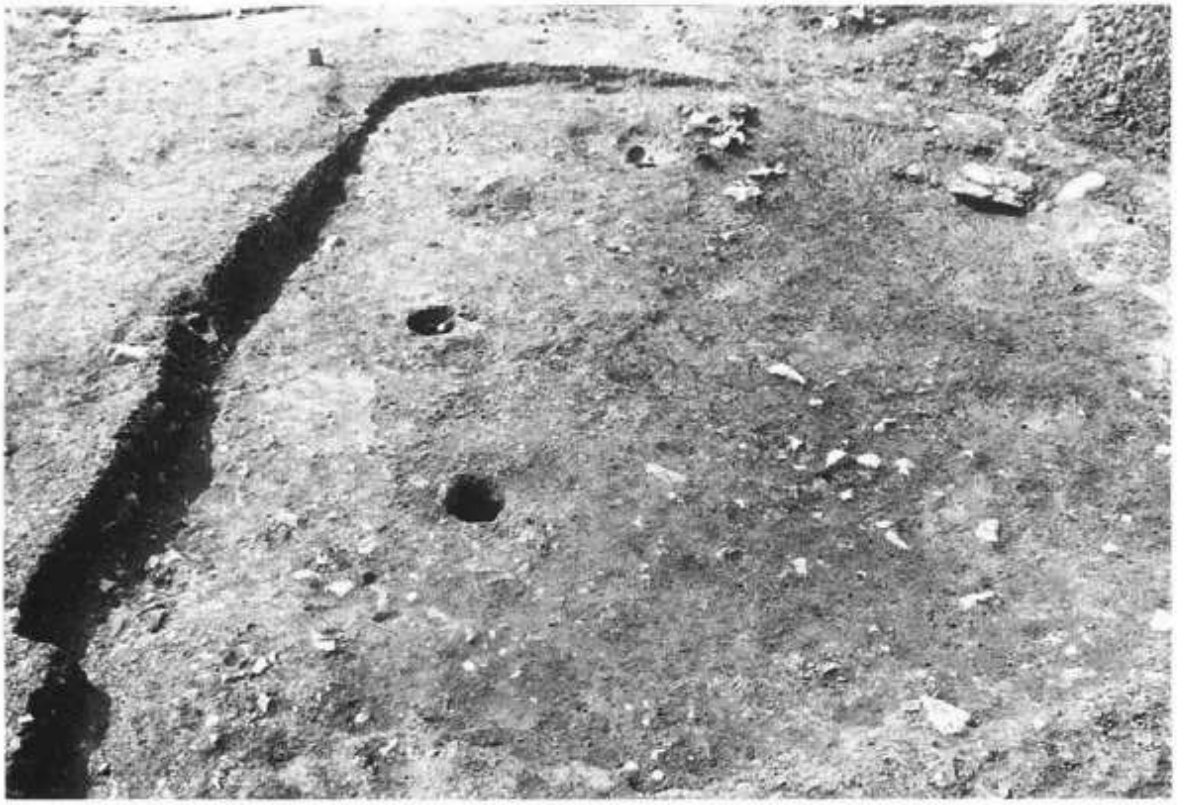
11号住居址

図版22

7・9・10・17号住居址

19・20号住居址

図版23

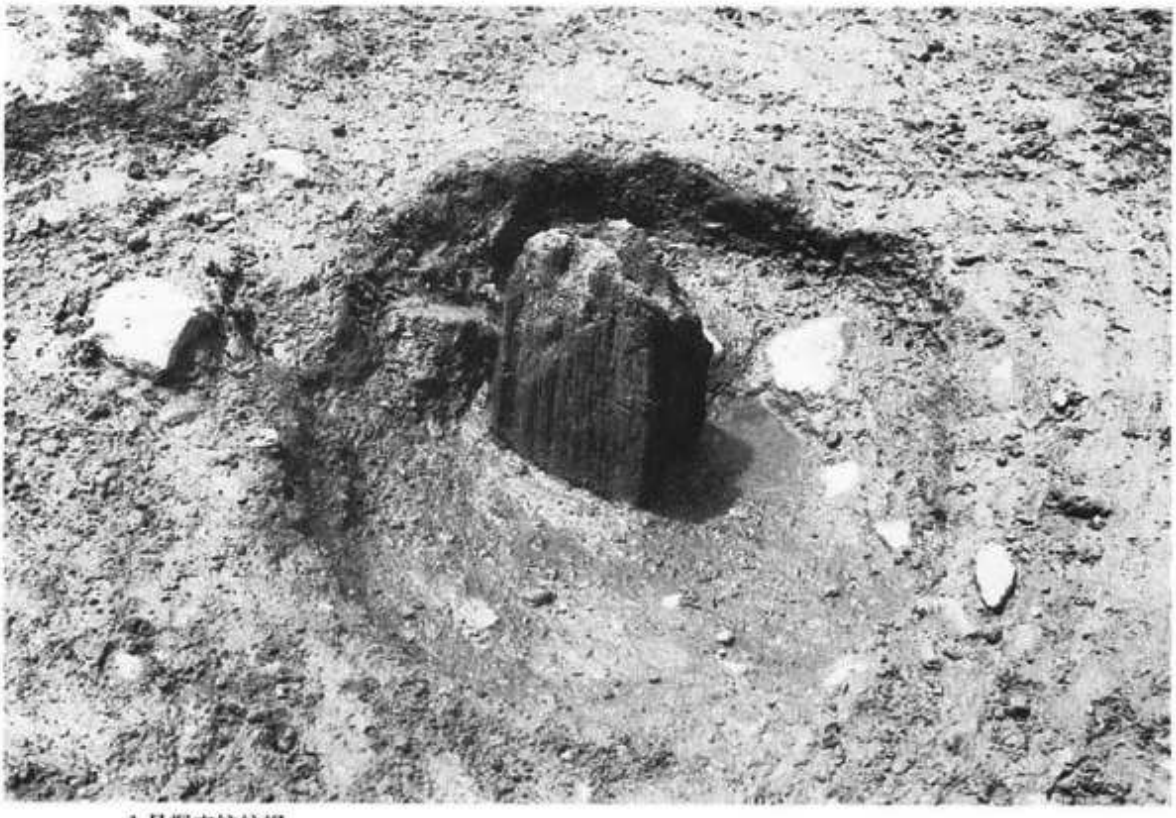


4号住居址

4号住居址遺物出土状態

図版24

1号掘立柱建物址

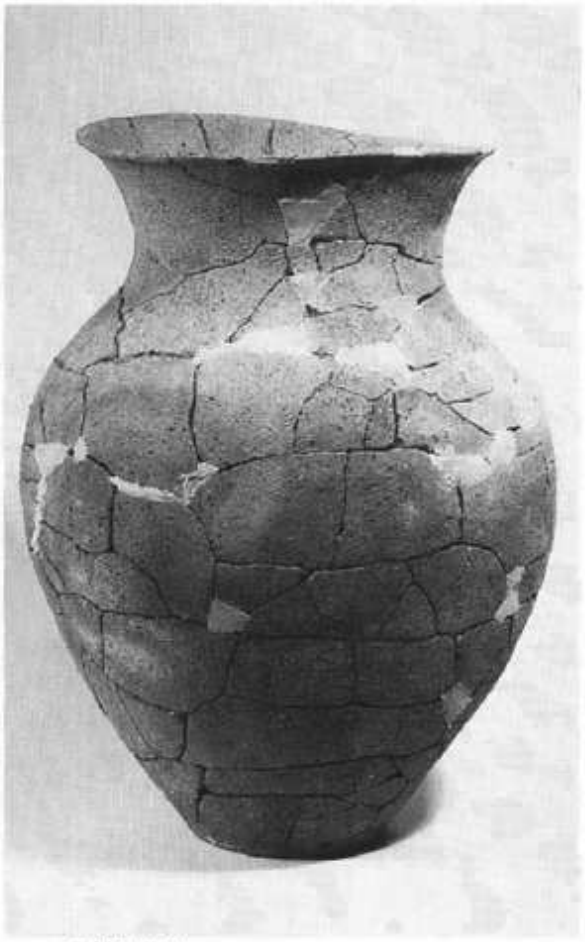


1号掘立柱柱根

図版25

1 号住居址

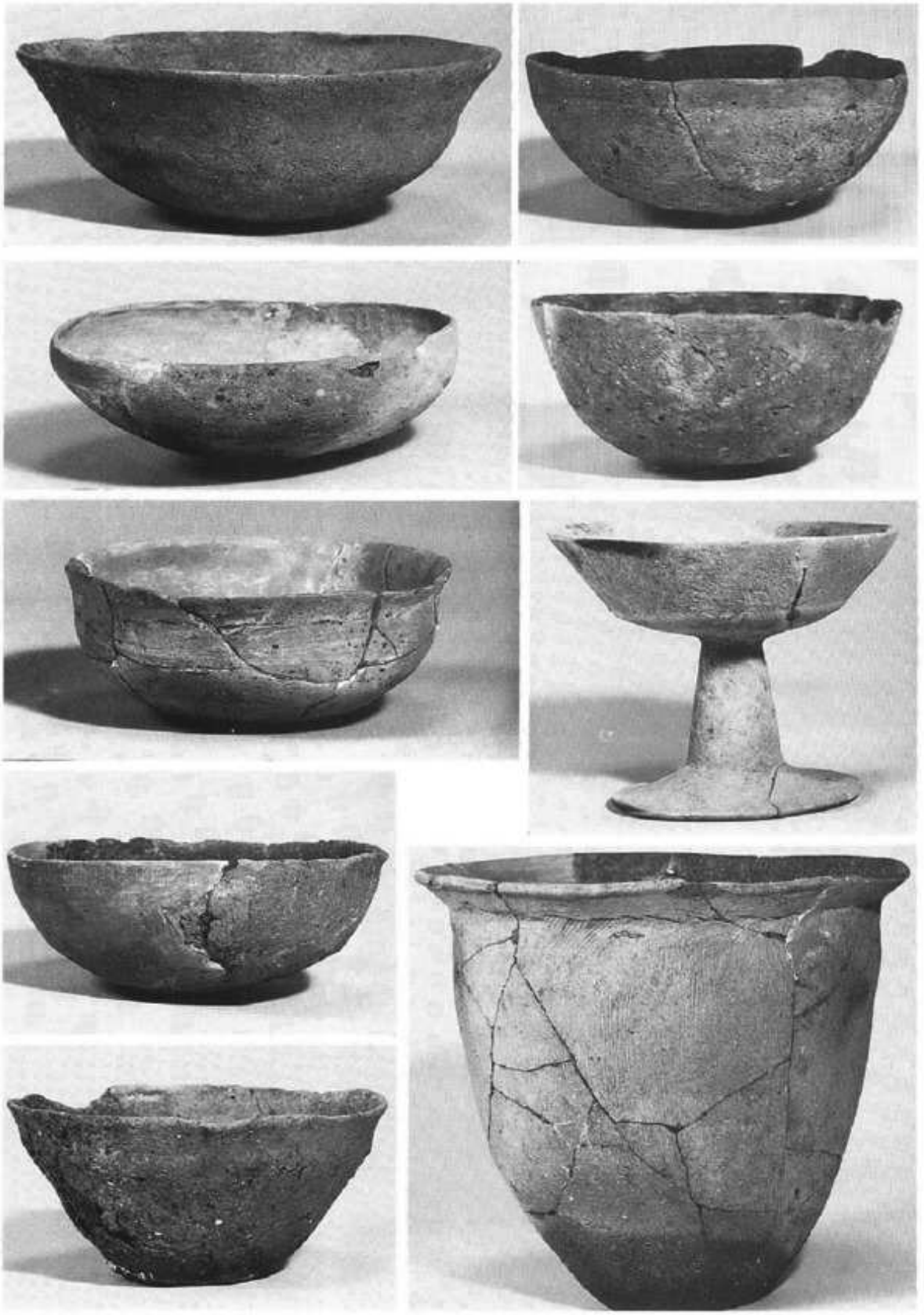
図版26



3号住居址

8号住居址

図版27



4号住居址

3　石原A・白石遺跡　発掘調査

I　調査の概要

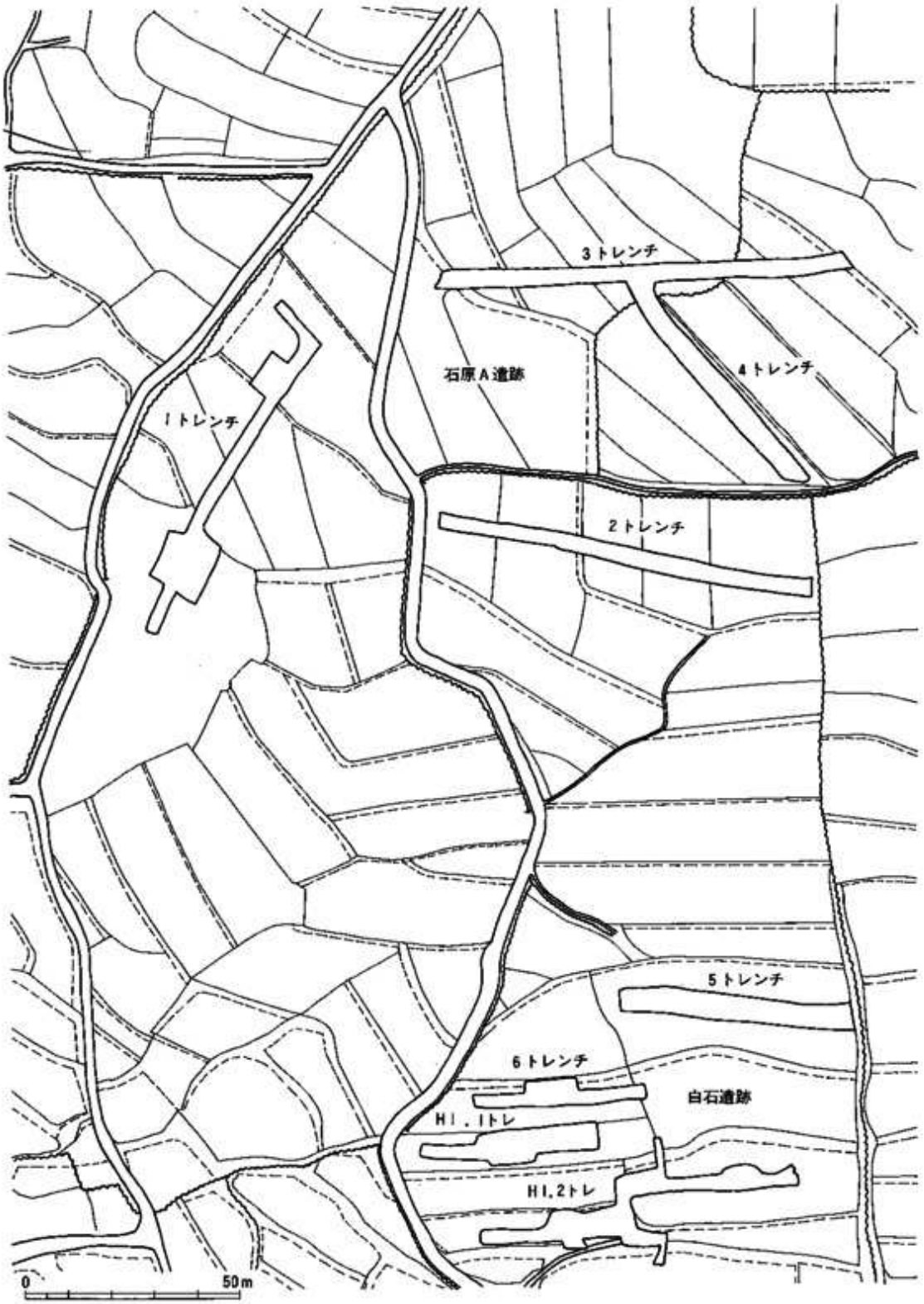
1　調査遺跡名　石原(いしはら)A遺跡　（市No.120　調査記号ＩＨＡ）
　　白石(しろいし)遺跡　（市No.209　調査記号ＳＩ）
2　所在地及び　長野県更埴市大字八幡字石原・白石
　　土地所有者　長野県土地開発公社
3　原因及び　公共事業＝県営八幡工業団地建設工事
　　事業者　長野県土地開発公社
4　調査の内容　トレンチ調査（1,000㎡）
5　調査期間　昭和63年９月12日～同年12月22日（21日間）
6　調査費用　総額2,320,000円　全額事業者負担
7　調査主体者　更埴市教育委員会・更埴市遺跡調査会
　　担当者　佐藤信之
　　参加者　青木美知子　市川睦雄　内山はつ　岡田栄子　小野義富
　　久保啓子　小林芳白　小松由里子　坂口城子　篠崎節子
　　白石正生　高野貞子　宮崎恵子　村山　豊
8　種別・時期　散布地　縄文・古墳時代～中世
9　遺構・遺物　縄文時代後期　土器集中区（石原A）
　　平安時代　柱穴群・溝（石原A・白石）
　　中世　木棺墓（石原A）
　　出土遺物総数　土器片コンテナ10箱
　　木製椀５点　櫛１点

II　調査の経過

昭和62年度に実施した試掘調査の結果に基づき、遺跡内にトレンチを設定し、遺構が検出された部分を拡張して調査を進めることとなった。市教育委員会では調査面積を約3,500㎡と考え、調査費用を8,600,000円と積算し、県教育委員会の指導を仰いだ。昭和62年12月14日に調査計画は妥当との回答があったため、県商工部、市商工観光課に連絡した。昭和63年に入り、9月から調査を実施できるよう手続を始めた。賃金等の単価に変更が生じたため、調査費用を8,700,000円として改めて通知した。8月26日に県商工部長より発掘調査の依頼があり、9月9日に長野県土地開発公社理事長と更埴市長との間に委託契約が締結され、さらに更埴市長と更埴市遺跡調査会との間に同様な契約がなされ、9月12日より調査を開始した。調査の進行につれ、当初予想された遺構の検出はなく、また作物の関係で調査ができない部分があったため、調査の一部と報告書の作成は次年度に行うこととし、平成元年2月10日に調査費用を2,300,000円とする変更契約を行った。

III　調査日誌

9月14日　重機、作業員入り1トレンチより調査開始。
16日　1トレンチの遺物出土部分拡張、2トレンチ掘削。
19日　3トレンチ掘下げ開始。
23～28日　作業休み
10月3日　木棺墓掘り下げ。
7日　白石遺跡に5トレンチ設置。
12日　3トレンチより実測を開始。
19日　耕作物の関係で調査中断。
12月21日　雪の中6トレンチの調査再開、基準杭測定。
22日　6トレンチ調査完了、残った部分は来年度に実施することとし調査中止。


3トレンチ
石原A遺跡
4トレンチ
1トレンチ
2トレンチ
5トレンチ
6トレンチ
白石遺跡
H1.1トレ
H1.2トレ
0
50m

第25図　調査位置図

Ⅳ　遺構と遺物

1　石原A遺跡

遺跡内に4本のトレンチを設定し、遺構が検出された部分を拡張することとし調査を行った。

1トレンチ

遺跡の西側に南北方向で設定したトレンチで、長さ78mほどとなる。地形が北へと傾斜しているため、両端では約6mの比高がある。1mほど掘り下げると黒褐色の礫を多量に含んだ土層となり、遺物を含んでいる。厚さは地点によって異なるが、60cmほどを測る部分もある。この土層を取り除くと、地山層と思われる暗茶褐色の砂礫層となる。

柱穴群

トレンチの南端では、この地山層を掘り込んだ小さな柱穴が多数検出された。一部には柱根が残るものもあったが、一定の配列を示しておらず、ほとんど掘り方がないため、上部より打ち込まれた杭の可能性もある。

遺物はトレンチ内全域より出土しているが量は僅かである。比較的出土の多かった北側の一部を拡張したが、遺構の検出はなく遺物もさほど出土しなかった。遺物はいずれも小片であり、特に土師器は器面が剥離しており原形をとどめているものはほとんどなかった。1・2は高台を持つ須恵器坏で、底部はヘラケズリが施されている。3は鉢あるいは高坏の坏部と思われるもので、体部下半に沈線を巡らしている。器面には自然釉が付着しており、内面に重ね焼きの痕跡を残している。

2トレンチ

遺跡の中央付近に東西約88mで設定したトレンチである。耕作土下は粘土層が1mほど堆積しており、その下には黒色の砂礫層が部分的に僅かに認められた。小さな遺物が数10片含まれていたが、遺構の存在は認められなかった。

3トレンチ

遺跡の北側に東西約95mで設定したトレンチである。耕作土下には粘土層があり、その下は西側では泥炭に近い漆黒土層、東側は砂礫層となる。遺構は認められなかった。

遺物は粘土層と下部層の間から僅かに出土している。縄文式土器と思われる無文土器と、土師器・須恵器の小破片がある。1・2は須恵器で2は壺の口縁部、3は櫛描波状文が施された甕の口縁部である。3は細隆線状の変形工字文を描出したもので、縄文晩期の氷式に比定されるものと思われる。

4トレンチ

3トレンチに接して約60mの長さで設定したトレンチである。南東側は耕作土を取り除くと、地山層と思われる砂礫層となるが、3トレンチと接する部分では盛土も含め2mほどの深さから泥炭層が検出されている。

土器集中区
(図版28・31)

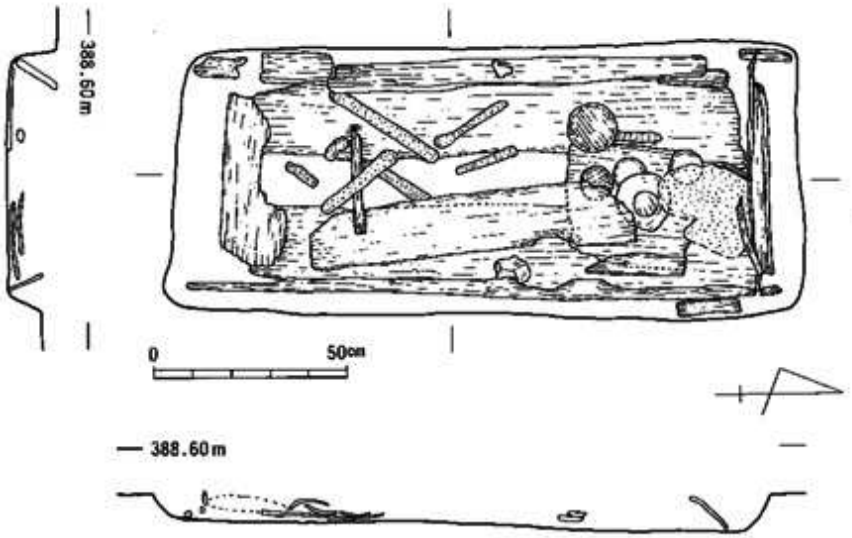
3トレンチと接する泥炭層の部分より検出されたもので、3mほどの範囲で約10cmの厚さに土器が集中していた。検出面からはかなりの出水があったが、掘り込みなどは検出されなかった。

コンテナ3箱分ほどの遺物が出土しているが復元できるものはない。遺存状態は良好であったが、多くは胴部と思われる無文土器であった。文様はヘラ描沈線と縄文によって構成されており、磨消縄文と羽状沈線文が多用されている。1～4は口縁部に羽状沈線文が施され、1は端部を刻んでいる。5～12は縄文帯を持つもので、10が無節縄文であるほかは細かな単節の縄文を施している。5は列点文が巡らされており、8～10は口縁部に粘土紐を貼付け突起を作り出している。僅かに残る胴部には、羽状沈線文が見られる。14・15は波状口縁となるもので、14の口縁内側にはボタン状の貼付を行っている。16の底部には網代痕が顕著に観察できる。

器形を見ると、小破片であり傾きは明らかではないが、口縁部が内側に屈曲するものと、内弯気味に外開するものが見られる。

木棺墓
(図版32)

4トレンチ東側より検出されたもので、耕作土を除去すると木棺の上部が検出された。墓壙は礫層中に掘り込んでおり明確ではないが、残存する深さは10cmほどで、規模は長さ160cm幅58cmとなり、N－2°－Wに長軸方向を持つ。木棺は側板が長さ147cm、木口板が50cmほどで厚さは2.5cmを測ることができる。また残存する高さは西側側板で14.5cmほどである。蓋と



第26図　石原A遺跡　木棺墓

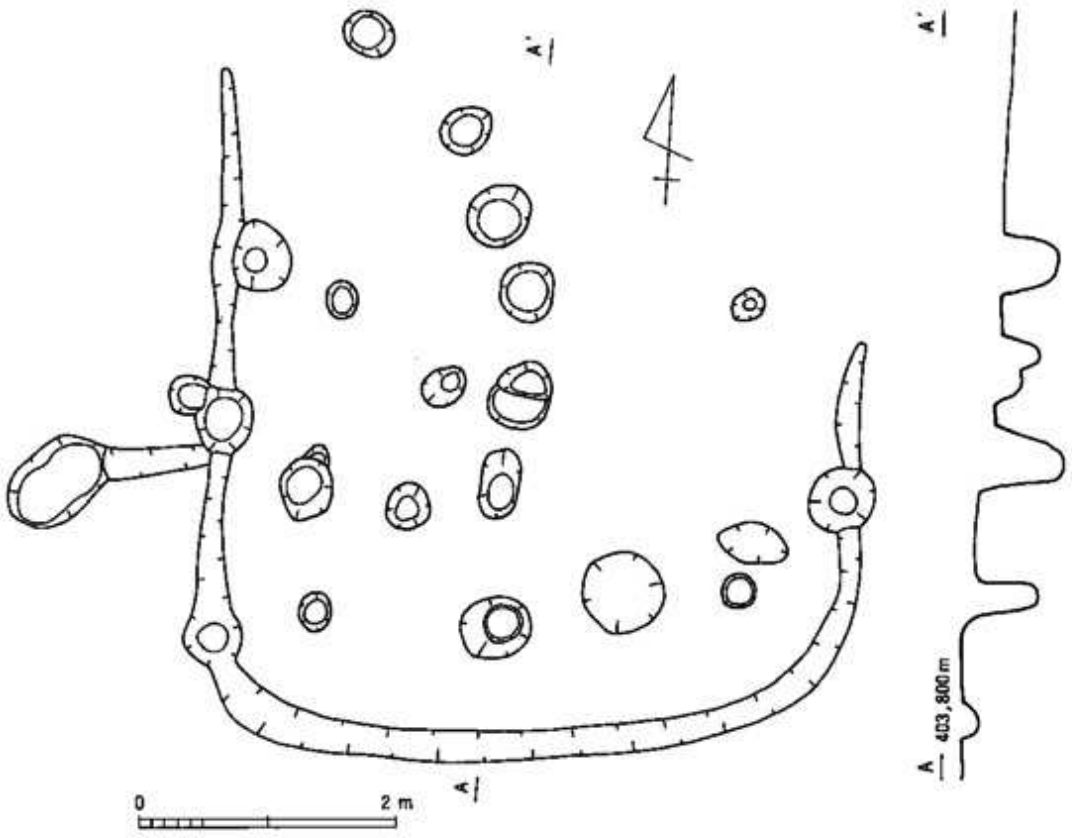
思われる薄い板が１枚内部にあり、これを取り除くと人骨が出土した。すでに粉状になっていたが、北に頭部を持つ伸展葬と思われる。頭部は35cm角の板に載っており、付近より木製の椀５点が出土している。頭部骨片に混入して櫛の破片も出土しており、髪に差されていたものと思われる。底には幅20cmほどの板が２枚並べられていたが、中央部分は15cmほど開いている。

2　白石遺跡　調査区の南側が耕作物の関係で調査ができないため、南側は来年度に行うこととし、２本のトレンチを設定し調査を行った。

5トレンチ　遺跡の北側に東西約55mで設定したトレンチである。耕作土下は盛土と思われる暗褐色土があり、その下は地山層の黄褐色砂礫層となり、遺構の検出はなかった。

遺物は盛土と思われる部分から、土師器と須恵器の小破片が僅かに出土している。

6トレンチ　遺跡の中央部分に東西約40mで設定したトレンチで、今回の調査では最



第27図　白石遺跡　溝址・ピット

も標高の高い部分にあたる。出土遺物も多く、ピット・溝などの掘り込みが検出されているが、一つのまとまった遺構として捉えられるものはない。

溝址・ピット（図版31）　6トレンチ中央部分より検出された遺構で、幅10～20cm、深さは最大で15cmほどを測ることのできる溝址を中心に構成されている。溝址は北側に開口する「コ」の字状を呈しているが、北傾斜となるため本来は5×6mほどの隅丸方形になっていたと考えられる。

溝で囲まれた内側からは多数のピットが検出されている。直径45cmほどのものが多く、深さも60cmを超えるものがあり、柱穴と考えられるが、一定の配列を示していない。

出土遺物も多いが、遺構との関係は明らかでない。古墳時代の遺物も若干含まれているが、平安時代の遺物が大半を占めている。

V　ま　と　め

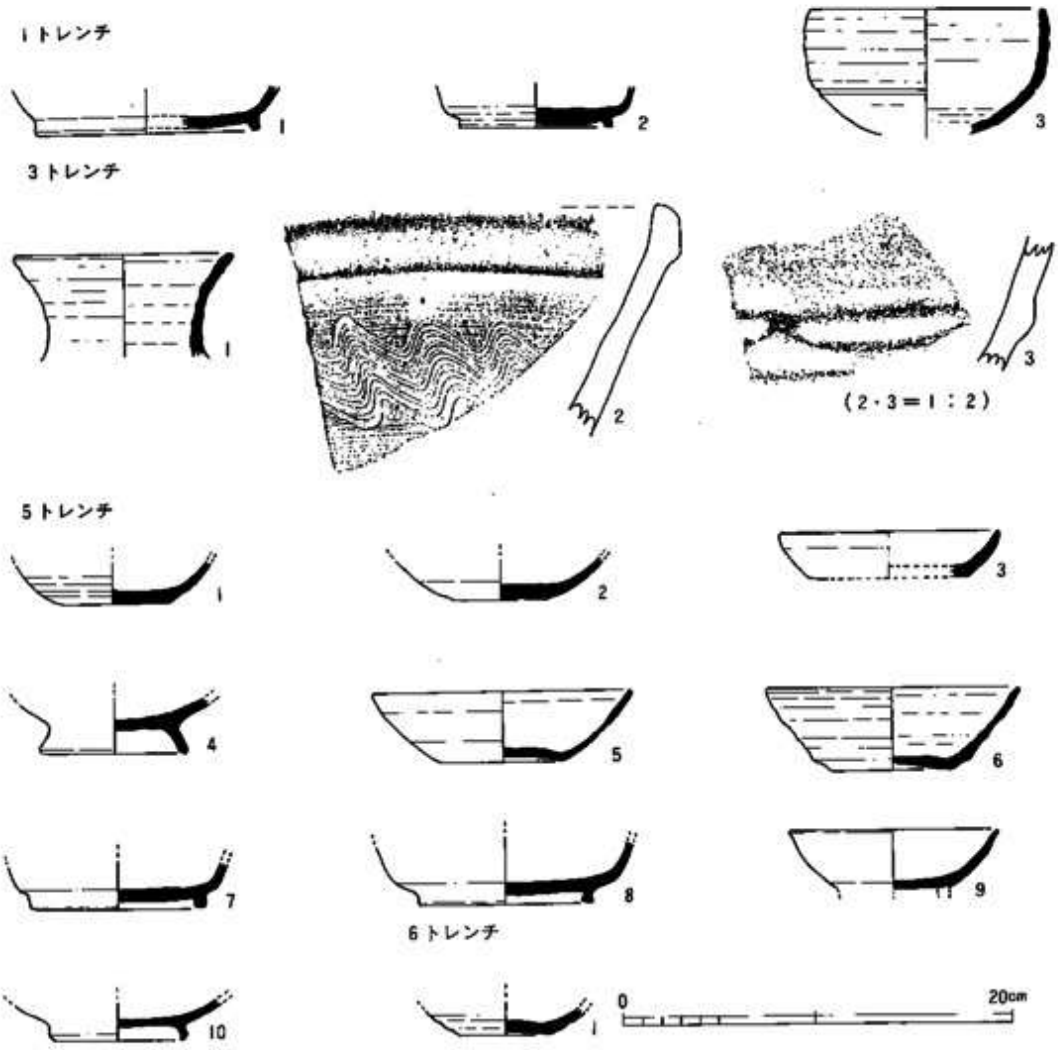
昭和61・62年度の試掘調査の結果に基づきトレンチを設定し、遺構の検出された部分を拡張することで調査を進めたが、両遺跡とも柱穴群や溝址など、性格不明の遺構が僅かに検出されたにすぎなかった。以下、調査時の所見について記しまとめとしたい。

白石遺跡　遺跡の南側が耕作物の関係で今年度は調査できなかった。2本設定したトレンチのうち、5トレンチは遺構の検出はなく、遺物も数片の出土はあったが、盛土中からの出土であり、遺跡の範囲から外れるものと思われる。6トレンチの中央部分から検出された柱穴群及び溝址は、周辺の出土遺物から、平安時代の遺構と考えられる。しかし柱穴群は一定の配列を示しておらず、上屋構造を持っていたかどうかは定かでない。また溝址も当初は建物の外周を囲む溝ではないかと考えたが、柱穴との関係が明確にならず、その性格は不明である。6トレンチの遺物量から見れば、周辺に集落址の存在を考えざるを得ないが、今回の調査でも住居址の存在を確認することはできなかった。

石原A遺跡　4本のトレンチを設定しその総延長は約420mに及んだが、柱穴群、木棺墓、土器集中区各1ヶ所の検出に終った。このうち注目されるのは土器集中区である。同様の遺構に長野市の大清水遺跡のものがあり、湿地部分にある点も共通している。出土土層が泥炭に近い点、及び現在の環境から考えれば、居住地とは考えにくく、遺構の性格を把握するには、さらに周辺地域との比較検討が必要である。また出土地が佐野川氾濫原の南端ともいえる地域であり、更埴地域の平地部に存在する数少ない遺跡の一つといえる。こうした平地部に遺跡立地が降下する時期を知る上でも重要な手掛

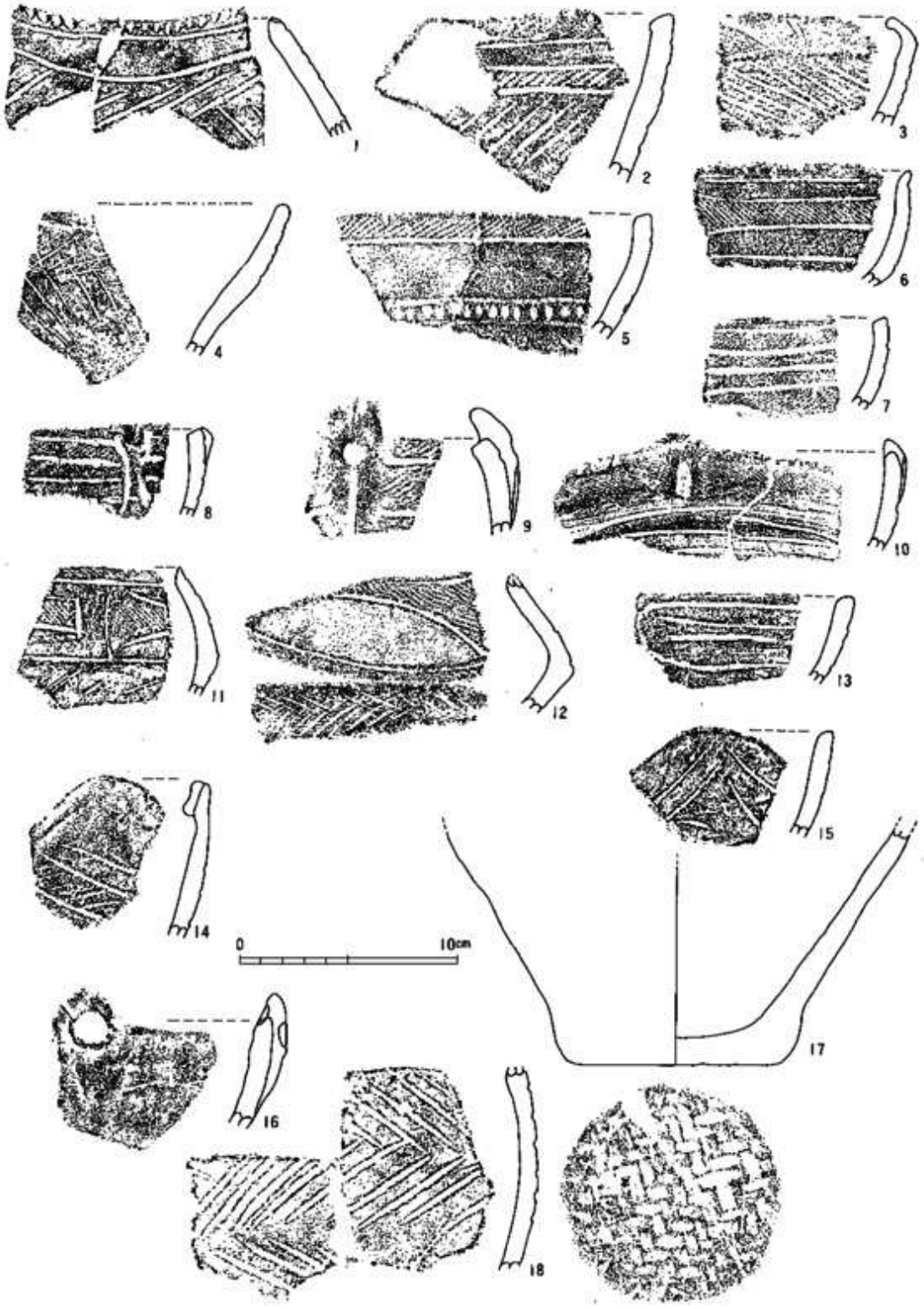
りとなる。さらに、一帯は地滑り地帯とされているが、地滑り発生の時期を知る手掛りにもなると思われる。

調査から遺跡の性格を明らかにすることはできなかったが、遺構の検出がなく、広範囲に遺物が分布する原因として考えられることは、開発区域内に小単位の遺跡がいくつか存在していることが上げられる。事実八幡地区の沖積地の遺跡は小規模のものが多く、20haを超える開発区域の中からこれらを検出することには限界がある。また開田の際、すでに破壊されていることも考えられるが、いずれも推測の域を出するものではない。



第28図　トレンチ出土遺物（1・3石原A，5・6白石）

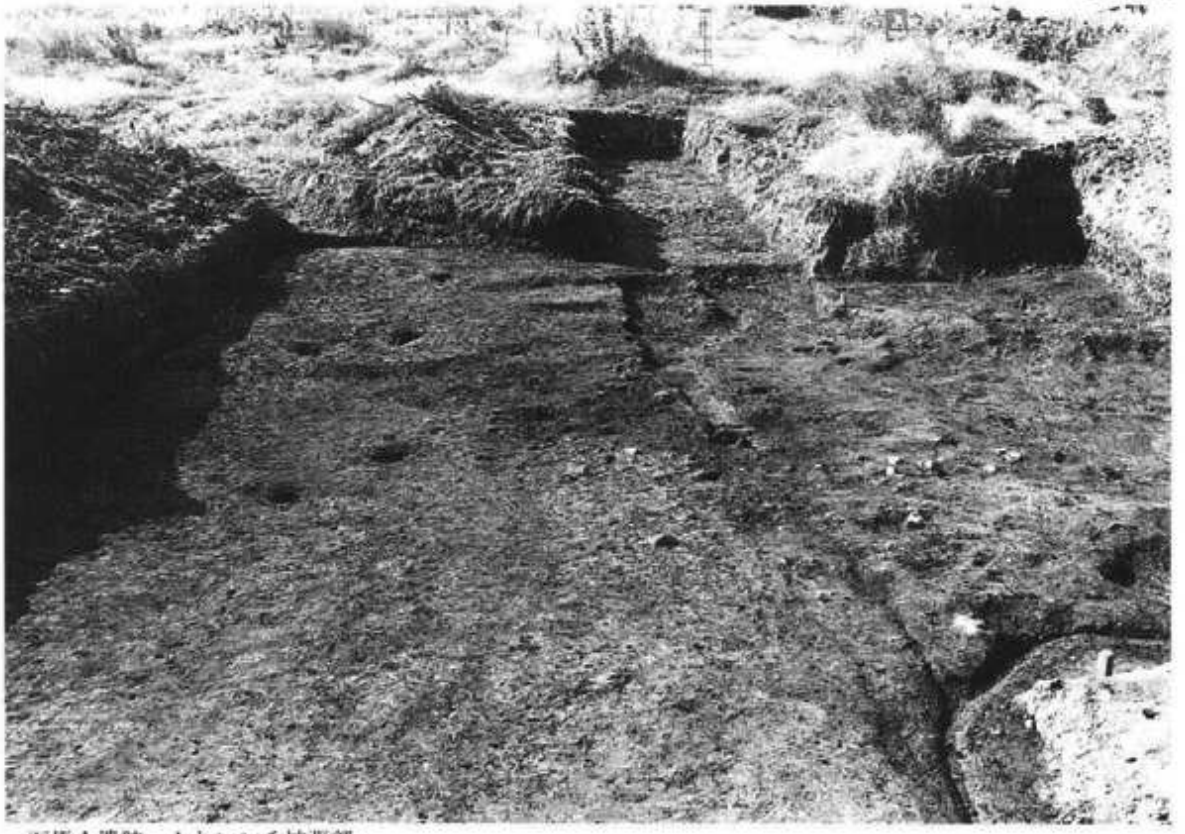
石原A遺跡　土器集中区



図版29

調査区遠景

調査風景



石原A遺跡　1トレンチ拡張部

同　2トレンチ

白石遺跡　5トレンチ

図版31

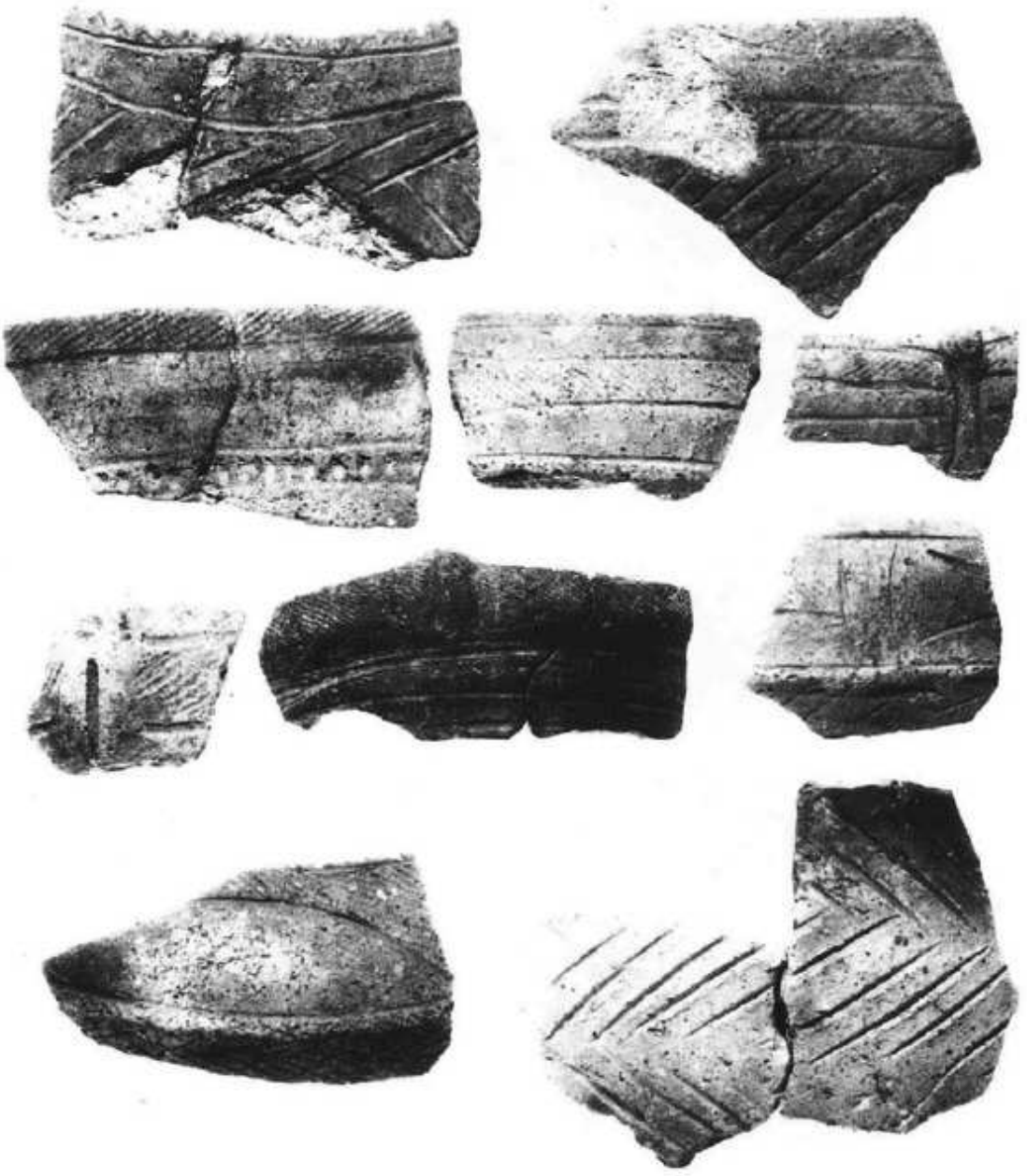
石原A遺跡　4トレンチ土器集中区

白石遺跡　6トレンチ溝址・ピット

石原A遺跡　木棺墓

同　木棺墓頭部

図版33



石原A遺跡　4トレンチ土器集中区出土遺物

白石遺跡　6トレンチ出土遺物

4　峯・白石遺跡　第2次発掘調査

I　調査の概要

1　調査遺跡名　峯（みね）遺跡　（市No.103　調査記号MN２）
白石（しらいし）遺跡　（市No.209　調査記号ＳＩＳ）

2　所在地及び　長野県更埴市大字八幡字峰・白石
土地所有者　長野県土地開発公社

3　原因及び　公共事業＝県営八幡工業団地建設工事
事業者　長野県土地開発公社

4　調査の内容　トレンチ調査（1,300㎡）

5　調査期間　平成元年５月８日～同年６月21日（35日間）

6　調査費用　総額2,500,000円　全額事業者負担

7　調査主体者　更埴市教育委員会
担当者　山根洋子
参加者　久保啓子　越石久子　小松由里子　坂口城子　篠崎節子
白石正生　高野貞子　高橋八重子　田中千枝子
中村文恵　宮崎恵子　村山　豊　依田保子

8　種別・時期　峯　遺跡＝集落址（古墳時代）
白石遺跡＝散布地　弥生・平安時代～中世

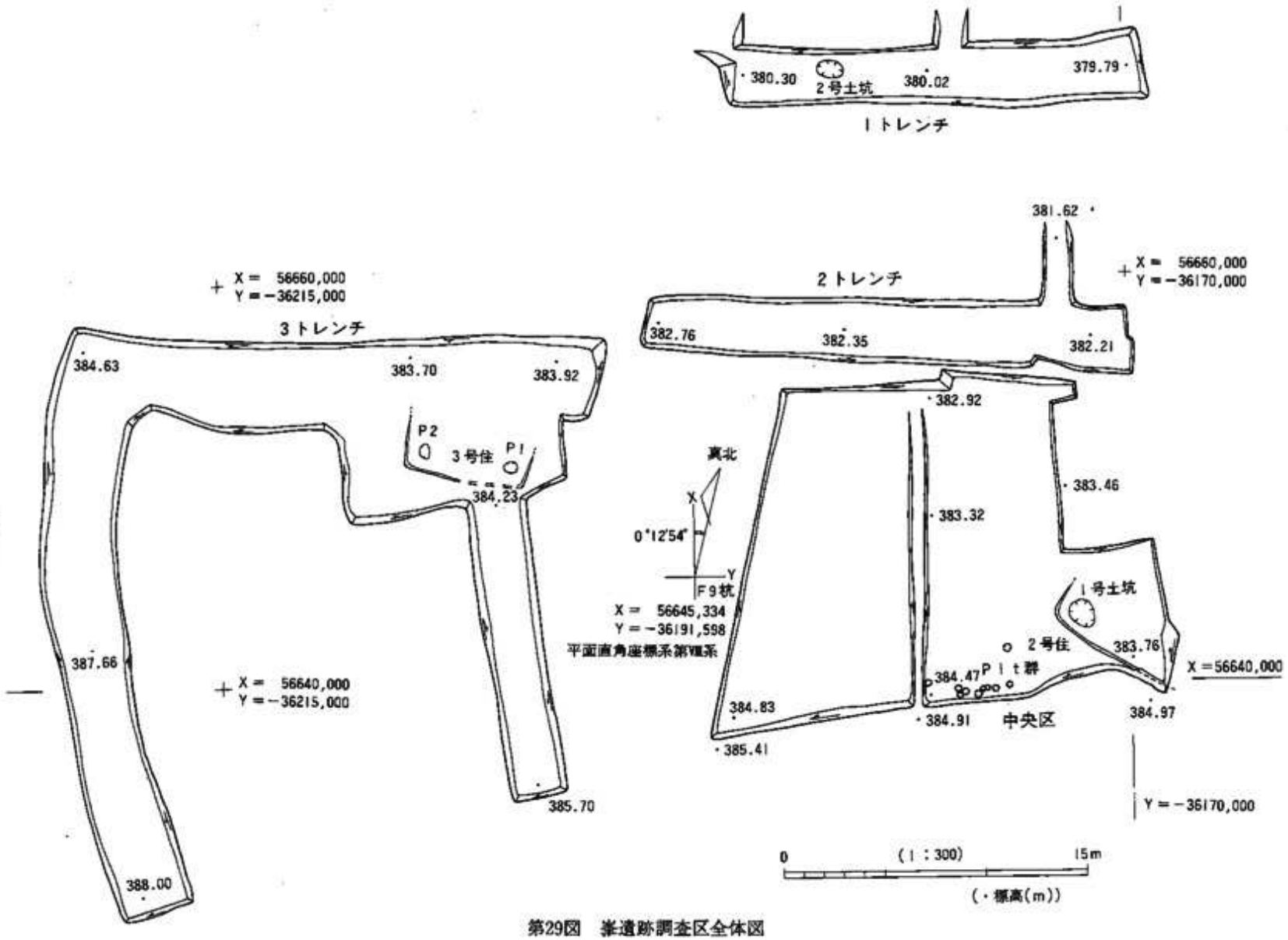
9　遺構・遺物　峯　遺跡＝古墳時代　住居址２棟・土坑１基
土坑１基（時期不明）
出土遺物総数　土器片コンテナ４箱
白石遺跡＝池状の落ちこみ遺構１基
溝状遺構・ピット群
出土遺物総数　土器片コンテナ４箱

II　調査の経過

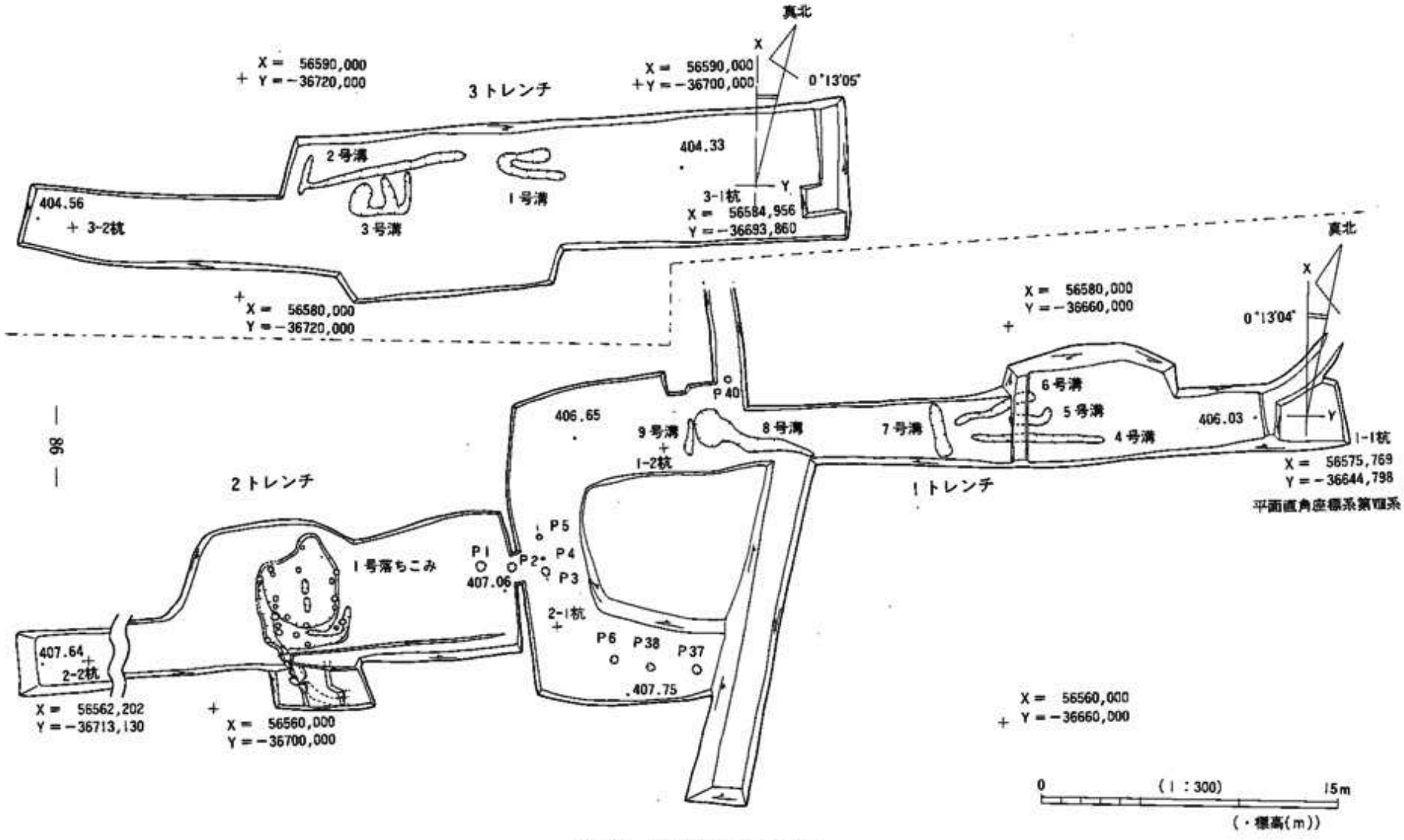
昭和63年度に実施予定であった峯遺跡と白石遺跡の一部が、用地買収と耕作物の関係で調査ができなかったため、報告書の作成と合わせて翌年度に実施することとなった。昭和64年1月7日に県教育委員会より調査計画が妥当との回答があり、調査の準備を開始した。平成元年5月8日に長野県土地開発公社理事長と更埴市長との間に調査費用2,860,000円で委託契約が締結され、市直営で5月8日より調査を開始した。調査の結果当初予想されたほどの遺構の検出がなかったため、平成2年1月23日に調査費用を2,500,000円とする変更契約を行った。

III　調査日誌

	峯　遺跡	白石遺跡
5月8日	作業員入り作業開始。	
11日	雨のため作業中止。	
16日	杭打ち。	
17日	午後雨のため作業中止。	
18日	2号住居址検出。	
20日	実測開始。	
23日	雨のため作業中止。	
25日	重機により調査区拡張	重機によりトレンチ掘削。
26日	雨のため作業中止。	
27日	3号住居址検出。	
29日	重機により調査区拡張	重機により表土除去。
31日	作業員は白石遺跡へ	機材、作業員入り作業開始。
6月1日		乾燥激しく、散水を行う。
7日	実測完了、現場作業を終える。	
9日	測量業者による基準杭の測量。	
10日		重機により調査区拡張。
12日		杭打ち。
14日		1号落ちこみ検出。
16日		雨のため作業中止。
19日		作業員本日で終了。
21日		実測完了、現場作業を終える。



第29図　峯遺跡調査区全体図



第30図　白石遺跡調査区全体図

Ⅳ　遺構と遺物

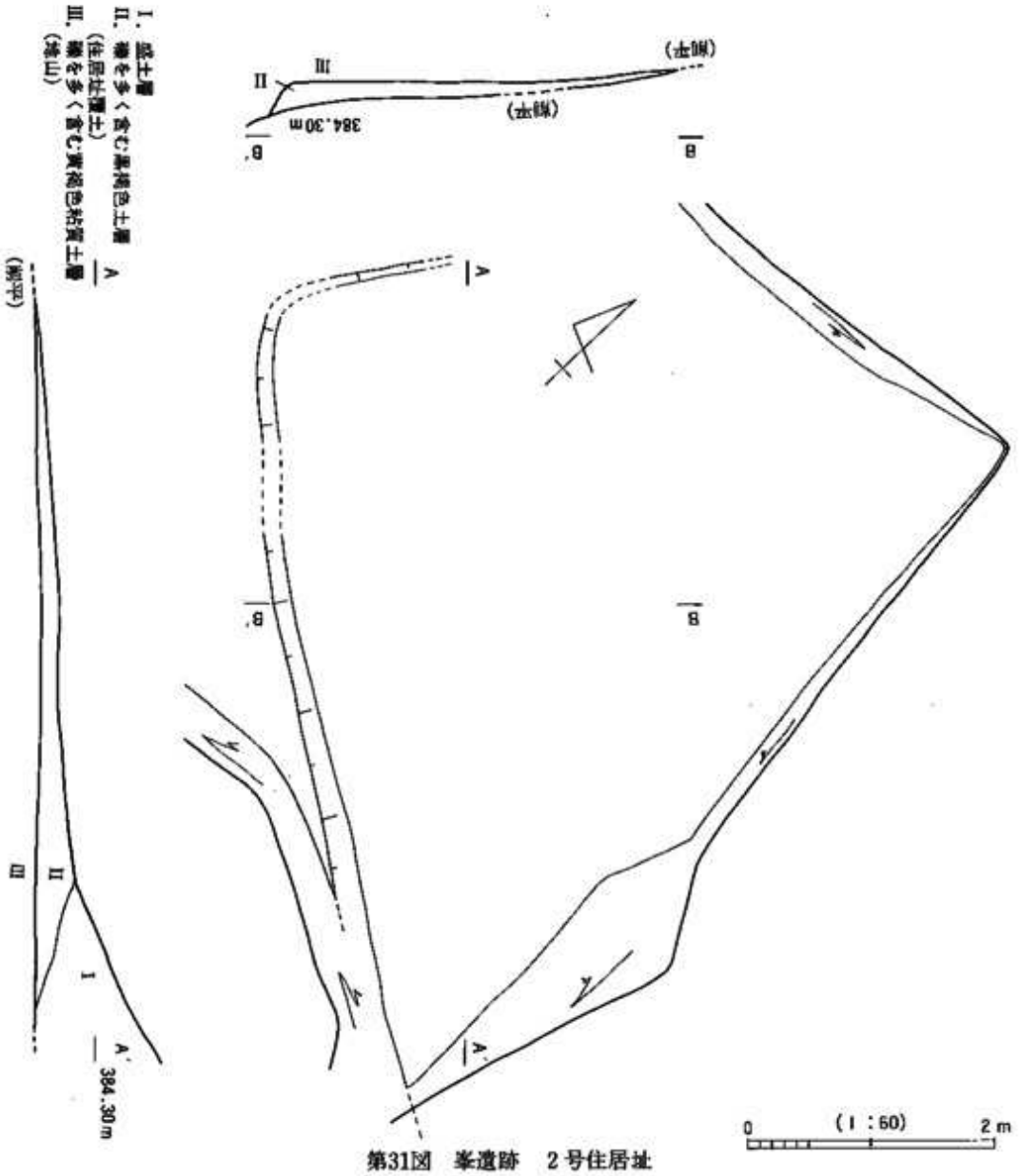
1　峯遺跡

（図版34・46）

試掘調査を含めると4回目の調査となった今回は、トレンチによる試掘を行い、遺構が検出された地点を広げていくという調査方法をとった。検出された遺構は、古墳時代の住居址2棟（2・3号）・古墳時代の土坑1基（1号）・時期不明の土坑1基（2号）のほか、ピット群などである。（遺構番号は、1次調査（先回）の番号に続くもの。）

2号住居址

調査区南東隅で検出され、1号土坑と切り合っている。プランは調査区



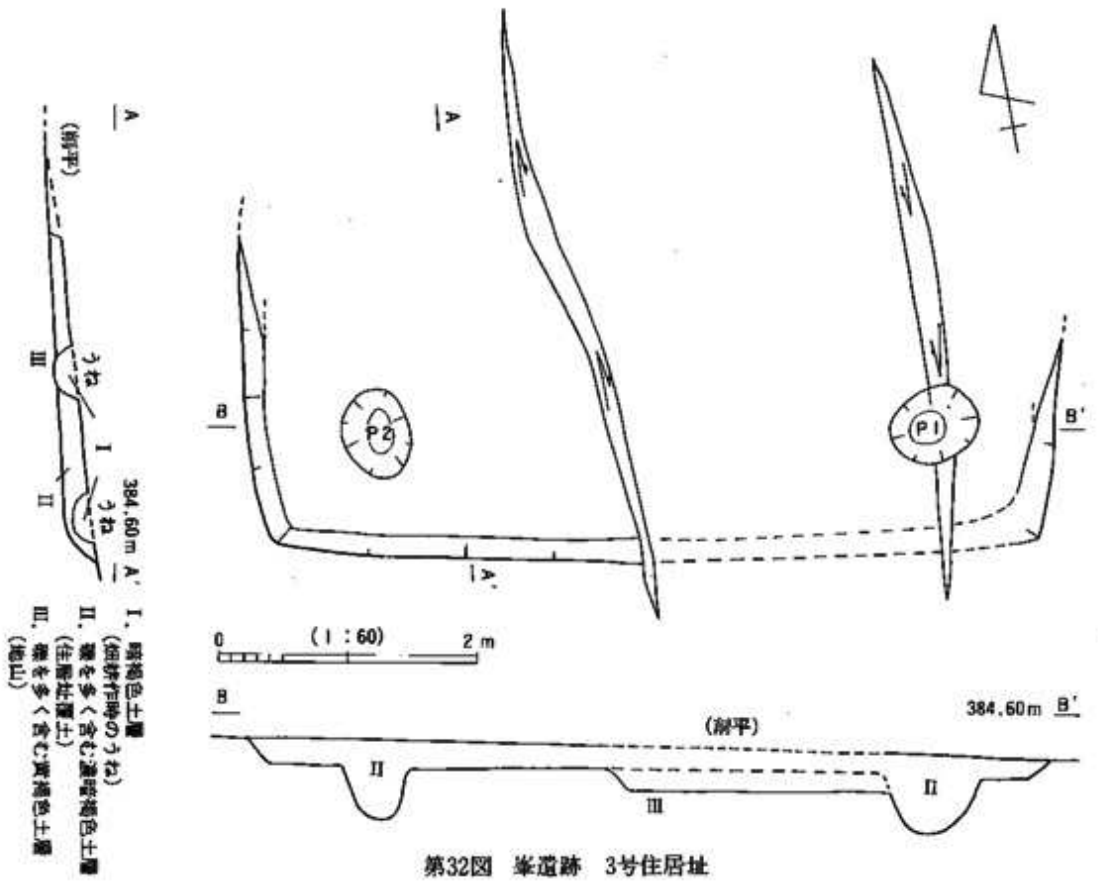
第31図　峯遺跡　2号住居址

（図版39）　外へと延び、簡易舗装の農道の下になるため規模は不明である。調査地点がブドウ畑であったこと、それ以前の、クワ畑開墾の際におこされたうねなどのために床面直上付近まで攪乱が及んでいた。床面はしっかりしておらず、カマドの痕跡も確認できなかった。

遺物は土師器・鉄製品が出土した。1・2は共に坏部を欠く高坏、3・4はほぼ同形同大の甕、5・6は小形坩である。1と5は胎土が似ており、胎土・焼成良好で色調は暗赤褐色を呈する。2と6も互いに胎土が似ており、焼成があまく内外面橙褐色を呈し、暗茶褐色のスコリアを含む。

3号住居址　3トレンチ北東部で検出され、住居址内南側からは2基の柱穴が検出された。北半分は斜面のため流失しており、また表土除去時には重機のツメが一部床面を抜いてしまった。一辺6mの規模だが、プラン・カマドは確認できなかった。

（図版40）　遺物は土師器が数点出土した。1は焼成がややあまく底端部外傾に一部黒斑がみられる高坏で、色調は橙褐色を呈し、暗茶褐色のスコリアを含む。



第32図　峯遺跡　3号住居址

2の甕は橙茶褐色を呈する。3は胎土良好の壺で、口縁部内外面には黒斑がみられ、淡橙褐色を呈する。

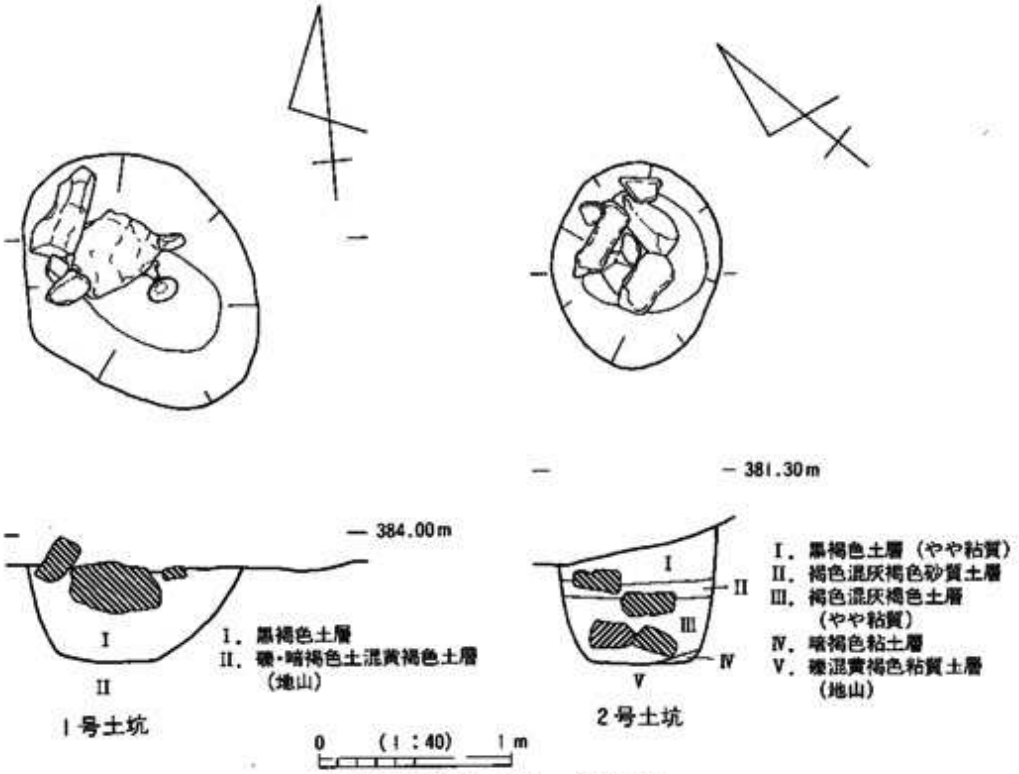
1号土坑（図版39・41）　調査区南東隅で2号住居址が検出された際に、遺物が集中して出土していた地点で、おそらく2号住居址を切って構築されたものである。規模は長径1.45m×短径1.1m、深さ約0.5mを測る。高坏とやや小形の甕が置かれ、その上層には大振りの礫が数個置かれている。

遺物は土師器が出土している。1の高坏は坏部内外面にハケを残しており焼成良好、色調は橙茶褐色を呈する。2の甕も焼成良好で、橙茶褐色を呈する。

2号土坑（図版41）　1トレンチにおいて、調査の最終段階で検出された。急傾斜の斜面に位置し、長径1.05m×短径0.9m、深さ0.7mを測る。土坑内には10～50cm大の礫が詰められている。

遺物は土器の小片が出土しただけで、遺構の時期は不明である。

その他の遺物　1は二重口縁の土師器壺の口縁部で、口径19.8cmを測る。焼成はややあまく、色調は橙褐色を呈する。暗褐色のスコリアを含む。



第33図　峯遺跡　1号・2号土坑

2　白石遺跡
（図版35・46）

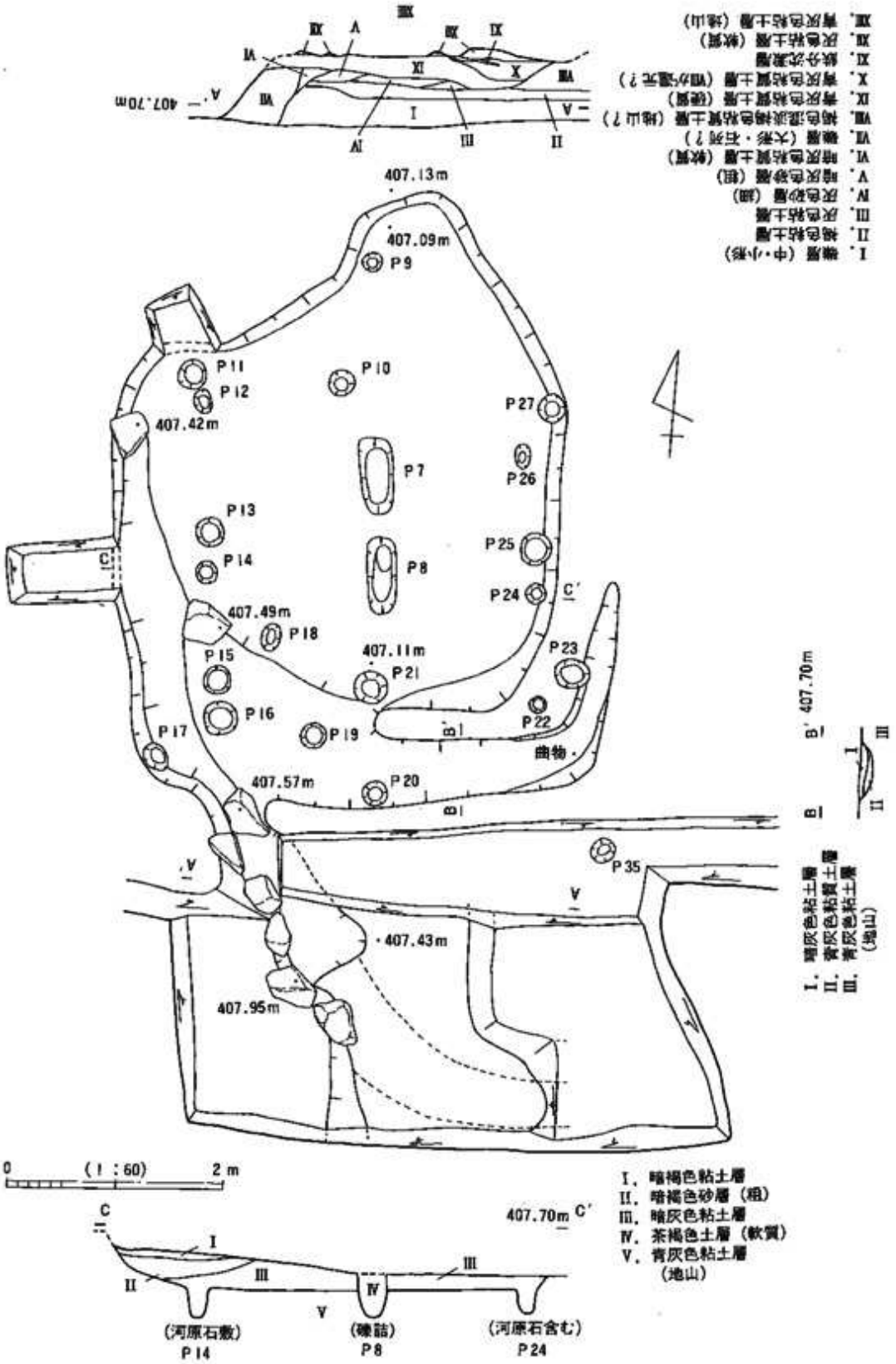
調査はトレンチ調査を主体にして行い、遺構が検出された地点を広げていく方法で進められた。検出された遺構は、池状の落ちこみが認められた遺構（1号落ちこみ）のほか、溝状遺構・ピット群などがある。

1号落ちこみ
（図版44・45）

2トレンチの中央部で検出され、池状の落ちこみが認められた遺構である。南側が調査区外へ延びており、南北規模は9m以上、東西は約5mを測る。覆土は礫を含まない暗灰色の粘土で、一部暗灰色の砂層が混じる。この軟質の暗灰色粘土層を掘り下げると、よく締まった青灰色粘土層になる。この青灰色粘土層の面が遺構の底部と考え、これより下層への掘り下げは行わなかった。なお青灰色粘土は時間が経つと酸化して褐色に変わる。

落ちこみ内部及びその付近では、多数のピットが検出された。ピットの覆土はほとんどが暗灰色粘土だが、P_7とP_8の覆土だけは茶褐色土で、その下層には多量の礫が詰められている。またピット内部には河原石や小角礫、平石を敷いていたものが数基確認された。P_{12}・P_{14}には5cm前後の河原石が敷きつめられ、P_{21}には小角礫が数個敷かれ、P_{15}には1枚の平石が敷かれている。他にP_{17}・P_{24}・P_{26}内から小角礫が出土した。ピットの中には、大小2つのピットが並列してセットになるものが、5例検出された（P_{11}とP_{12}、P_{13}とP_{14}、P_{15}とP_{16}、P_{24}とP_{25}、P_{26}とP_{27}）。

第34図　白石遺跡　調査風景



第35図　白石遺跡　1号落ちこみ

落ちこみに伴うと思われ、南側へ延びる溝状遺構の覆土は砂層で、その西側縁辺には30～50cm大の角礫が並べられている。落ちこみの内部の西側からも、2個の角礫が出土した。

遺物は土師器・須恵器・木製曲物・勾玉が出土した。土器は、ほとんどが小片で、図示できたものは少ない。1は須恵器坏、2はタタキをもつ須恵器甕で、共に灰色を呈する。木製曲物(3)は、落ちこみに伴うと考えられる、落ちこみ東側の溝状遺構内から出土した。小形の曲物の底板で、直径8.3cm、厚さ0.5cm、2.4cm以上の幅の側板破片と共に出土したものである。勾玉(4)は水晶製で、落ちこみの南側を拡張した際に、暗灰色粘土層より上層の、礫層から出土した。

その他の遺物

各トレンチから弥生土器・土師器・須恵器、銅銭などが出土した。1はかわらけ状の皿で、淡橙褐色を呈する。2は高台付の坏で、高台端部は丸く内面黒色を呈する。3は土師器高坏で、椀状の深い坏部をもち、脚部には円形の穿孔が施されている。4は内外面黒色処理された高台付坏で高台端部は鋭い。5は土師器甑で底部中央に径約1.6cmの穿孔が施されている。

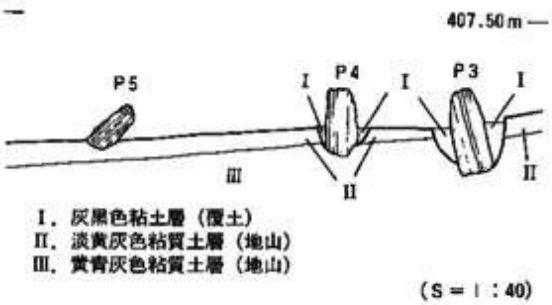
6・7は弥生土器で、7には伊那谷の弥生土器にみられる櫛描四分の一円弧分が施文されている。

銅銭（8～10）は9枚出土しており、全て北宋銭である（表4）。

図版No.	種　類	径(cm)	初　鋳　年	備　考
35－8	天聖元宝(篆)	2.50	北宋天聖元年(1023)	
	天聖天宝(真)	2.55	北宋天聖元年(1023)	もう1枚と共に錆着して出土。
35－9	天禧通宝(真)	2.45	北宋天禧年間(1017～)	一括出土　他の2枚と共に錆着して出土。
35－10	至和元宝(真)	2.34	北宋至和元年(1054)	
	嘉祐通宝(篆)	2.39	北宋嘉祐元年(1056)	

表4　出土銅銭一覧表

多数検出されたピットのうち、1トレンチP_{40}、2トレンチP_1・P_3・P_4・P_5・P_6からは、柱材が出土している（第36図）。



I．灰黒色粘土層（覆土）
II．淡黄灰色粘質土層（地山）
III．黄青灰色粘質土層（地山）

(S＝1：40)

第36図　白石遺跡　2トレンチP_3～P_6セクション

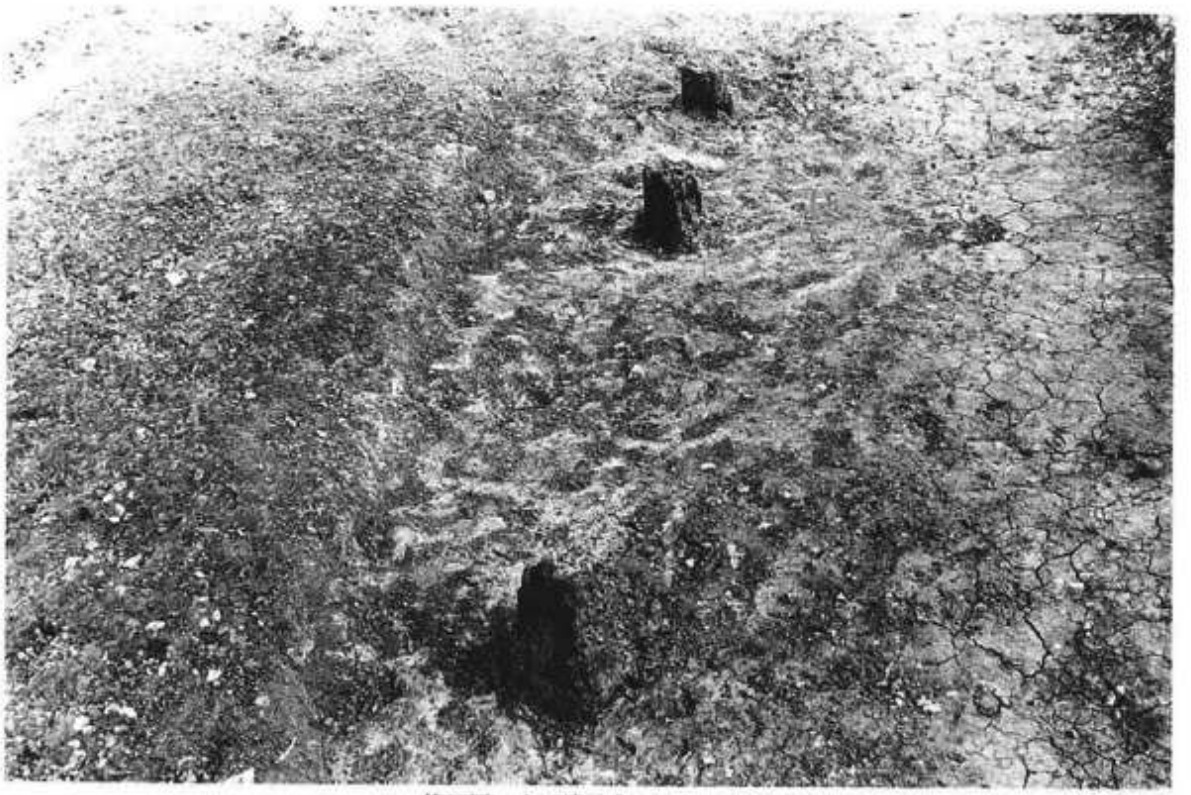
Ⅴ ま と め

峯遺跡　当初予想されたように遺構の密度は低かったものの、峯遺跡では古墳時代の早い段階から人々の生活が営まれていたことが確認された。古墳時代以前もしくは古墳時代以降に、人々がどこに移動していったのかは、今後の当地域の発掘調査により明らかになっていくであろう。

トレンチ調査の結果、峯遺跡の範囲はあまり大きくないと思われる。

白石遺跡　白石遺跡の調査は、今回で3回目を数えることとなった。面としての調査を初めて行った先回に続き、今回の調査は、より広い範囲においての遺構を確認することが目標であった。結果としては、今回報告した1号落ちこみのほかに溝状遺構・ピット群が検出されている。先回の調査でも同様の溝状遺構とピット群が検出されており、これらの遺構の性格・時期について興味がもたれるところであるが、不明な点が多く、明確な結論を出すには至っていない。

1号落ちこみとして検出された池状の遺構の時期については、伴出遺物が少なく明確ではないものの、古くても平安時代を遡るものではないと思われる。遺構の性格は、多数のピットと、付帯すると思われる溝状遺構との関わりがそのカギを握っているようである。

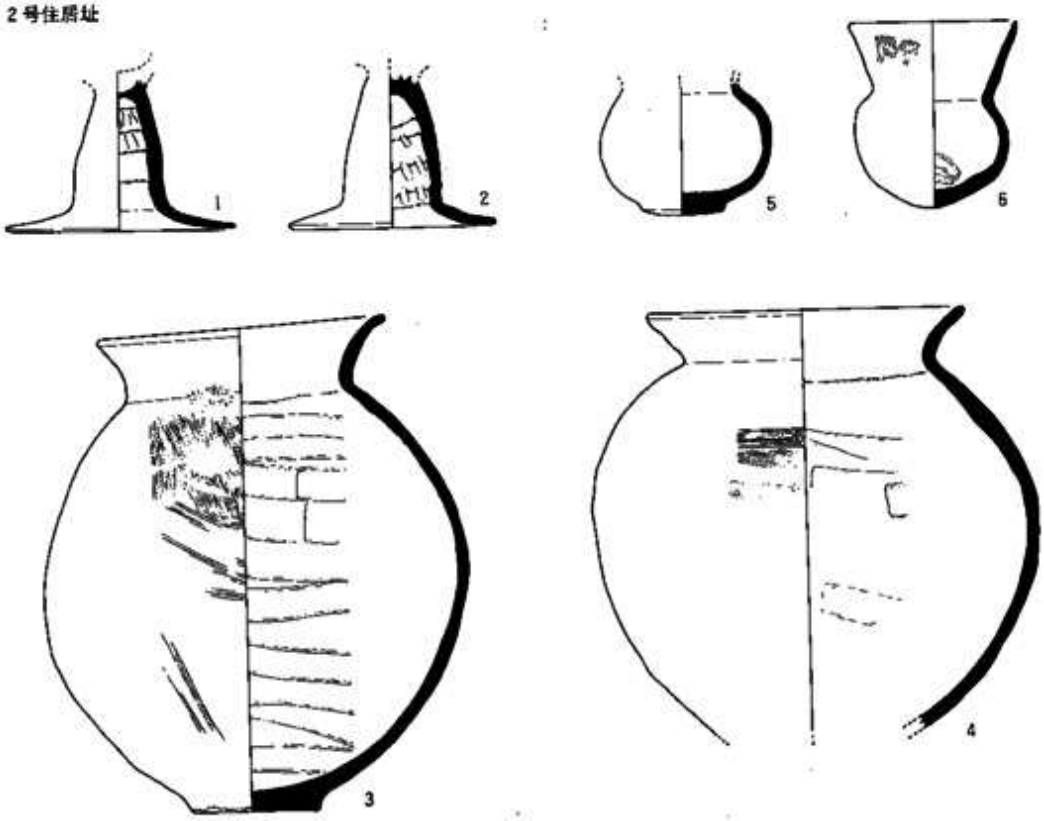


第37図　白石遺跡2トレンチ P_3 ～ P_5

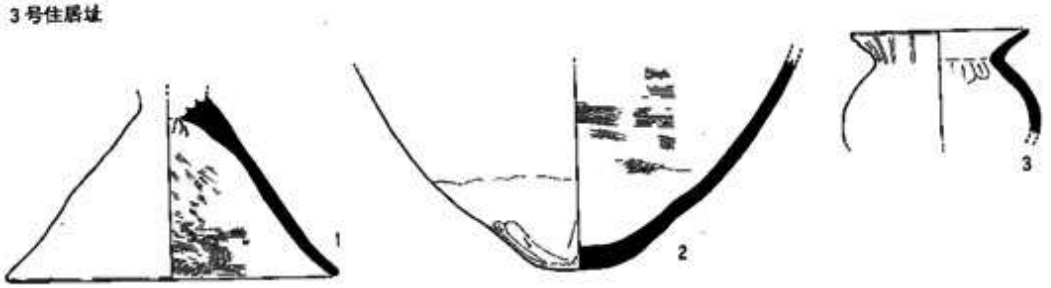
図版34

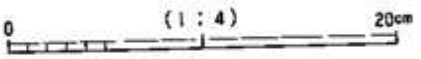
峯遺跡

2号住居址

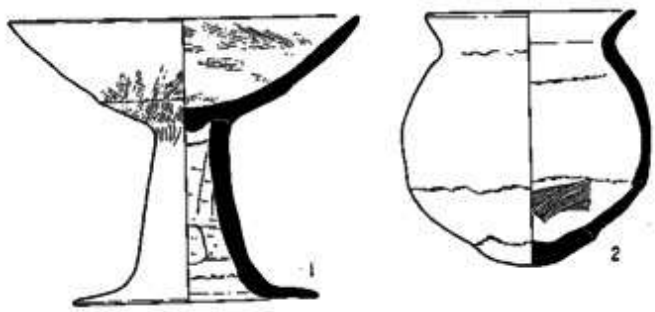


3号住居址

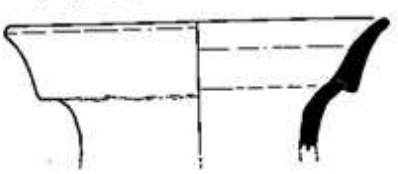




1号土坑

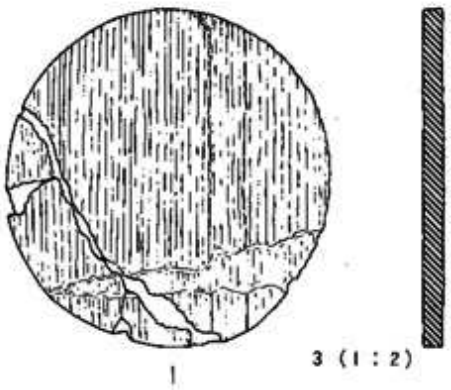


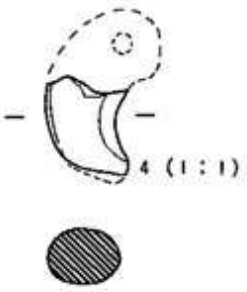
その他の遺物



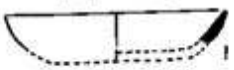
白石遺跡

1号落ちこみ

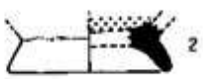




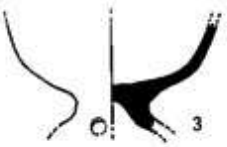
その他の遺物　(1トレンチ)



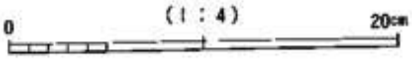
(1トレンチ P40)



(2トレンチ)



(3トレンチ)



(2トレンチ)

(6・7＝1：2)

(1トレンチ)

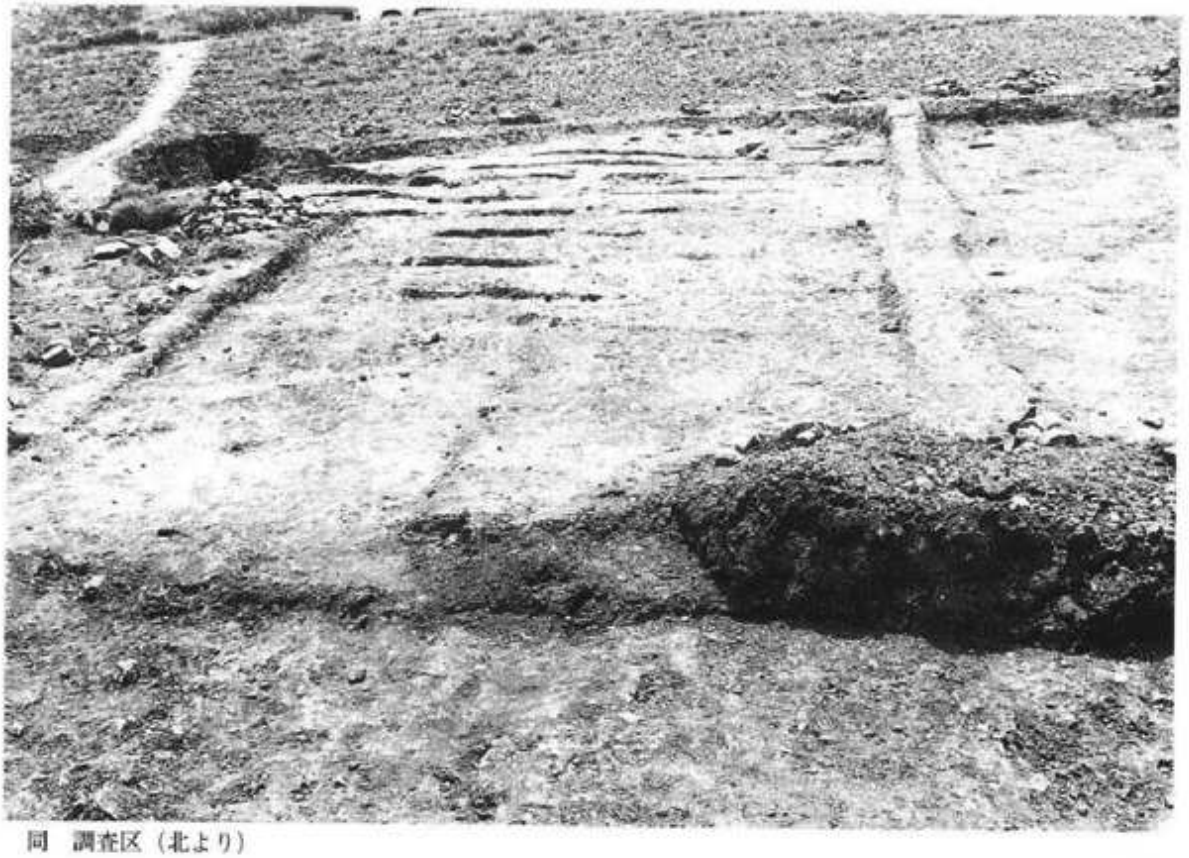
(8－10＝1：1)

図版36

峯遺跡　調査区遠景（南東より）

同　調査区遠景（北より）

峯遺跡　調査区全景（西より）



同　調査区（北より）

図版38

峯遺跡　1トレンチ（東より）

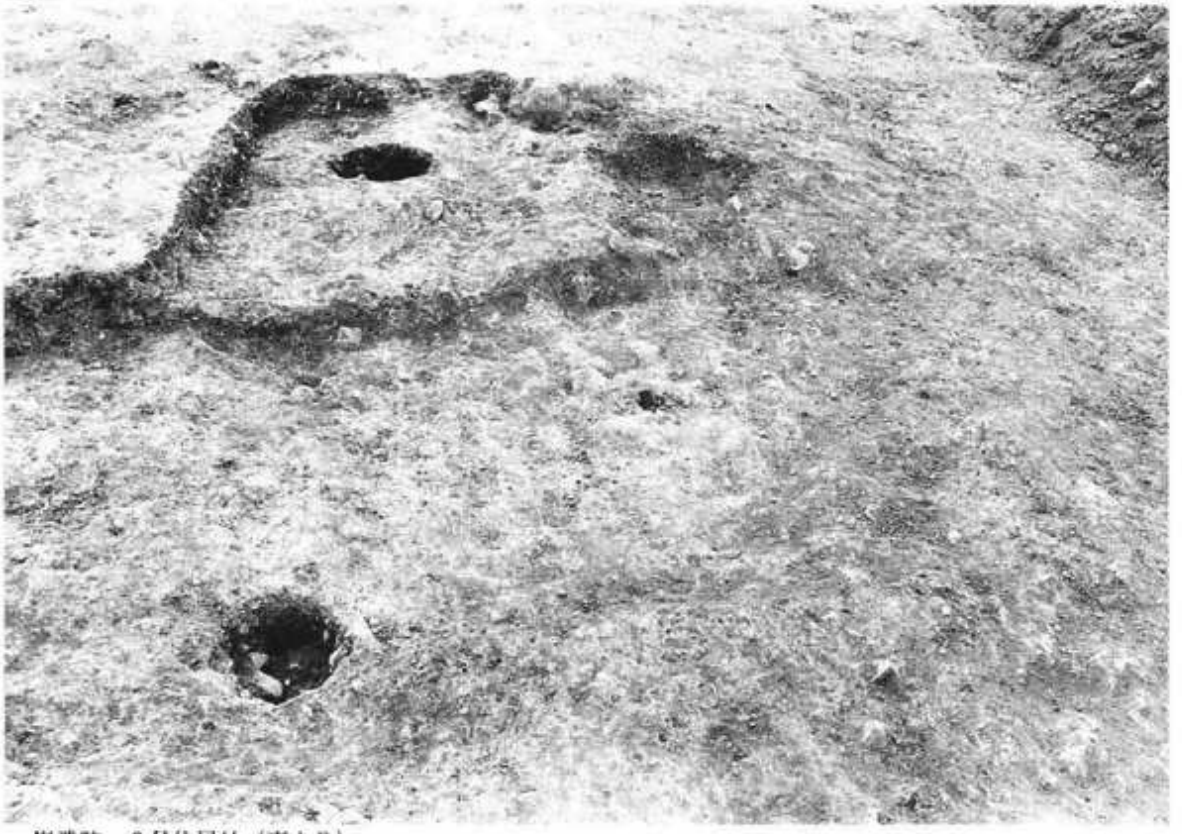
同　2トレンチ（東より）

同　調査風景

峯遺跡　2号住居址（西より）

同　2号住居址と1号土坑（北西より）

図版40



峯遺跡　3号住居址（東より）

同　3号住居址（北より）

峯遺跡　1号土坑（南より）

同　2号土坑（北より）

図版42

白石遺跡　調査区遠景（西より）

同　2トレンチ

白石遺跡　1トレンチ（西より）

同　3トレンチ（西より）

図版44

白石遺跡　1トレンチ下セクション（北より）

同　2トレンチ下セクション

同　1号落ちこみ（南より）

白石遺跡　1号落ちこみ（南より）

同　1号落ちこみ（東より）

図版46

峯遺跡

2住－3

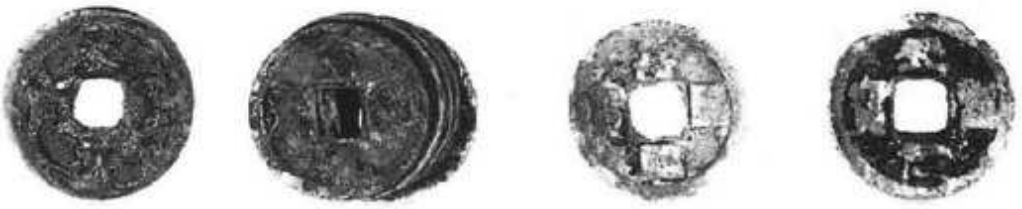
2住－6

1土－1

2住－4

1土－2

白石遺跡



（1：1）

5　松ヶ崎遺跡　発掘調査

I　調査の概要

1　調査遺跡名　屋代遺跡群松ヶ崎遺跡（市No.31－6　調査記号MGS）

2　所在地及び　長野県更埴市大字屋代字松ヶ崎

　土地所有者　更埴市

3　原因及び　高速道関連事業市道松ヶ崎線建設工事

　事業者　更埴市

4　調査の内容　発掘調査（1,400㎡）

5　調査期間　平成元年6月21日～同年9月30日（75日間）

6　調査費用　総額5,884,933円　全額事業者負担

7　調査主体者　更埴市教育委員会

　担当者　山根洋子

　調査員　贄田　明　小野紀男

　補助員　笹澤正史

　参加者　秋里孝太郎　市川睦雄　加古　茂　久保啓子　小林敦彦
　小林千春　小林芳白　坂口城子　佐々木佳子　篠崎節子
　清水初江　白石正生　高野貞子　中村久美子　中村文惠
　宮入由枝　村山　豊

　協力者　更埴建設

8　種別・時期　集落址・水田址　平安時代～中世

9　遺構・遺物　平安時代　水田址（畦畔2基）
　住居址47棟・溝址22基・土坑22基
　中世　溝址4基・土坑18基
　ピット群
　出土遺物総数　土器片コンテナ50箱　金属器10点

II　調査の経過

昭和63年12月10日に高速道関連事業の協議が行われ、市道松ヶ崎線の拡幅が行われることとなった。一帯は城ノ内遺跡に隣接する地域であり、更埴市でも遺跡の集中する地域であるため、発掘調査計画書の作成に入った。平成元年に入り、1月18日に拡幅から新たに道路を建設するよう変更となったため、改めて調査計画の作成に入った。5月31日に市商工観光課と協議が行われ、道路延長が250mから285mに、工事による掘り下げが65cmから95cmにそれぞれ変更となった。したがって再度調査計画の作成が必要となった。また調査面積の増加により、工事開始予定の7月15日までに調査を完了することが不可能となったため、調査区を2分し、第1区を7月15日までに完了することとした。6月7日に市商工観光課より57条の通知があり、6月14日に98条を文化庁へ提出した。6月19日に地元関係者への説明会があり、発掘調査への協力を依頼した。6月21日より発掘調査開始、途中湧水が激しく調査が中断されることもあったが、8月11日に第1区を、9月30日に第2区の調査を無事完了することができた。

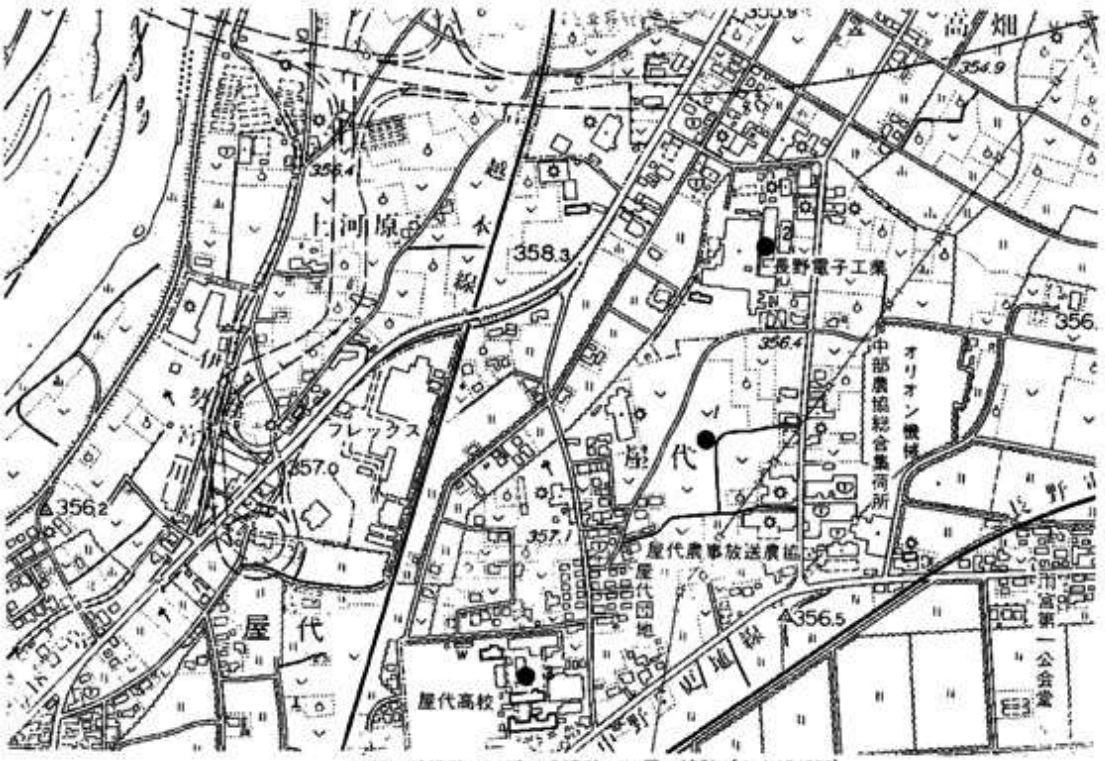
III　調査日誌

6月21～27日　重機により表土剝ぎ、トラックによる排土を行う。
22日　作業員が入り、遺構検出を開始する。
7月8日　0～80グリッドの水田面（上層）の調査を完了する。
10日　重機を使い、水田土壌を取り除く。
12日　湧水が激しくなり、水中ポンプを使って排水を始める。
24～27日　重機を入れ、80～125グリッドの表土剝ぎを行う。
湧水激しい。
8月11日　0～125グリッド（第1工区分）の調査を完了する。
17日　200～260グリッド（第2工区分）の調査を開始する。重機とトラックにより掘削・排土を行う。水中ポンプで排水を始める。
18日　作業員が入る。ひき続き重機による掘削・排土を行う。
19日　湧水が激しく手におえないため、作業員を休みにする。
21日　ポンプの排水能力よりも湧水が上回るため、電気の仮設を行い、1日中排水を行う。
9月7・8日　重機により260～310グリッドの掘削を行う。
20・21日　大雨の影響で湧水が激しく、調査区が水没する。
30日　現場作業を完了する。
雨のため作業を中止した日　6.5日

Ⅳ　遺跡の環境

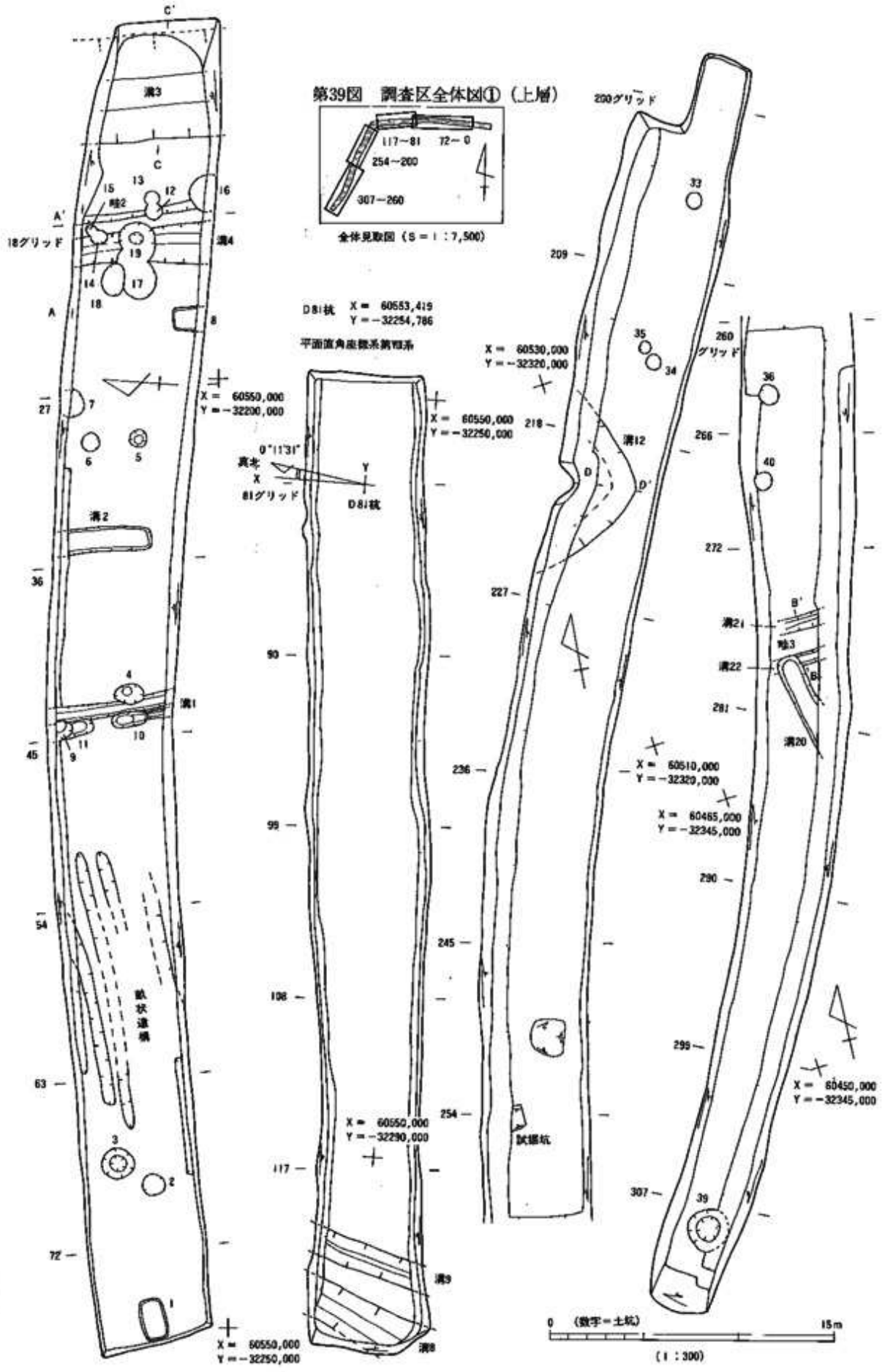
松ヶ崎遺跡が位置している善光寺平南端では、北流してきた千曲川が犀川扇状地に行く手を阻まれ、東へと流路を変えている。この曲流点の内側には長大な自然堤防が形成されており、自然堤防上には松ヶ崎遺跡をはじめ古墳～平安時代の集落が分布し、これまでに城ノ内遺跡、下条・灰塚遺跡、大境遺跡などが調査されている。南側の後背湿地には、平安時代の遺構が検出された更埴条里水田址が展開しており、昭和40年代には場整備を行うまで、この後背湿地には条里制の遺構が畦畔としてそのまま残されていたのである。そして、城ノ内遺跡等と前後して築かれたとされる森将軍塚・倉科将軍塚・土口将軍塚の３基の前方後円墳とは指呼の間にある。

松ヶ崎遺跡の現地表の標高は約356.5m前後であり、遺構検出面は地表下0.7～１m付近にあるから、当時の生活面は居住域で標高約355.8m、水田域では約355･5mを示す。

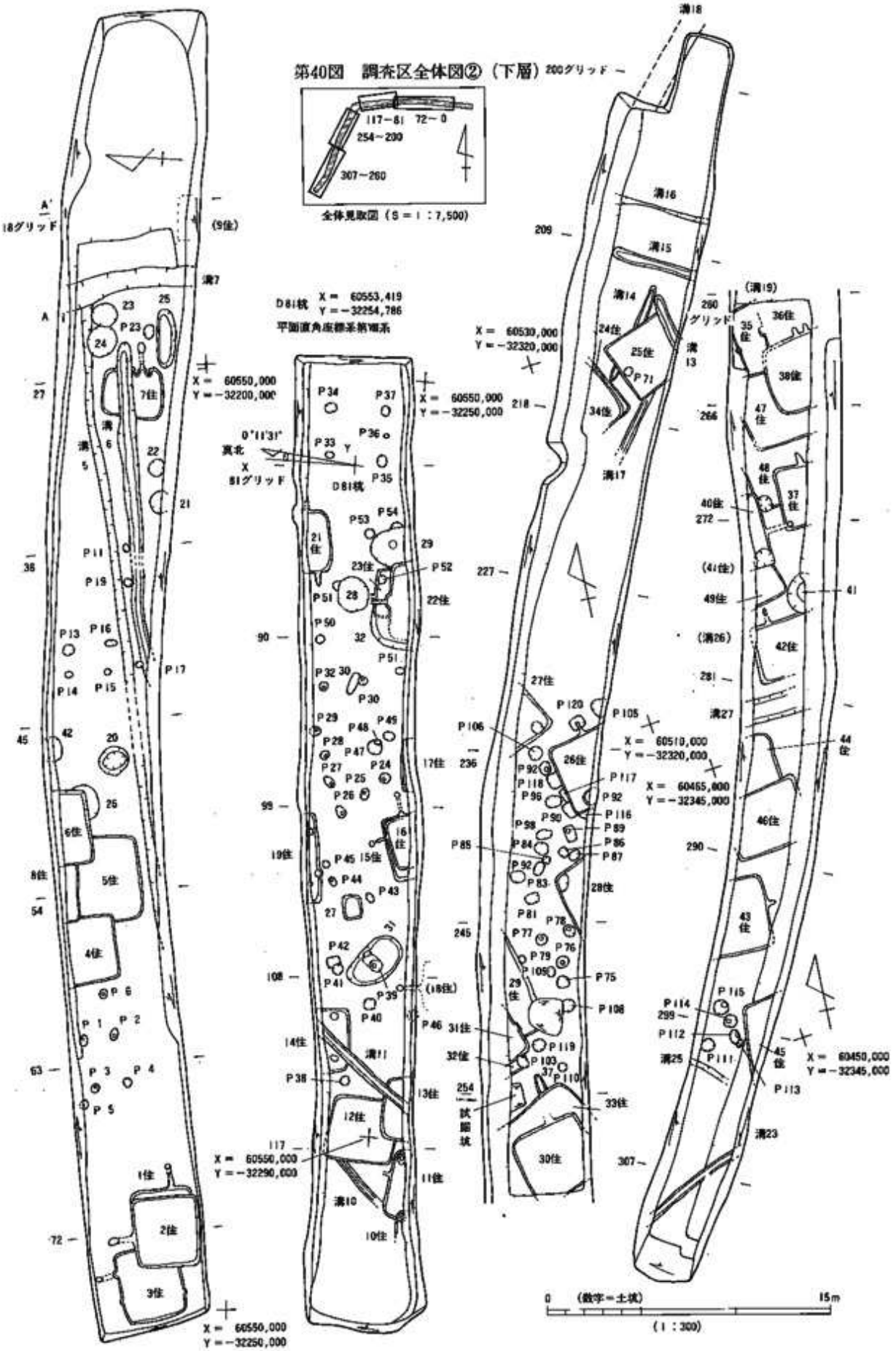


1 松ヶ崎遺跡 2 城ノ内遺跡 3 馬口遺跡（1：10,000）

第38図　遺跡位置図



第39図　調査区全体図①（上層）
全体見取図（S＝1：7,500）
117～81
72～0
254～200
307～260
D81杭　X＝60553,419
Y＝－32254,786
平面直角座標系第四系
0°11'31"
真北
81グリッド
D81杭
X＝60550,000
Y＝－32200,000
X＝60550,000
Y＝－32250,000
X＝60550,000
Y＝－32290,000
X＝60550,000
Y＝－32250,000
X＝60530,000
Y＝－32320,000
X＝60510,000
Y＝－32320,000
X＝60465,000
Y＝－32345,000
X＝60450,000
Y＝－32345,000
18グリッド
200グリッド
260グリッド
溝1
溝2
溝3
溝4
溝8
溝9
溝12
溝20
溝21
溝22
畦2
畦3
試掘坑
0　（数字＝土坑）　15m
（1：300）


第40図　調査区全体図②（下層）
200グリッド
117－81　72－0
254－200
307－260
全体見取図（S＝1：7,500）
D81杭　X＝60553,419　Y＝－32254,786
平面直角座標系第Ⅷ系
X＝60550,000　Y＝－32200,000
X＝60550,000　Y＝－32250,000
X＝60550,000　Y＝－32290,000
X＝60550,000　Y＝－32250,000
X＝60530,000　Y＝－32320,000
X＝60510,000　Y＝－32320,000
X＝60465,000　Y＝－32345,000
X＝60450,000　Y＝－32345,000
0°11'31"
真北
A'
18グリッド
A
81グリッド
260グリッド
溝18
溝16
溝15
溝14
溝13
溝17
溝7
溝6
溝5
溝11
溝10
溝27
溝25
溝23
(溝19)
(溝26)
(9住)
(18住)
1住
2住
3住
4住
5住
6住
7住
10住
11住
12住
13住
14住
15住
16住
17住
19住
21住
22住
23住
24住
25住
26住
27住
28住
29住
30住
31住
32住
33住
34住
35住
36住
37住
38住
40住
41住
42住
43住
44住
45住
46住
47住
48住
49住
試掘坑
0　(数字＝土坑)　15m
(1：300)

V　遺構と遺物

平安時代の住居址47棟・水田址（畦畔２本）、中世の溝址４基のほか土坑40基、溝址22基およびピット群などが検出された。

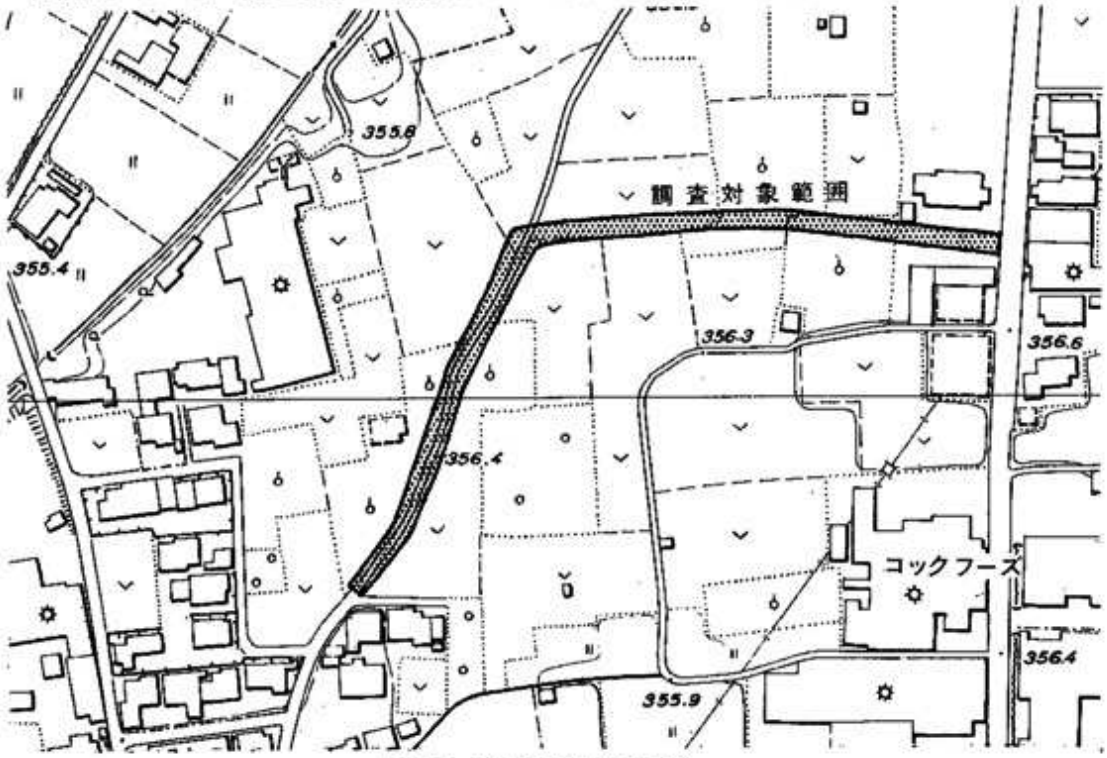
１号住居址
（図版47・53）

72坑付近で水田土壌の暗灰色粘土が落ちこんでいる地点があり、精査したところ検出された方形の住居址で、２号住居址を切って構築されている。床面直上には灰色粘土の層があり貼床の可能性がある。規模は3.3×3.7mで、東側にカマドをもつ。長さ約1.2mの煙道の出口には、径約30cmの煙出しの穴をとり囲むようにして、拳大の礫が数個配されている。また、カマドの袖部分には、袖の芯に用いられた礫が残っている。カマド付近からは２つのピットが検出された。

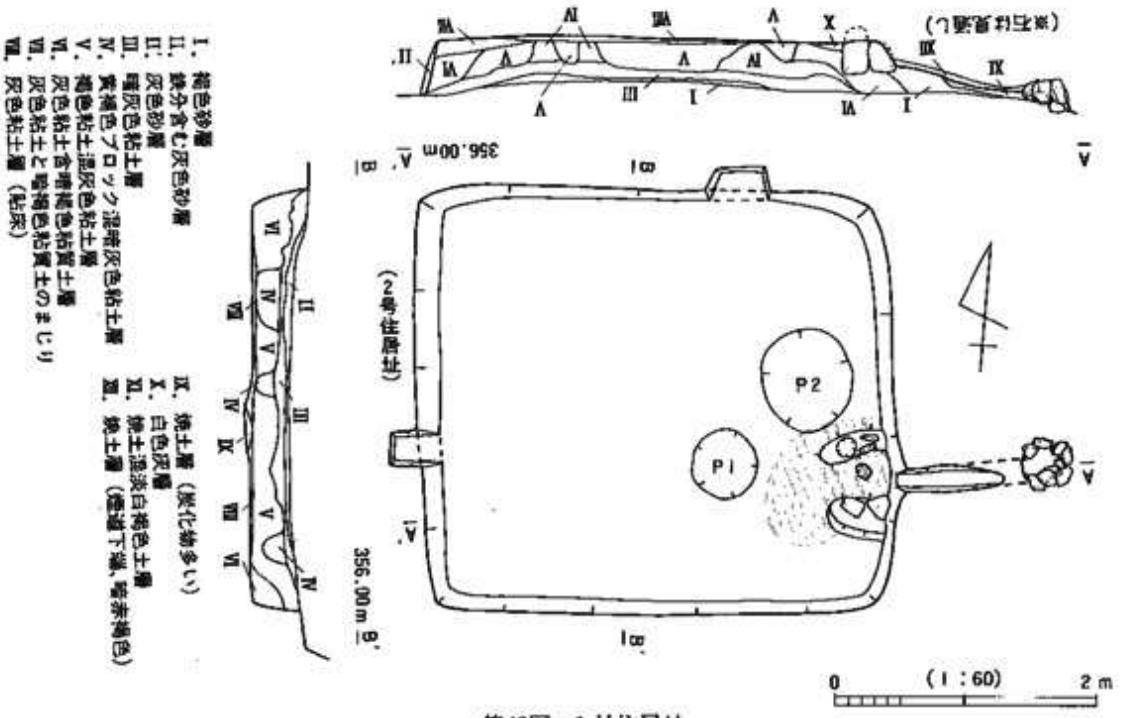
遺物は土師器・須恵器が出土している。１・２は内面黒色処理された土師器坏で、２は底部に回転糸切り痕がみられる。３は須恵器坏で、底部は回転糸切りされている。４は土師器甕で器厚は約６㎜と厚く、外面にはロクロナデの凹凸が顕著に残っている。５の須恵器甕は、外面下半部に回転ヘラケズリを施している。

15号住居址
（図版47・54・55）

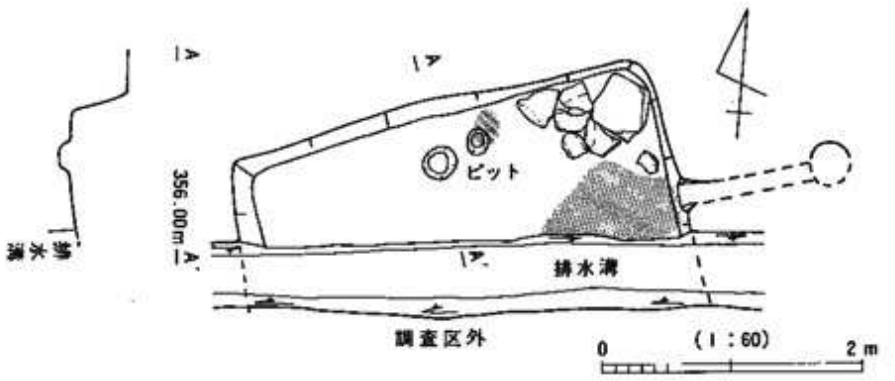
99杭付近で検出された住居址で、南側は調査区外へ延びている。16号住居址を切って構築されており、一辺約3.4mの規模を測り、東側にカマド



第41図　調査位置図(1:2,500)



第42図　1号住居址



第43図　15号住居址

をもつ。北東隅には平石が6枚ほど敷かれ、その付近から灰釉陶器が出土している。柱穴と思われるピットは検出されなかった。

遺物は土師器・須恵器・灰釉陶器が出土している。1・2は内面黒色処理された土師器坏、3・4は須恵器坏で、いずれも底部調整は回転糸切りである。5は平石敷上より出土した灰釉陶器碗で、底部調整は回転ヘラケズリ、釉は漬け掛けされている。6は土師器甕の口縁部である。

26号住居址
(図版47・55)

236杭付近で検出され、一辺約3.9mを測る住居址である。東側は調査区外へ延び、カマドを北側にもつ。カマドは両袖部を残しており、炭化物・焼土が顕著である。住居址床面は、締まりがなくはっきりしない。特に西壁付近は壁・床ともにはっきりせず、段差が確認されている。このような段は27・31号住居址でも検出されている。柱穴は確認できなかった。

遺物は土師器・須恵器が出土しており、カマド付近を中心に出土量は多い。1～3は共に底部回転糸切りを施した須恵器坏である。4は土師器で鉢になると思われる。外面はヘラケズリ、内面にはナデを施しており、内面にはススが付着している。5は所謂武蔵型の甕で、頸部から口縁部にかけて「コ」の字状を呈する。器壁は3～4㎜と非常に薄く、頸部付近までヘラケズリを施している。6は土師器甕で、平底の底部はヘラケズリを施している。外面下半にはヘラケズリを施し、内面はハケで調整している。

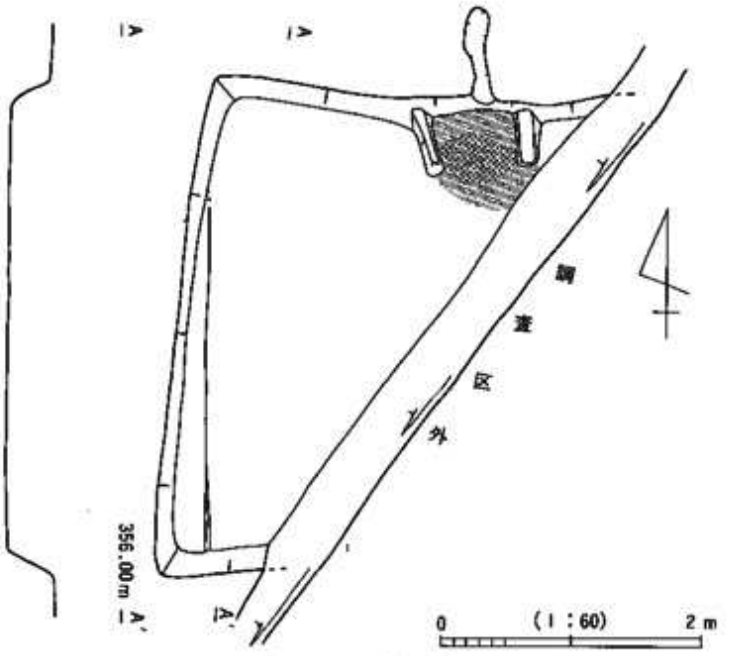
44号住居址
(図版48・55)

281～290杭間で検出された住居址で、46号住居址を切っているが、床面は44号住居址の方が高い。規模は一辺約4mで、北西側半分は調査区外へ延びている。カマドは検出されなかったが、北東隅の礫が散在している付近に黒色灰が顕著なため、北側壁にカマドをもつと思われる。住居址中央の床面は顕著であるが、柱穴は確認できなかった。

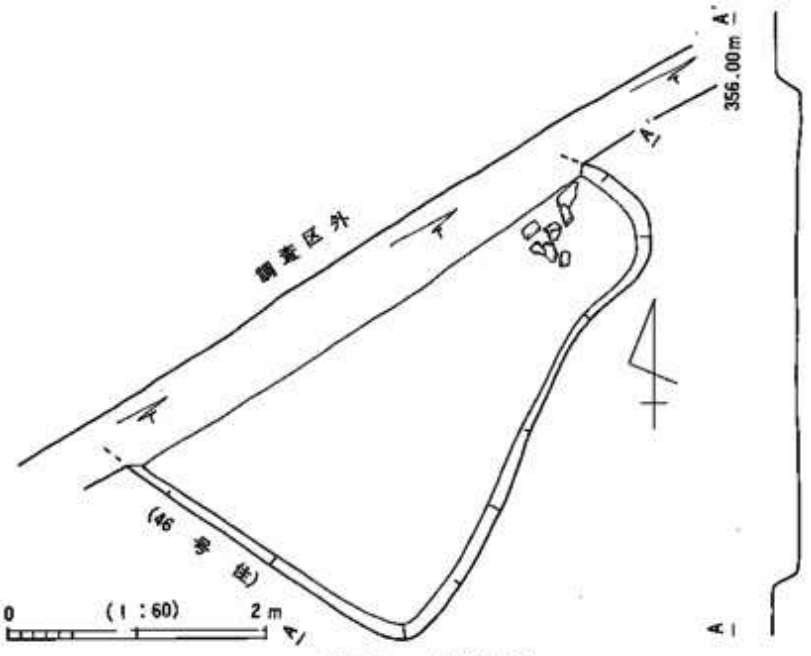
遺物は土師器・須恵器・鉄製品・石器がある。1～3は内面黒色処理された土師器坏で、1には底部回転糸切痕をのこす。2は内面上半に稜線をもち、そこから口縁端部に向かって外開していく。内面下半に放射状、上半には平行して施された暗文が見られる。3は径15.4cmと大形で、口縁端部はやや外反する。4は内外黒色処理された皿で、口縁端部はわずかに外反している。5・6は土師器甕で、5は内外面をナデで調整している。6は外面肩部から下半にかけてヘラケズリを施し、内面をハケで整えたあと底部付近をユビによるナデで仕上げている。口縁端部はわずかに外反する。7は土錘で、焼成はややあまいが灰褐色を呈し、外面には全体にススのようなものの付着がみられる。43号住居址からも土錘が出土しており、その大きさは約3cmと小形である。

2号畦畔
(図版48)

18杭付近で検出され、ほぼ南北に走る畦畔である。畦畔の幅は、基部が1.6～2m、上端で0.6～0.9mを測り、高さは約0.3m程である。西側には石の裏込めをもつ4号溝址が隣接しており2号畦畔に伴う遺構と思われる。2号畦畔および4号溝址を境に東西の水田面の高さが異なり、西側より東側の方が40cmほど低くなっている。同様に、45杭付近で検出された1号溝址を挟んで、西側より東側の方が10cm高くなっており、1号溝址と2号畦



第44図　26号住居址



第45図　44号住居址

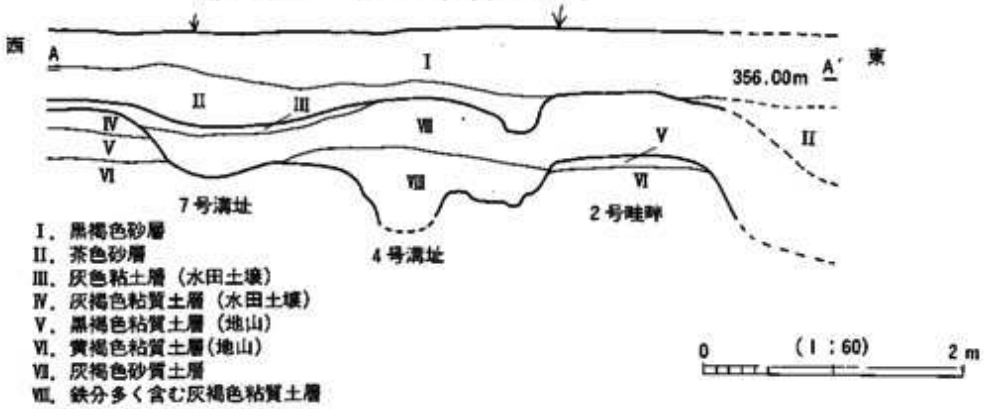
畔の間は、微高地となっている。

遺物は畦畔土壌内から土師器・須恵器が出土している。1は底部回転糸切りされた須恵器坏、2は口径5.8cmと小形の須恵器埦である。3は須恵器甕で、口縁端部はつまみ出して、鋭くなっている。4は小形の土師器壺で口径10.8cm、胎土良好でつくりもていねいである。

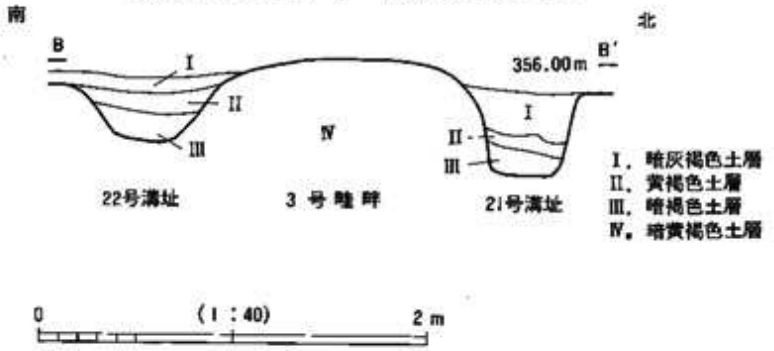
3号畦畔
(図版48・56)

272～281杭間で検出され、ほぼ東西方向を走る畦畔である。北側は21号溝址、南側には22号溝址が平行に並んでおり、3号畦畔と同時期に構築されたと考えられる。21号溝址は41号土坑を、22号溝址は42号住居址をそれぞれ切っており、3号畦畔はそれら土坑、住居址の上に構築されている。規模は上端が約1.2m、基部はそれぞれの溝の底部で約1.6m、高さ（深さ）は21号溝址（北）側で約0.5m、22号溝址（南側）で約0.4mを測る。

遺物は溝址から出土したものを図示した。土師器・須恵器・灰釉陶器が出土している。21号溝址の1は内面黒色処理された坏で、底部は回転糸切りされている。2は灰釉陶器の碗で、口縁端部は外反しており、釉はハケ塗りされている。22号溝址の1は内面黒色処理された坏で、底部から口縁部に向かって徐々に外開している。



第46図　2号畦畔，4・7号溝址セクション

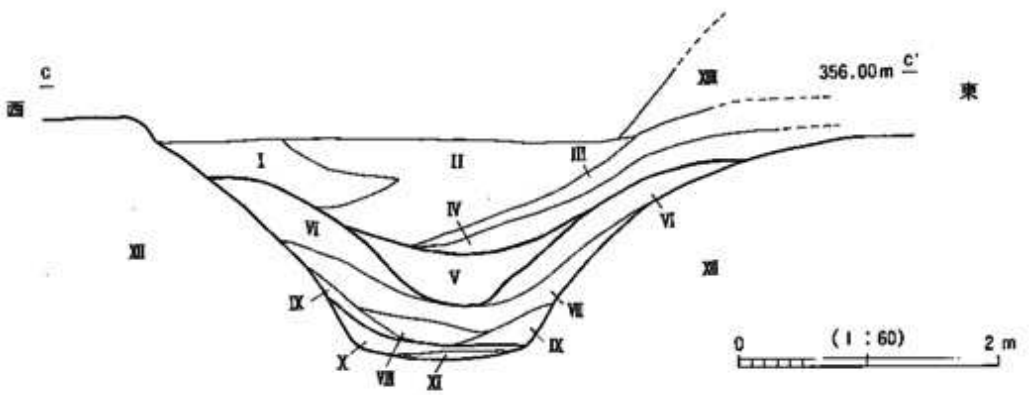


第47図　3号畦畔，21・22号溝址セクション

3号溝址　調査区東端部で検出された大形の溝址である。やや東西へ振りながら、

(図版49・54・55)　ほぼ南北方向に走っている。規模は、東側が一部撹乱されていたためはっきりしないが、幅が底部で約1.3m、上端で約5m、深さは約2mを測る。一度に埋まった、あるいは埋められたものでなく、徐々に埋まっていった様相を呈し、最下層と、埋没第3段階では水が流れた痕跡を示している。

遺物は土師器・灰釉陶器・内耳鍋・石臼・石塔・銅銭等が出土している。1・2は所謂かわらけと呼ばれる土師質土器小皿で、ともに淡黄褐色を呈する。3は灰釉陶器碗で、器厚4mmと厚手の体部は上方へ外開している。4は内耳鍋で、内耳の部分は紐状の取手を胴部に差しこむようにして装着しており、特徴的である。5は土師質の甕と思われるが、内外面にかけてていねいにヘラミガキが施されるものである。外面口縁部付近に黒斑がみられる。6は石塔の頭部にあたる部分で、他に同一個体と思われる破片が数点出土しているが全容は不明である。7は粉挽き臼の上臼で、溝の区画は八分画を示している。かなり使用されたものらしく、すり合わせ部は光沢をもっている。8は溝内上層から、9は溝内下層から出土した銅銭である。8は明銭である洪武通宝で、初鋳年は1368年。9は北宋銭である祥符通宝で、初鋳年は1009年。



I．灰褐色粘質土層
II．黄褐色粘土ブロック含む茶褐色砂質土層
III．細かい黄褐色粘土ブロック含む灰褐色砂質土層
IV．黄褐色粘土ブロック含む灰褐色砂質土層
V．青色および灰色粘土層
(埋没第3段階 水路の時の沈澱層)
(埋没第4段階)

VI．灰褐色砂質土層
VII．鉄分を多く含む灰褐色砂質土層
VIII．灰褐色砂質土層
IX．黄褐色粘質土層
(埋没第2段階 壁が崩落している)
X．灰色砂質土層
XI．明茶褐色粘質土層
(埋没第1段階 XI層は水路の時の沈澱層)

XII．黄褐色砂質土層（地山）
XIII．盛土層

第48図　3号溝址セクション

12号溝址　218杭付近で検出された溝址で、大形の溝が屈曲する角の部分である。

（図版49）　規模は角のため幅は推定だが2.2m以上、深さは約1.4mを測る。3号溝址に比べて覆土は均一で、短期間に埋まった様相を呈している。

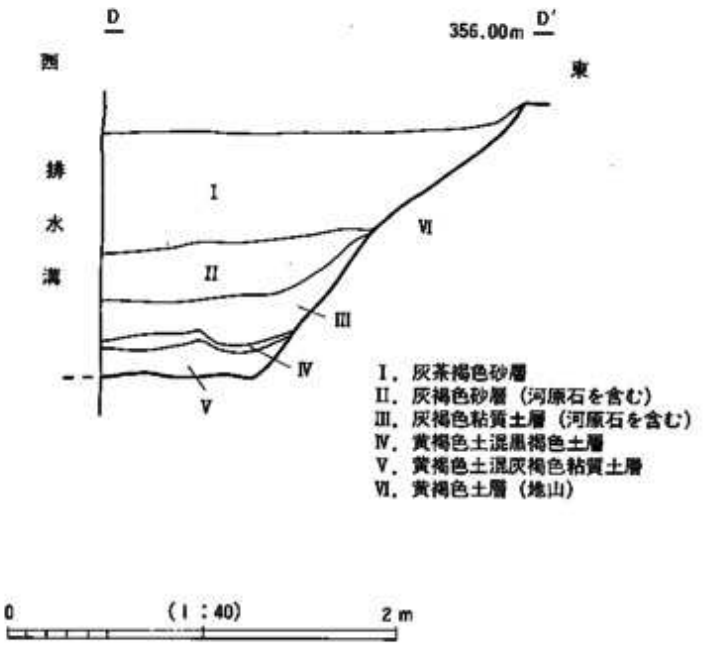
遺物は土師器等が出土している。1は内面黒色処理された土師器坏、2は内耳鍋である。3は珠洲系の擂鉢で、内面と底部が顕著に磨滅しており、内面にはススが付着している。

その他の遺物

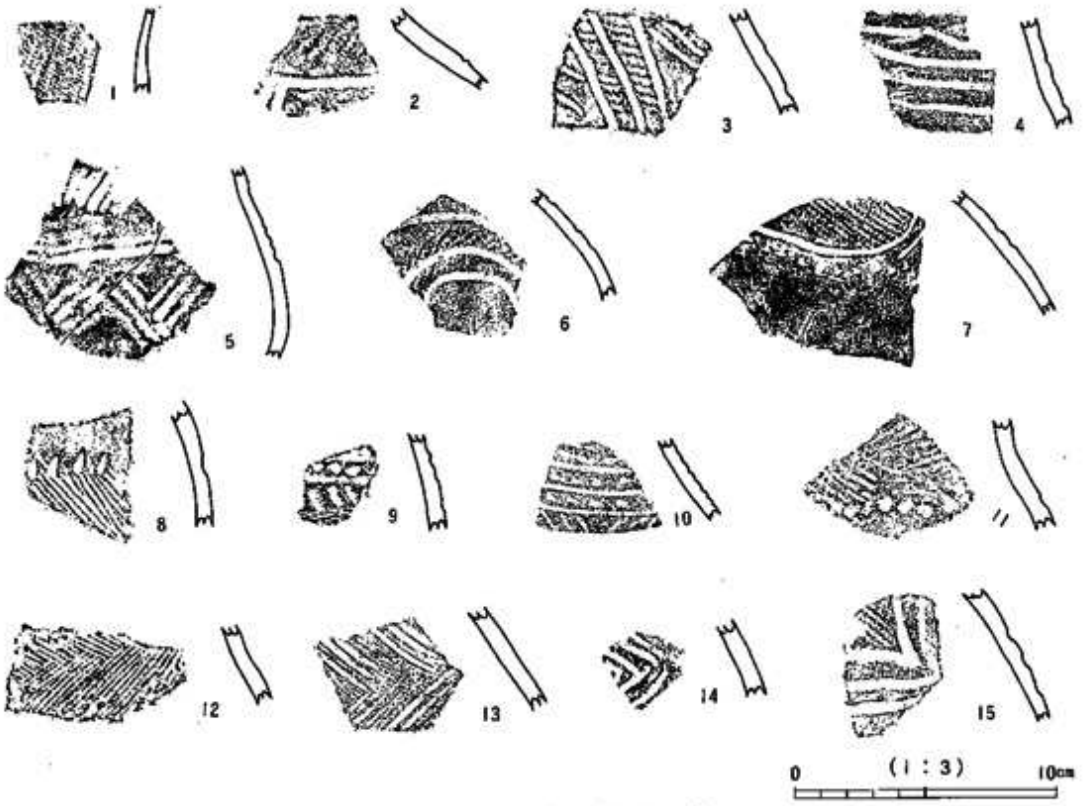
（図版48・56）　6号溝址から出土した1は底部回転ヘラケズりされた須恵器坏、2は外面にタタキをもつ須恵器甕で、口縁端部は鋭くつまみ出している。3は紡錘形の土製品で、側面に2ヶ所「卍」と線刻されている。

8号溝址から出土した1は内面黒色処理された底部ヘラケズりの土師器坏、2・3は須恵器坏で2の底部は回転糸切り、3の底部にはナデを施している。4は須恵器壺と思われるが、内面下半にはハケ状工具による調整、外面はタタキのちカキメ、ヘラケズりを施している。5は須恵器短頸壺で、器厚が約5㎜と薄手である。

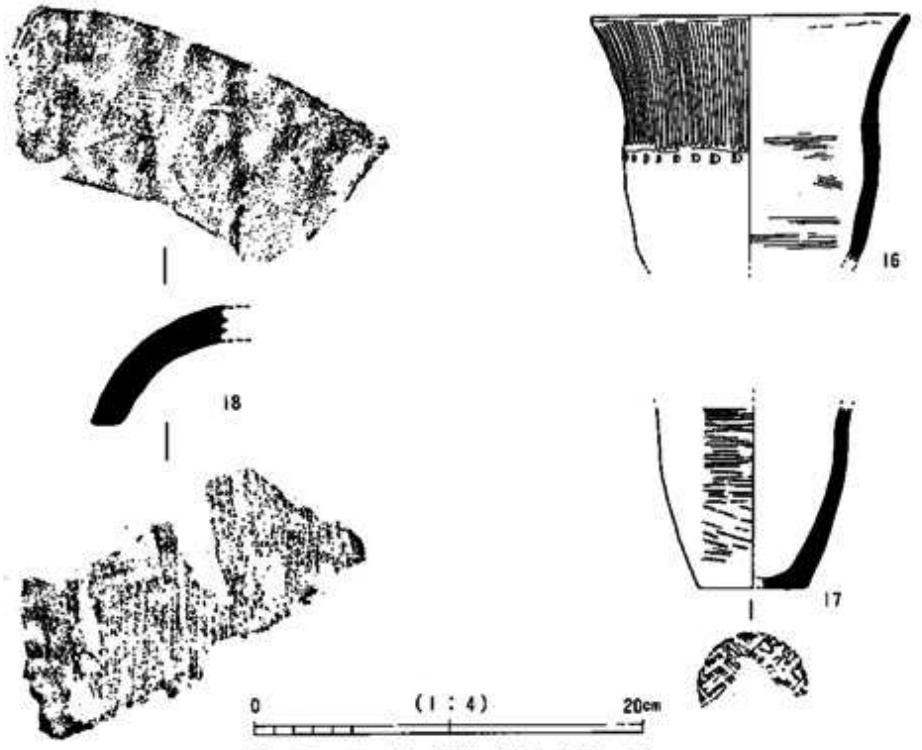
9号溝址からは須恵器高盤が出土している。



第49図　12号溝址セクション



第50図　その他の遺物（弥生土器）



第51図　その他の遺物（弥生土器・瓦）

遺構は検出されなかったが、弥生時代の遺物が出土している。

1～4は新諏訪町式、5～17は栗林式に属すると思われる一群で、いずれも弥生中期の所産である。弥生後期～古墳時代の遺物は出土していない。

18は17号土坑から出土した平瓦である。外面はヘラケズリを施し、内面には布目が残っている。

VI まとめ

今回の調査は市道建設に伴うもので幅約5m、全長約235mという細長いトレンチを調査することとなった。幅が狭いため全容を解明した遺構は限られるが、47棟の住居址をはじめ水田址、中世の溝址など数多くの遺構を検出した。

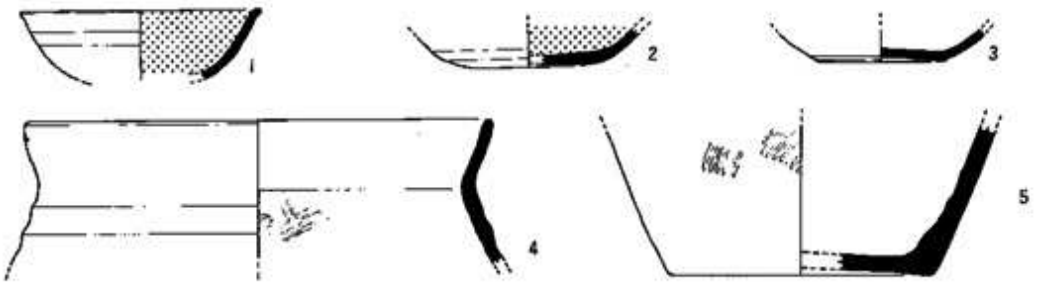
住居址は全て水田構築以前に営まれたもので、時期は平安時代とみられる。そのうち1・43号住居址は、上層の水田址を調査した際、だらだらと落ちこんでいた部分で、掘り下げていくと住居址が検出されたものである。このような落ちこみは今回他の住居址では確認されず、特徴的である。

住居址のカマドは、つくりかえが行われている21号住居址を除き、確認した中では全て北または東側に構築されている。遺構どうしの切り合いが激しいため細かな編年はむずかしいが、今後の分析のためにデータを増やすことも大切なことである。

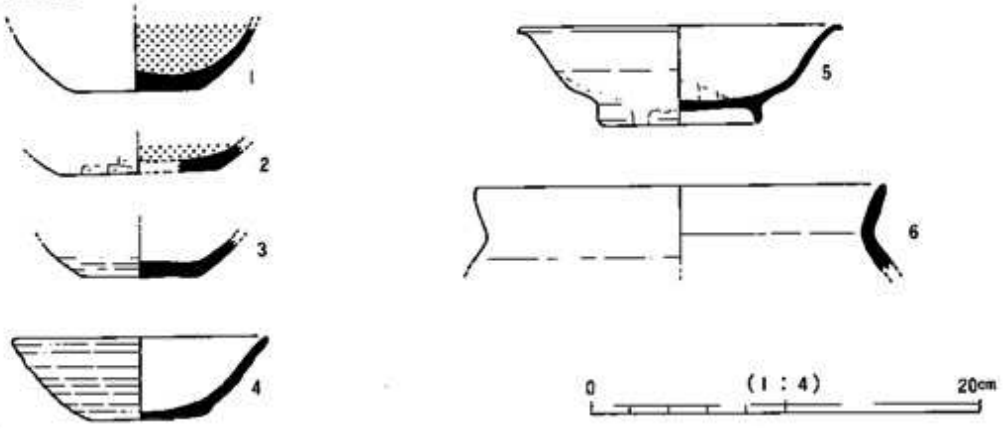
水田址はほぼ全域で検出されたが、水田土壌の厚さに幅があり、水田域の縁辺部に近いことをうかがわせる。馬口(ばぐち)遺跡・北中原(きたなかはら)遺跡と同様に、厚く堆積した砂層を取り除いただけで水田面の検出が可能であった。2本検出された大畦畔は、ほぼ予想通りの位置に出現し、更埴条里水田址との関係を示唆している。大形の畦畔と溝がセットになる例は馬口・北中原遺跡でもみられ、畦畔構築時の一般的な土木的技法であったと考えられる。今回検出された畝状遺構はこれまでに検出されている幅10cmほどのものとは異なり、約50cmほどの幅で、凹凸もなだらかである。1号溝址と2号畦畔の間の微高地は、意図的なものか偶然のものか検討の余地がある。

水田土壌を掘り下げ、砂層を覆土にもつため中世の遺構と考えられる溝址は4基、土坑は18基検出された。溝址は3・8・9・12号で、そのうち8・9号溝址は同時期の遺構の可能性がある。大形の溝である3・12号溝址はその規模や方向などから、隣接する城ノ内遺跡にあったとされる城館址との関わりが想定される。

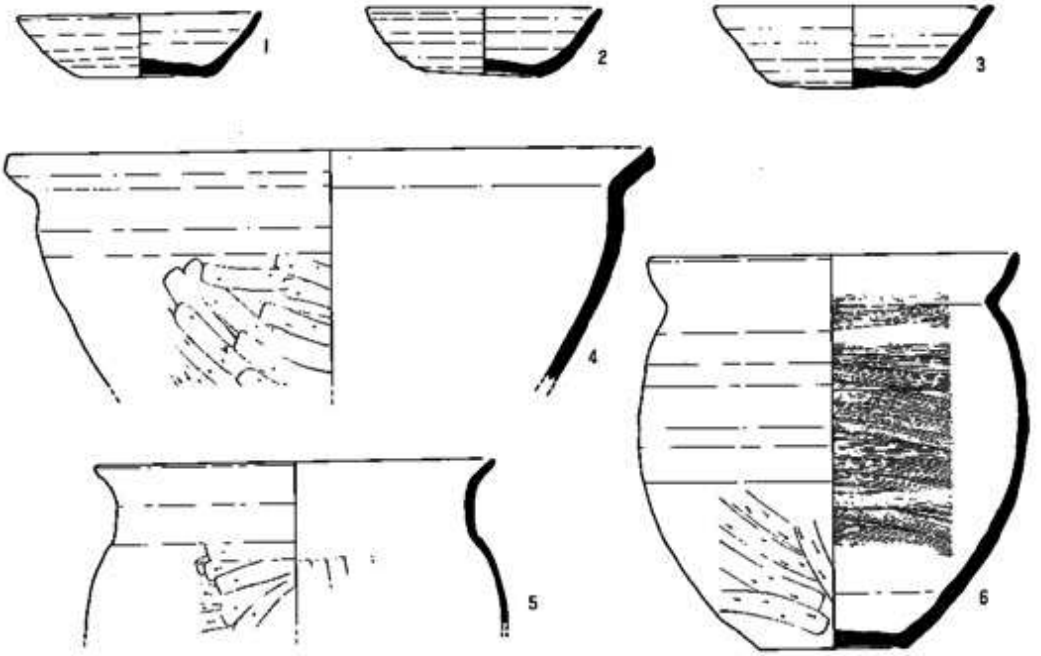
1号住居址



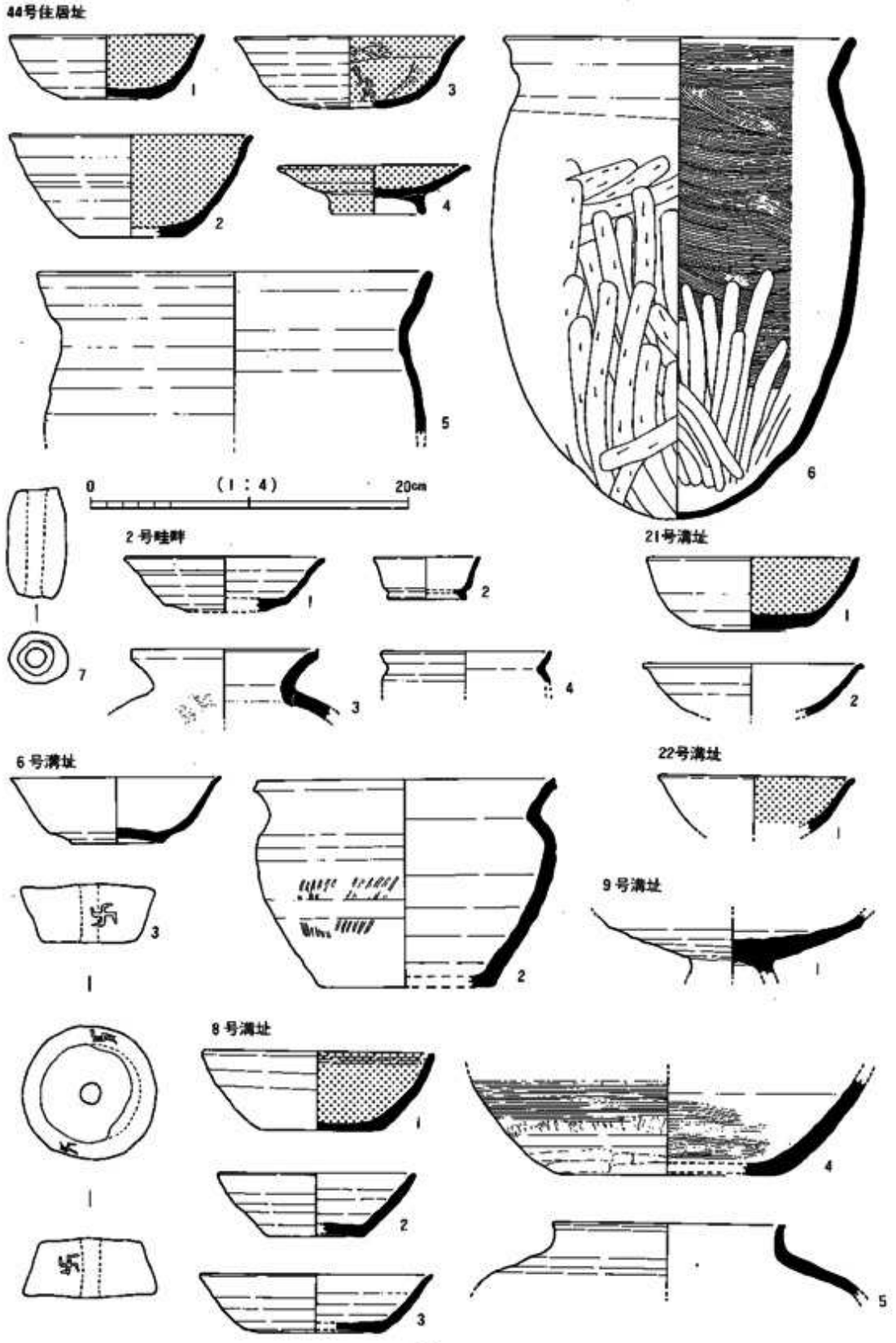
15号住居址



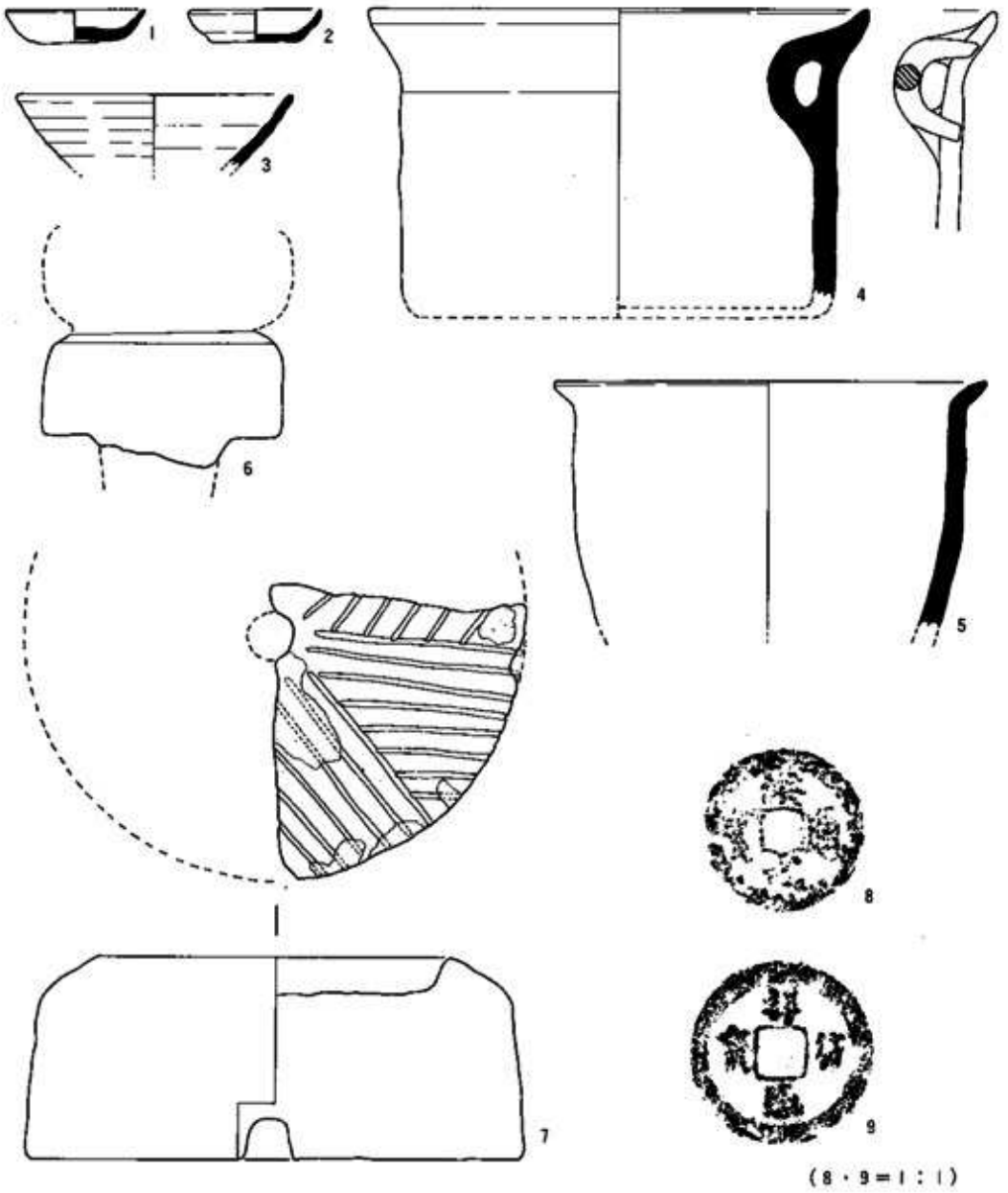
26号住居址



図版48

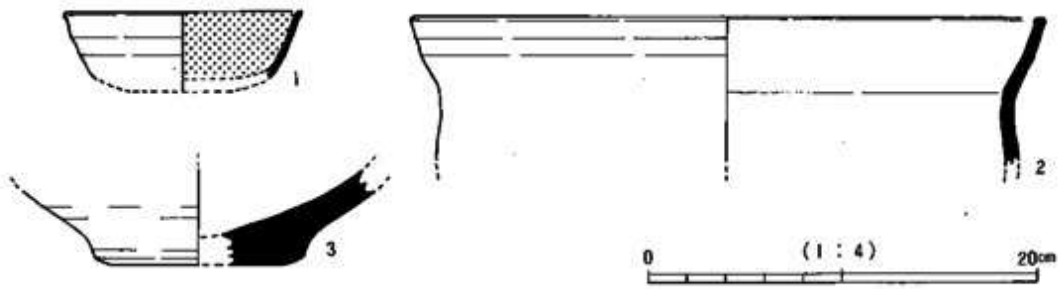

44号住居址
1
3
2
4
5
6
0
(1:4)
20cm
2号畦畔
1
2
7
3
4
21号溝址
1
2
6号溝址
3
2
1
22号溝址
1
9号溝址
1
8号溝址
1
2
3
4
5

3号溝址



(8・9＝1：1)

12号溝址



図版50

調査前風景（第１工区）（西より）

調査前風景（第２工区－１）（北より）

0～80グリッド調査終了（東より）

80～125グリッド調査終了（東より）

図版52

調査前風景（第２工区－２）（南より）

調査風景（南より）

200～260グリッド調査終了（北より）